001 目次

Features
「読」から「解」へ
1.〈論理的文章〉

構造 002 **馬場あき子「おんなの鬼」**
構文 006 **【1】リービ英雄「『there』のないカリフォルニア」**
010 **【2】杉本秀太郎『散文の日本語』**

2.〈文学的文章〉

心情把握の基本から

012 **【1】三浦哲郎「まばたき」**
014 **【2】野呂邦暢「白桃」**
018 **福永武彦『忘却の河』**

1　評論　論理読解〈構造〉把握

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

芸能に登場する鬼は、女に対して特別な関心を寄せているものが多い。女を奪い、女をさいなみ、女に憧(あこが)れ、とかく女を媒介として、この人間の世との葛藤(かっとう)に一段の花をそえているといえる。どうも、鬼と女というかかわりを考えてみると、この場合女は、鬼という怪異の世界と人間の世界とを結ぶ一つのやさしいかけ橋の役割を負っているように思われる。

鬼には、巨大さや、怪力や、血なまぐさい惨虐のイメージが強いが、時にはそれ以上に花や、美女や、笛の音などが似合わしいと思われるのは、怪異としての鬼の内がわが、じつはたえず、こうした抒情(じょじょう)的なやさしさや、人間的ななつかしさ、美しさなどに脆(もろ)い、憧れの情を抱いていることの証拠ではあるまいか。

そして、表現としての鬼と女とは、最も遠い対極でありながら、内面的な働きという一つの円環の中では、思いがけぬ近さの背中合わせの距離になっていて、極から極への異質な遠さは、じつは一瞬の飛躍によってたちまち変質のとげられる表と裏の関係であったりするのだ。

理屈っぽいいい方になってしまったが、私はそうした鬼と女のかかわりから、さらには女から鬼への変貌(へんぼう)のドラマに関心をもつ。

A　一四の鬼がひっそりと女の貌(かお)をして人間(じんかん)にひそんでいることは、一方からみれば哀(かな)しいことではあるが、一方からみれば、またたいへん怖(おそ)ろしいことであるにちがいない。たとえば『今昔物語』は、山深く住む猟師の兄弟の母が、いつのまにか鬼になっていて、子を食おうとしたという話を伝えている。母という最も安心できる、日常そのものの代表のような部分が、いつのまにか怖ろしいものに変質しているという、このこわさは、ことの異様さ以上に示唆的で、日常的な安心や油断の中に思いがけずしのびこんでいる敵意や、目に見えず変質しているものの危うさを感じさせる。鬼の存在がほんとうに怖ろしいのは、山や島などに要塞(ようさい)をかまえている挑戦的な鬼よりも、こうした日常の中に溶けこんだ形で存在する敵意や(ア)ハイシンであろう。

この猟師の母がなぜ鬼になっていたのかはわからないが、さまざまな推察とともにもう一つ思い出されるのは、奥州黒塚の鬼の話である。

黒塚は福島県二本松にいまもその旧蹟(きゅうせき)を残している。ここ阿武隈川(あぶくまがわ)一帯に広がって、安(あ)

5　10　15　20　25

達が原とよばれていた大原野は、かつてはどれほど荒寥としてさびしい所であったろう。この原野の一つ家に住む老女が、道のゆききの旅人を泊めては殺害し、物品を奪っていた、という。これだけでは鬼というより殺人強盗という方が当たっているが、土地の伝説はもう一つこれに人情劇的ドラマを加えている。

それによれば、ここに流離して住みついた老女は、もと都の公家に仕えた女であったが、主家の幼君がことばを話せなかったため、これを何とか治したいと念じていた。ところが、この特(イ)コウヤクとしては妊婦の腹にある胎児の生き肝しかないと知らされ、この淋しい人目のない安達が原で、不運な妊婦の通るのを待っていたというのである。

何年かたったある日、都から親をたずねて下ってきた夫婦を泊めたが、老女はこの女が妊娠しているのをみて喜び、男をだまして外出させ、ついに女を殺害してしまう。その後女のもっていた守り袋からそれが成長したわが娘と知って、老女は狂気し鬼になり、人殺しをはじめるようになったというものだ。

因果応報をまのあたり見せたような、芝居気のつよい創作的伝説だが、この劇のクライマックスはもう一つ用意されていて、その後那智の修験者東光坊がこの家に泊まり、屍臭漂う閨の内の惨虐を発見したために、羞恥憤怒の極、鬼の性をあらわし東光坊を殺そうと追いかけるという、鬼への変貌の場面がある。

そして、われわれは、なぜかこの鬼伝説の中に盛りこまれた因果応報のすがたや罪深い女の心の動揺を見ること以上に、ひたすらこの鬼への変貌の果敢な凄絶さに酔おうとするのである。B鬼への変貌――いったい、そこに期待されているものは何なのであろう。

われわれはたしかに、この老女の本性がはじめから鬼であったという解釈などは肯定しないだろう。老女はできるだけ平凡な、という以上に誠実な一女性であってほしいのだ。そして、そこから鬼への飛躍の中に、論理ではとうてい説明しがたい極限的な心情の混乱を、また、その生涯をこの一瞬に賭け捨てるほかなかった追いつめられた心の解明を、鬼への変貌をとおして肯きたいと求めているのである。

たとえばこの、黒塚の鬼女に象徴的に描き出されているような人生とは、いったい誰のために、何を生きたといえるものであろうか。老女が知らないでわが子を殺してしまった手のあやまちに狂気し、人殺しを重ねてゆく日々は凄絶であり無惨だが、それを見られたことの怒りと羞恥に思わず鬼へと変貌する刹那には、怖ろしいというよりはむしろ哀しく美しい要素がまじっている。そこにわれわれがみるものは、屈折に屈折を重ねたはて、無為にひとし

い生を、殺意にまぎらわしつつ送っていた女の、激しい(注)フラストレーションの爆発の姿である。

（馬場あき子「おんなの鬼」による）

(注) フラストレーション――欲求不満。

問1 傍線部(ア)・(イ)は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) ハイシン

① ハイ物を利用する。
② 色のハイ合がすばらしい。
③ 祝ハイをあげる。
④ 勝ハイは時の運だ。
⑤ 歴史的なハイ景を探る。

(イ) 特コウ薬

① 敵をコウ撃する。
② 新聞をコウ読する。
③ ダイエットに成コウする。
④ その件は時コウになっている。
⑤ コウ大な土地をもっている。

問2 傍線部A「一匹の鬼がひっそりと女の貌をして人間にひそんでいることは、一方からみれば哀しいことではあるが、一方からみれば、またたいへん怖ろしいことであるにちがいない。」とあるが、なぜ「たいへん怖ろしい」のか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 鬼は日常の世界とは異質な怪異の世界のものとして人間をさいなむものだから。
② 悲哀が深まれば深まるたけ惨虐なイメージが日常性を帯びることになるから。
③ 自らのうちにひそむ鬼の性が日常の世界を変貌させてしまうから。
④ 日常の世界が怪異の突然の出現によって脅かされることを示唆しているから。
⑤ 日常的なものが思いがけないものに変容する危険性をはらんでいるから。

問3　傍線部B「鬼への変貌――いったい、そこに期待されているものは何なのであろう。」とあるが、「そこに期待されているもの」とは何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 懸命に生きながら、それが無為であったことを知った哀れな女が、激しく混乱し、瞬間的に鬼へと変貌するすさまじさ。

② これまで積み重ねてきた自分の人生を無にするものの出現に対し、激しく立ち向かう、哀しいまでの女の生き方。

③ 忍従を重ねてきた女が、これまでの人生を意義あるものに転換しようとして、鬼へと変貌する屈折した心理の動き。

④ 誠実に平凡に他者のために生きてきた女が、激しい自我に目覚め、新たな価値を求めて生きようとする果敢な姿。

⑤ これまでの無意味に流れた時間を悟った女が、運命を逆転させ、凄惨な鬼女に突如変貌するドラマチックな怪異性。

2　評論　論理読解〈構文〉把握

【1】次の文章は、リービ英雄「『there』のないカリフォルニア」の一節である。著者は、アメリカ合衆国の日本文学研究者である。かつて日本に住んだこともある著者は、それまで勤めていた東海岸のプリンストン大学をやめて、カリフォルニアのスタンフォード大学に移った。以下は、著者がカリフォルニアに移り住んでからの話である。これを読んで、後の問いに答えよ。

四季がはっきりしていることが現実にとっても文学にとっても重要な特徴でありつづけてきた日本から来ても、あるいは、もしかすると近年の日本以上に四季の変化が豊かなアメリカ東海岸から来ても、はじめて体験するカリフォルニアの自然は、実にショッキングなものである。

スプリンクラーを止めたらたちまち砂漠にもどる芝生の上を歩きながら、広々とした、雲一つないコバルト色の空におどろく。最初にその下を歩いた日には、その空にこの惑星のものとは思えないほど「異質」でショッキングな美しさを覚えてしまった。雪と嵐(あらし)が毎年連続する東海岸の厳しい冬から逃げようというかなり単純な動機で、アメリカ人は昔からカリフォルニアに「再移民」していたのである。

コバルト色の空は、一週間いても変わらない。一か月いても同じである。一つの「季節」に相当する時間が経っても、空はぼくが来た日からほとんど何の変化もみせない。

そのカリフォルニアの空に対して、最初はとても快いおどろきを覚えた。空は開放的だった。スタンフォードの空を最初に見上げたとき、はじめて(注1)村上春樹の文章を読んだときのように、単純で明快なグッド・フィーリングを覚えた。

そんなグッド・フィーリングのために、アメリカ人はカリフォルニアに「再移民」するのに違いない。

季節の変化を束縛として感じる人はおそらく、ここで一つのパラダイスを見つけて、その中で自然の一つの「条件」から自らを解放してしまったような気持ちになるだろう、と思った。東海岸の豊かな季節の変化を苦痛と感じる人は、変化のないところに「パラダイス」を見つけるだろうと、思った。

カリフォルニアの空は、その下を歩く人々を「束縛」しない。Aコバルト色の天空は、「文脈」にはならない。季節という「前後関係」を暗示しない。過去も未来もなく、永遠なる「今日」の空。ぼくがカリフォルニアに移動して住んだ一九八〇年代には、雲一つない、広々と

した空を、すべてのニュアンスがはがされた、だから意味や解釈などを超越してしまった、最も「現代的」なテキストに見たてようという気持ちさえ起きたのである。

そのような気持ちは、一週間ぐらい残った。一行一行からグッド・フィーリングが滲(にじ)む、ちょっと長い短編小説とか、ちょっと短い中編小説のような、なかなかすばらしい一週間だった。

それから、日本古典文学の授業が始まった。

東海岸のプリンストンでは、季節感の細かい変化を表現の大きな軸の一つにした古代・上代の日本文学を講じることにはあまり違和感がなく、むしろ現代の日本の都市で講じるよりも「自然だ」と思えるときすらあった。

ところが、カリフォルニアに来ると、日本文学の一流の研究家たちが同じ学科にいて、学生のレベルも、プリンストンと同じか、プリンストンよりも高いにもかかわらず、和歌を教えはじめた時点から、窓に映る、きのうも今日も明日も同じコバルト色の空がひどく気になってか、ぼくはつまずいてしまった。『古今集』になるとコッケイな気持ちになって、『枕草子』まで来ると、まわりの現実とテキストのズレによって、心の中は一種のパニック状態になった。

(注2)オクラホマ出身の、九十キロもある(注3)アメフトの選手に、額田王(ぬかたのおおきみ)についての感想を言わせると、「あ、あ、今までは春が好(よ)いと思ったけど、やっぱり秋もバカにできない、と思いました」という「結論」を渋々とのべるが、彼にはそんな実感はまったくなく、「東海岸的(イースト・コースト)」なノイローゼの結果として人間は季節などを問題にしたに過ぎない、と考えているのも明らかだ。

ましてや「冬」とか「雪景色」になると、そんなものはヨーロッパとかボストンにいた(ア)**ソセン**たちが悩まされて、カリフォルニアにいる自分たちが卒業してしまったテーマだ、という態度が、日焼けして色白が一人もいない白人の生徒たちから伝わってくるのである。

春はあけぼの？　いいえ、毎日はあけぼの、年中はあけぼの。B俺たちにとっては、季節の区別なんて、歴史の領域なんだ。

『(注4)歴史の終わり』の著者が、カリフォルニアの(注5)シンク・タンクの研究員となったことは、不思議でも何でもない。共産主義の崩壊の前の時代にも、カリフォルニアの学生たちはすでに「歴史の終わり」を生きていた、あるいはそんな思いこみをさせてくれる環境の中で生きていたことは確かである。

(注6) 秋山そ我(あれ)は

春の景色と秋の景色を比べた額田王の、細かい「季節比較」の結論の日本語を「The autumn hills are for me」と英訳して朗読するぼくの声が、だんだん弱々しくなって、「カルチャー・ショック」より(イ)シンコクな、一つの虚無感を覚えてしまった。

どこでもいいから、四季のある「ノーマル」な国にもどりたくなったのである。

(注) 1 村上春樹 ―― 小説家(一九四九～)。作品に『風の歌を聴け』『羊をめぐる冒険』などがある。

2 オクラホマ ―― アメリカ合衆国中南部の州。

3 アメフト ―― アメリカンフットボールの略。

4 『歴史の終わり』 ―― アメリカの政治学者F・フクヤマ(一九五二～)の著書。一九九二年に発表された。

5 シンク・タンク ―― 研究開発を行う専門家を集めた頭脳集団。

6 秋山そ我は ―― 『万葉集』巻一に収められた額田王の長歌の末尾。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の群の ①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) ソセン

① ソシキの一員。
② 中興のソ。
③ ソリャクに扱う。
④ ケンソな山。
⑤ ソゼイを納める。

(イ) シンコク

① 大事を前に言動をツツシむ。
② 思い出にヒタる。
③ 家族同士でシタしくする。
④ ツラい経験をする。
⑤ フカい霧が立ちこめる。

問2 傍線部A「コバルト色の天空は、『文脈』にはならない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の ①～ ⑤のうちから一つ選べ。

① カリフォルニアの常にコバルト色をした空の下では、季節の変化がある土地に生まれた文学作品の筋や論旨を正しく解釈できないということ。

② 地球のものとは思えないほど「異質」な印象を与えるカリフォルニアの空は、人間の地上の営みの意味を鮮明に浮かび上がらせる背景とはならないということ。

③ どこまでも明るいカリフォルニアの空には、自然現象と文学作品が脈絡のある関係を結んでいると認識させるものはないということ。

④ 雲一つなく晴れ渡ったカリフォルニアの空は、人間の言葉を寄せ付けないので、筋道の整った文章表現の中に取り込めないということ。

⑤ 季節の変化がないカリフォルニアの空の下では、四季の変化が人間の生活と織り成して作る時間の推移を、他の土地でのようには感じられないということ。

問3 傍線部B「俺たちにとっては、季節の区別なんて、歴史の領域なんだ」とあるが、それはどういう意味か。その説明として最も適当なものを、次の ①～ ⑤のうちから一つ選べ。

① 季節の区別は、かつて人間が季節の変化に病的に反応した結果意識された問題であり、すでにそうした病から癒やされているわたしたち現代人にとっては、それはただ、歴史的関心の対象にすぎない。

② 季節の変化のある土地の人々は、今でも季節の問題に悩まされているが、カリフォルニアではすでにそれについての判断が確定しており、カリフォルニアに現在生きている自分たちには「卒業」済みの問題にすぎない。

③ 季節の変化のある土地の人々は、季節の区別に古くからとらわれてきたが、カリフォルニアに生きる自分たちは、そうした思考があることを知っていても、それは実感をともなった今の問題にはなりにくい。

④ 季節の区別の問題は、東海岸の厳しい冬を体験している自分たちには、依然としてやはり重要なテーマであるが、すでに「歴史の終わり」を生きているカリフォルニアの学生たちにとっては興味を引くものではない。

⑤ 季節の区別についての評価は、過去の文学作品が精力的に取り組んですでにおおよその共通理解が出来上がっているので、現代世界に生きるわたしたちがいまさら議論する価値のある問題ではない。

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

デカルトが四十一歳のときに公刊した『方法序説』をよむと、ごくはじめのところで、われわれは旅というものの効用が申し分なく簡潔に指摘されている次のような一節に出会う。ただし、その効用は、よく文字を弁え、知識として摂受し得るかぎりの知識を時代から申し受けたひとりの若々しい人間にとって、旅が用として働くときの効用である。しかもデカルトは、旅の効用を説きながらも、旅人として長く異郷に暮らすという境涯の孕んでいる危険な罠から、油断のない目を離さない。A旅もまた、この短い一節のうちで相対化されている。デカルトは、同時代のフランスで人々が呼びならわしているところをそのまま用いて、こういう醒めきった目をボン・サンス(良識)と称した。

だが、これまでにギリシア・ラテン語のためには、もう充分の時をついやしたと私は思っていた。このことは、古き世の書物との付き合いについても、そういう書中にみえる歴史また寓話についても、同様にいえることだった。じっさい、別の世紀の人々にしたしむのと、旅をすることとは、よく似ている。いろんな違った国民の習俗について何かを知るのは良いことだ。そうすれば、われわれ自身の習俗について、もっと公平な判断がくだせるようになるし、われわれの風とは相容れないもの、納得しかねるものをすべて見境なく滑稽な、不都合なものに思ったりもしなくなる。何らの見聞もない人々は、そういう思いこみを平気でするものだ。だが、旅にあまりに多くの時を用いすぎると、自分の国に戻ってきても異邦人になってしまう。そして、過ぎし世のことにあまりに打ち興じていると、今の世のことに対してさっぱり不案内な有様になるのはよくあることだ。

(『方法序説』第一部)

右の文中、旅は喩えとして出ているにすぎないように受け取っては、おそらく見当違いになるだろう。しかも、旅は喩えとして働いていないわけでもない。二十三歳以来、折りをみて母国のフランスには「滞在する」のみで、旅に旅をかさねたうえ、『方法序説』出版の一六三七年にはすでに足掛け十年、アムステルダムに居つづけているこの哲学者は、旅宿の暮らしにも、異邦人の立場――しかも二重異邦人の立場――にも、さながら迷宮の支配者のように格別よく事情に通じていた。いいかえれば、喩えのごとくにあしらって傍らをすり抜けてみせるくらいにまで、デカルトは旅とは何かという話題におよぶ段には、みずからの言葉に深く侍むところがあった。

(杉本秀太郎『散文の日本語』による)

問　傍線部A「旅もまた、この短い一節のうちで相対化されている。」とあるが、旅を相対化するとは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 旅というものを、フランス人がボン・サンス（良識）と呼びならわしている醒めきった目で見直すことによって、旅の思い出を日常の生活と等価なものとしてとらえること。

② ギリシア・ラテン語などの古い時代の書物やそこに記された歴史と付き合い、別の世紀の人々にしたしむのは、日常生活を離れて異国へ旅に出るのと同じであると考えること。

③ 自分たちの風俗・習慣と相容れないもの、納得しかねるものをすべて見境なく滑稽な、不都合なものに思ったりせず、旅先の目新しい現実をも公平に判断すること。

④ 何らの見聞もない人々は、自分たちの日常生活から逸脱したものを平気で排除してしまう傾向があるが、自分の国に戻っても異邦人にならないためにはそれもやむをえないと考えること。

⑤ 知見を広め人間を成長させるなど、旅の有する意義を認めると同時に、旅に多くの時間をついやして現実から遊離してしまう危険性についても自覚的であること。

〔補問〕

「かわいい子には旅をさせよ」ということわざは、通常どのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 旅の思い出というものは、美しく懐かしいものであるから、愛する子供には旅をさせるべきである。

② 子供を愛するなら、手もとに置いて甘やかさず、世の中のつらさを経験させて、きびしく育てるべきである。

③ 子供を愛するなら、甘やかすばかりでなく、時には異境への旅を経験させるきびしさが必要である。

④ かわいい子が成長するのを願うのは、親として当然のことであるから、旅の費用を惜しむべきではない。

⑤ かわいい子には、異国への旅ばかりでなく、書物による旅もさせて、学問的に鍛えることも必要である。

3　文学的文章〈小説読解〉の基礎❶

【1】次の文章は、三浦哲郎の小説「まばたき」の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

旧友は、なにかひどく驚いたようなまるい目を天井へ向けたまま、荒い呼吸を繰り返していた。けれども、病室の天井はただ薄汚れているだけで、寝ている病人を驚かすものなどあるはずがない。

見ていると、旧友の目は、嵌(は)め込まれたガラス玉のように全く動かなかった。じきに、その目がまるく見ひらかれているだけで、実はなにも見てはいないのだとわかった。顔を寄せても、なんの反応もなかった。

「どうしたんだろう。」

「中(あた)りゃんしてなす、テレビの相撲を観(み)ているうちに。」

彼を呼びにきた旧友の細君がいった。彼の故郷であるこのあたりでは、(注1)中風(ちゅうぶう)のたぐいで倒れることを(ア)おしなべて〈中(あた)る〉といっている。そういえば、この男は高校のころ相撲部にいたな、と彼は思い出した。

「意識は戻ってないみたいですね。」

「いいえ。」と細君はかぶりを振った。「先生もそうおっしゃいますけんど、おらはなんぼか戻ってると思うておりゃんす。」

それから細君は、ためしに亭主へ声をかけてみてくれないかといった。彼は旧友の名を呼んでみた。すると、どういう刺激のせいなのか、旧友は、まばたきを一つした。たったいちどだけだったが、まるで音がするような強いまばたきであった。

細君は、胸の前で勢いよく両手を組み合わせ、狂喜の面持ちで彼を見た。

「ほれ、いま、まばたきしゃんしたえ。これは、あんたさんのお声がわかったという証拠でやんす。父ちゃんは、目で返事したんでやんすよ。」

彼はもういちど旧友の名を呼んでみたい誘惑に駆られたが、A細君を困惑させることになっては気の毒だと思って、よしにした。細君は、彼の声にわずかながら反応を示したこの機を逃がすまいとするように、亭主の耳に口を寄せて熱心に語りかけていた。

ここは泌尿器科の病室で、入院が長引きそうなので空室の多いこの病棟へ移されたのだが、

驚いたことに、偶然、隣室に高校時代の思い出話によく出てくる級友のひとりが(注2)虫垂炎をこじらせて入院していて、看護婦に確かめてから挨拶に伺ったついでに、こちらの様子を見にきて頂いた――そんなことを細君は話して聞かせてから、主人はあなたのお声を耳にしてさぞかし意外に思っていることでしょう、といった。

「意外なのは、こちらもおなじです。」

と彼はいった。

まさか、こんなところで、寝台の上に肥満した四肢を投げ出して仰臥したまま泥人形のように微動だにしない旧友と再会することになるとは思わなかったのだ。

「あんたさんも運の悪いこってしたなあ。」

細君は(イ)眉をひそめて気の毒そうに彼を見た。郷里を出て、もう三十年越し東京暮らしをしている彼が、たまたま休暇をとって帰省中に、しかも人里離れた鉱泉宿で発病してあやうく手遅れになりかけた不運を、口の軽い看護婦からでも聞き出したのだろう。

「ひどい目に遭いました。いつ、なにが起こるか、わからんもんですな。」

彼がそういったとき、不意に細君が小娘のような声を挙げて彼の寝衣の袖口を摑んだ。

「いま、ごらんになりゃんした？　また、父ちゃん。まばたきしゃんした。きっと、おら共の話を聞いてたんでやんしょう。それで、あんたさんの言葉に共感の合図を送ったんでやんす。」

そのまばたきを見損なった彼は、返事に窮して、枕の上の随分大きく見える旧友の赤ら顔を、黙って眺めた。相変わらず、ガラス玉のような目が飛び出しそうに天井を仰いだまま動かない。細君が我にかえって、摑んでいた彼の寝衣の袖口を(ウ)どぎまぎと放したのをしおに、お大事に、と彼は頭を下げて旧友の病室を出た。

隣には、見舞客の気配もなく、時折、細君のぼやくような独り言と、医師や看護婦になにか訴えるような声が、壁越しに低くきこえるぐらいで、一日の大部分の時間は空室のようにひっそりとしていた。夜ふけには、単独の鼾がきこえた。もはや旧友には昼夜の別がないのだから、鼾は夜眠る習慣を守りつづけている細君のものだと思われた。この病院は完全看護なのだが、隣室では細君が泊り込みで病人に付き添っているらしい。

東京で暮らすようになってから、郷里とはすっかり疎遠になって、もはや呼吸とまばたきしかしなくなっている旧友のその後についても全く知るところがなかったのだが、耳ざとい

看護婦によれば、旧友は長年教職にあって、いまは郷里と浜つづきの小都市の教育委員会で主事を務めている由であった。

隣室の旧友を見舞ってから数日して、彼の主治医が退院の相談に病室まできてくれた。彼は、必要な話が済んでから、医師に旧友の容態について尋ねてみた。医師は、自分の担当ではないからと口籠(くちごも)りながら、手術さえ可能なら希望が持てるのだが、といった。

「患部がきわめて厄介なところにあるらしくてね。脳外科の連中も手を出したがらないのです。」

「すると、彼はずっとあのままですか。」

「心臓が堪えられるならね。お気の毒なことですが。」

「時々、まばたきをしますね。」

医師は目を伏せてうなずいた。

「奥さんがそれに希望を託してたな、意識のある証拠だといって。」

医師はしばらく黙っていたが、やがて、

「でも、それでいいのじゃないでしょうか。そう信じられて、希望が持てるんだったら。私らはその希望をわざわざ打ち毀(こわ)すようなことはしないのです。」

と顔を上げていった。

退院の朝、彼は隣室へ別れをいいにいった。ところが、細君の姿は見えなくて、旧友だけが初めて見舞ったときとほとんどおなじ様子で病床にいた。彼は、戸口でちょっと躊躇(ためら)ったが、B無人にも等しい病室の素っ気なさが彼を大胆にした。彼は、旧友の枕許(まくらもと)までいくと、

「じゃ、お先にな。ねばれるだけ、ねばれよ。相撲の選手だったころみたいにな。」

と盆のような顔を見下ろしていった。

すこし待ってみても、旧友はまばたきをしなかったが、気のせいか、その目がすこし潤んだように見えた。

(注)　1　中風 ―― 脳出血などによって起こる半身不随、手足の麻痺(まひ)などの症状をいう。「ちゅうふう」「ちゅうぶ」ともいう。

2　虫垂炎 ―― 盲腸のさきにある虫垂の炎症。盲腸炎ともいう。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の表現の本文中における意味内容として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　おしなべて

① ぼかして
② 推し量って
③ 隠して
④ 総じて
⑤ ひらたく言って

(イ)　眉をひそめて

① 不吉に思い、眉をしかめて
② 心を痛め、眉間(みけん)に皺(しわ)を寄せて
③ 眉を下げ、冷静を装って
④ 眉間を緩め、理解を示して
⑤ 嘆きながら、眉をゆがめて

(ウ)　どぎまぎと

① 恥ずかしさのあまり、思わずとりみだして
② とっさに弁解できず、しどろもどろで
③ 相手に理解してもらえず、困惑して
④ 不意をつかれて、たじろいで
⑤ 思いがけない行動をしていたことに、うろたえて

問2 傍線部A「細君を困惑させることになっては気の毒だと思って、よしにした」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 夫のまばたきに意識の回復の兆しをみようとする細君を見ていると、動揺しているのはよくわかるのだが、それを露骨に指摘しては、献身的に看病している細君に失礼だと思ったから。

② 夫がまばたきをしたことに狂喜している細君を目の前にして、いまはともかく気が動転している彼女の気持ちを落ち着かせることが先決で、むやみに刺激してはいけないと思ったから。

③ 自分自身に言い聞かせるように、夫の復調への希望を主張する細君の前で、もう一度旧友の名を呼んで、その生死を確かめるのは、軽率な行為になってしまうと思ったから。

④ 夫は偶然まばたきをしたのではなく、自分の意思によって反応したとみなして、そこに一縷（いちる）の望みを託そうとする細君の気持ちに水をさしてはいけないと思ったから。

⑤ 自分を偽ってまで夫のまばたきに期待を託そうとする細君を見ていると、何の反応もないとわかっているのに、旧友の名を呼んで細君を傷つけるわけにはいかないと思ったから。

問3　傍線部B「無人にも等しい病室の素っ気なさが彼を大胆にした」とあるが、この場面における「彼」の心情の動きを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① あれこれ話しかけてくる細君に注意を払わなくてもいいので気持ちが楽になり、寝台の上で微動だにしない旧友の姿を勇気をもって見極められるようになった。

② 生きている人間の気配さえ消えた病室の中で二人きりになってみると、知らず知らずのうちにお互いが若かった頃のことが思い出され、少年の頃の遠慮のない率直な気持ちになった。

③ 静まりかえった病室の中で二人きりになったとき、はじめて、直に旧友と向き合い、誰にもはばからずに語りかけることができるようになった。

④ 生きているのかどうかも分からない旧友が病室の中にぽつんと取り残されている姿を目の当たりにして、人間のはかない運命をたじろがずに受け入れられるようになった。

⑤ 意識を失って昏睡している旧友が横たわる病室の静けさに触れ、思い切って最期の別れを言っておかなければならないのではないかという切迫した気持ちになった。

【2】次の文章は、野呂邦暢（のろくにのぶ）「白桃」の一節で、戦後の食糧難の時代を背景としている。ある日、少年とその兄は、かつて父の使用人であった酒場の主人のところへ使いに出された。これを読んで、後の問いに答えよ。

旧友は、なにかひどく驚いたようなまるい目を天井へ向けたまま、荒い呼吸を繰り返して秋であった。

医師は妹の肺炎に(注1)ペニシリンがいるとつげた。金さえあれば解決することである。兄弟は包みをもたされて、それは九歳と十二歳の子供にもてるくらいの量だったが、店へやって来た。

主人はいつもの上機嫌で(ア)心得顔に二人をむかえ、包みをうけとって奥へ消えたまま出てこない。ついさっき、気むずかしい顔つきの男が呼ばれて奥へ去ったのも、包みにかかわりがあると思われて弟は不安だった。

客の出入りは多かった。

「どうしたんでしょうねえ」

わずかな暇をみて女主人が奥へ去り、しばらくしてもどると、二人のまえにおいてあった桃をとりあげて皮をむきはじめた。女主人はなにかいうのだろうかと顔をみつめても少年たちには黙っている。

奥で、なにか(イ)のっぴきならないことがおこったのかもしれない、と弟は想像した。女主人の細い指が器用にナイフをあやつって、手の中で桃をあたかも一つの毬（まり）のようにくるくるとところがしながら皮をむくのを彼は見ていた。皮は細い紐（ひも）になってテーブルの上におちた。

皮をむかれた桃は、小暗い電灯の照明をやわらかに反射して皿の上にひっそりとのっている。汁液が果肉の表面ににじみ出し、じわじわと微細な光の粒になって皿にしたたった。弟はテーブルから目をそむけた。

しかし、壁を見ても客の姿を見ても、目にうかぶのは輝くばかりの桃である。淡い蜜（みつ）色の冷たそうな果実は、目をとじてさえも鮮やかに彼の視界にひろがる。戦争以来、何年も見たことのない果実であった。

女主人は客のいるカウンターへ去った。

「帰ろうよ」

弟はささやいた。

「お金をもらったら帰る」

兄がおもおもしく宣言した。弟の目には兄がおとなっぽく映った。A自分ひとりが乳のみ児（ご）のように道理をわきまえない子供だと思われ、それが肚（はら）だたしくもあった。いったい兄は皿の桃をどう思っているのだろう。手をのばして触りたくもないのだろうか。(注2)大豆滓（かす）と

5 10 15 20 25

とうもろこしの雑炊を食べていて、どうして平然とおちつきはらっていられるのだろう。
弟はズボンのポケットに握りこぶしを入れ背をまるくしてうなだれた。兄はいう。
「おまえが小さいときは何でもあったのだよ。チョコレートもカステーラも。忘れたのかい、食べきれずにすてるほどだった」
いよいよ弟は背をまるくした。兄が嘘をついているとは思わなかったが、そんなことは一つもおぼえていなかった。たぶん事実だろうが、《何でもあった昔》を考えるのはつらかった。《今は何もない》のだから。
そのとき大きな手が兄弟のまえのテーブルをたたいた。二人は顔をあげた。酒場の主人がどさりと風呂敷包みを投げだしてせきばらいした。
「見な、わしはやすやすとごまかされるそこいらのちんぴらとは違うんだよ。初めこの米を見たとき、なんとなく色つやが悪いと思ったな。明かりのせいかと思って奥の電灯でしらべてみた。念のためこの人に立ち合ってもらって篩にかけてみた」
「おれ、帰るからな」
立合人は兄弟を等分に見くらべてから店を出ていった。主人はふりむきもしなかった。
「篩にかけてみたらおどろいたよ。屑米と糠がたっぷり混ぜてあるんだ。いいかね、おやじさんに頼んだのは鮨につかう上等の米だよ。これがつかえるかい。あんまりみくびってもらいたくないもんだ。そうとも、昔は社長のお世話になったさ。だけどご恩返しはしたつもりだ。酒代だってだいぶたまっているが、一度も催促なんかしやしない。B要するにわたしのいいたいことはだ、社長ともあろう方がこんなけちなペテンをなさるとは残念なんだ。こう申しあげてくれ。鮨につかえる上米ならいつでもしかるべき値段で引き取らせてもらいます、とね」
「おっさんよう、いい加減にしねえか、相手は子供だろ」
客の一人がカウンターから声をかけた。
「おっさん、だれだって今は何かしらやらないと生きてゆけないんだよ。ペテンの一つがどうしたんだい、ええ、大損したわけでもないんだろ、それにあんた噂では(注3)メチールでしこたま儲けたそうじゃねえか」
「うるさい、貴様にわしの気持ちがわかるもんか、うちの酒がまずかったらさっさと出てゆけ」
いきりたった主人のけんまくにおどろいて店じゅうの客が兄弟の方を見た。相手は子供だろ、といった男は口の中でなにかつぶやきながら主人から目をそむけた。弟は兄をふりあおいだ。兄は言葉もなくうなだれている。女主人がテーブルにひろげた米をつつみなおして主人に提案した。
「こちらのふつうの米だけでも引き取ってあげたら」

「おまえまでそんなことをいう、いや、この際は断固として……」
女主人は客の方へ去った。

（注）1 ペニシリン――抗生物質。肺炎などに効く画期的な薬とされた。
2 大豆滓――大豆から油をしぼり取ったかす。通常は肥料などにする。
3 メチール――メチルアルコール。毒性が強く、飲む量によっては失明、死亡することがある。

問1 傍線部（ア）・（イ）の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア） 心得顔
① 何かたくらんでいそうな顔つき
② 扱いなれているという顔つき
③ いかにも善良そうな顔つき
④ 事情を分かっているという顔つき
⑤ 何となく意味ありげな顔つき

（イ） のっぴきならない
① 予想もつかない
② どうにもならない
③ 決着のつかない
④ 言い逃れのできない
⑤ 口出しのできない

問2 傍線部A「自分ひとりが乳のみ児のように道理をわきまえない子供だと思われ、それが肚だたしくもあった」とあるが、このときの弟の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 妹のためにお金を得ることだけを考えている兄に比べて、米が売れそうにもない不安から帰ってしまおうとする自分が幼稚に感じられ、情けなく思っている。

② 必ず役目を果たすという強い意志を持って臨んでいる兄に比べて、そんな意欲を持てず放棄したいと考える自分が卑怯（ひきょう）に思われ、怒りを感じている。

③ 桃を食べることが絶望的になり、兄に帰りたいと言ったため、周囲から兄に比べて幼稚だと思われてしまい、そんな事態を招いた自分に腹を立てている。

④ ひたすら役目を果たそうとしている兄に比べて、桃の魅力に耐えられずこの場から逃れたいと考える自分が幼く感じられ、いまいましく思っている。

⑤ 感情を表に出さない兄に比べて、桃を食べたいという欲求を抑えきれずすぐ態度に出してしまう自分が卑しく思われ、嫌悪を感じている。

問3 傍線部B「要するにわたしのいいたいことはだ、社長ともあろう方がこんなけちなペテンをなさるとは残念なんだ」とあるが、「社長」に対する主人の心情を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① かつては社長との間も対等で、互いに信頼し合う関係が成り立っていたにもかかわらず、一方的にそれを壊すような行動をとられたことに対し、言いようのない寂しさと悲しみを感じている。

② 昔は人を使うほどの地位にあった者が今では平気で人をだますようになってしまったということが、生きていくために手段を選ばなくなった今の自分の生活ぶりに重なり、そのことをつらいと思っている。

③ 生きるためには多少の悪事もやむを得ない時代とはいえ、以前は真っ正直な人間で自分を助けてくれたりもしたのだがと、社長の変わりようを嘆き、改心してほしいとっている。

④ かつて自分が雇われていたころとは逆に、今はこちらが何かと世話をしてやっていて感謝されてもいいくらいなのに、恩を忘れ自分をだまそうとする相手に、驚きあきれている。

⑤ 見えすいた手段で自分をだまそうとした社長に対して、以前はこんなことをする人ではなかったというやりきれない思いと同時に、それほど自分を低く見ているのかと怒りを感じている。

4　文学的文章〈小説読解〉の基礎❷

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私は掘割を見下ろしていた。もう秋の初めの頃のように厭な臭いが鼻を突くこともなかったが、水はやはり澱んだまま流れなかった。そこに種々雑多なものがゆらゆらと揺れていた。包装紙や、木切れや、藁や、ブリキの罐や、土瓶のかけらや、その他いろいろのものが。濁った水面には油が浮いてぎらぎらし、乏しい日光を反射していた。

私は昔ギリシャ神話を読んで、(ア)うろ覚えに忘却の河というのがあったのを覚えている。三途の河のようなものだろう。死者がそこを渡り、その水を飲み、生きていた頃の記憶をすべて忘れ去ると言われているものだ。しかし私にとって、忘却の河とはこの掘割のように流れないもの、澱んだもの、腐って行くもの、あらゆるがらくたを浮かべているものの方が、よりふさわしいような気がする。この水は、水そのものが死んでいるのだ。そして忘却とはそれ自体少しずつ死んで行くことではないだろうか。あらゆる過去のがらくたをその上に浮かべ、やがてそれらが風に吹かれ雨に打たれ、それら自身の重味に耐えかねて沈んで行くことではないだろうか。

私はその時、彼女の生家を訪ねて行った。実にはるばると、日本海のほとりまでその住所を頼りに探しに行った。その家で応接に出たのは、眼を病んでいるらしくて赤く充血した眼をした婦人だった。それが彼女の母親であることは、向こうが、娘のことですか、と言うまでは分からなかった。それほど見すぼらしく窶れてはいたが、どこか彼女に似ているところがないわけではなかった。娘のことですか、と言って、訛の多い方言でぽつりと答えた。娘は死にました。私は事情が分かるまで(イ)押し問答を繰り返したが、その間じゅうこの婦人は難しい方言と、赤くただれたその眼とで私をおびやかした。私の話を聞こうともせず、私が何者であるのかを知ろうともせずに、娘は身籠ったのを恥じて淵から身を投げて死んだ、と言い続けた。その赤くただれた眼は、風雪のせいだったのだろうか、娘を悼む涙のせいだったのだろうか。婦人は私を門口から追い返した。線香を上げさせてもくれなかった。この母親自身も恥じていたのだ。

私は嘗て彼女の口から聞いたことのある断崖へ行ってみた。私は夢遊病者のように歩いていて、いつ、どういうふうにそこへ達したのか覚えていない。また、そこの風景も何ひとつ覚えていない。確かに下を見下ろすと眼のくらめくような恐ろしい場所だったような気がす

る。そして更に私はふらふらと歩いて、いつしか海岸に出ていた。秋の終わりで、寒い風がびゅうびゅうと吹きつけていたが、私は少しも寒いとは感じなかった。

そこが賽の河原だった。洞窟もあった。あたりには人一人いず、海には舟一艘見えなかった。私は河原の岩を踏んでその洞窟にはいって行った。白い涎掛けをつけたお地蔵様があり、小さな石仏があり、その前や横には幾個所にも小さな石が積み重ねられていた。蠟涙のこびりついた蠟燭の跡があり、子供の形見らしい襦袢や着物などがあった。もっと色々なものがあったのかもしれない。しかしこの仄暗い洞窟の中は、打ち寄せる浪の響きが凄まじく木霊して、ぞっとさせるような妖気を含んでいた。子供たちの多くの霊が、生き返らせてよ、生き返らせてよ、と叫んでいるような気がした。私はそこにしゃがみ、小石を取って、重ねてある上に一つ載せた。また一つ載せた。その塔はぐらぐらし、あっというまに崩れた。私はまた、必死の注意を籠めて、一つずつ小石を積み重ねて行った。それが魂の、死んだ魂への、何等かの救いになるものだろうか。いや私は、私自身への救いのつもりで、この難しい作業を続けていたのだ。私はそれを終えると、最後に手にあった石をポケットに入れ、逃れるようにそこをあとにした。その洞窟を、その賽の河原を、そのさみしい彼女の故郷の村を、A最も恐ろしいもののようにあとにした。

私は手摺に凭れて、長い間掘割の濁った水を眺めていた。美しい大きな眼をしていた彼女、赤くただれた眼をしていたその母親、鬚だらけの顔を微笑させていた戦友、生きながら死顔をしていたその若い妻、私は幾つもの顔を思い出した。戦後(注)パージになって死んだ父、そのあとを追って老け込んだ顔に涙を浮かべながら死んだ母、幼い頃のもう記憶がさだかではない実の両親、同胞たち、そして生まれると間もなく、名前もつけられずに死んでしまった私の子供。そして彼女と共に、遂に命というものを天から授かることもなくて死んだもう一人の私の子供。その顔を私は決して、決して、知ることはないのである。

私は立ち上がり、着て来たオーバーのポケットを探って小さな石を一つ取り出した。それは私が賽の河原から拾って来て、今まで大事に保存して来たものだ。妻は恐らく気がついたこともなかっただろうが、それは私にとって、彼女と彼女の生むべき筈だった子供との唯一の形見だった。その小さな石には、私が忘れようと思い、忘れてはならないと思い、しかも私がもう何年も、いや何十年も、忘れたままになっていた(ウ)無量の想いが籠められていた。その石は私の罪であり、私の恥であり、失われた私の誠意であり、惨めな私の生のしるしだった。石は冷たく、日本海の潮の響きを、返らない後悔のようにその中に隠していた。

B 私は再び窓へ行き、その石をじっと掌（てのひら）の中であたためてから、下の掘割の中へ投げた。ゆるやかな波紋が、そこに浮かんでいるがらくたを、近いものは大きく、遠いものはかすかに揺るがせながら、しかし、いつのまにかその輪を広げて、やがて消えて行った。

（福永武彦『忘却の河』）

（注）パージ ―― ここでは、太平洋戦争終了直後、戦争指導者や協力者と見られた人々が、公職や特定の会社、報道機関、教職などから追放されたこと。

問1 傍線部（ア）～（ウ）の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア）うろ覚え
① 棒暗記した記憶
② 不確かな記憶
③ 間接的な記憶
④ 誤りの多い記憶
⑤ 無意識の記憶

（イ）押し問答
① 相手を黙らせ一方的に主張すること
② 互いに体を押し合って言い争うこと
③ 交互に質問し互いに答え合うこと
④ 休む間も無く問答を続けること
⑤ 互いにかみあわないまま言い合うこと

（ウ）無量の想い
① 数少ない想い
② 正体不明の想い
③ とるに足りない想い
④ はかり知れない想い
⑤ 大雑把な想い

問2 傍線部A「最も恐ろしいもののようにあとにした。」とあるが、それは「私」のどんな様子を表しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 賽の河原でわが子の魂を救おうと塔をつくり、その成果として小石を一つポケットに入れた「私」が、この地から一刻も早く一歩でも遠く離れたがっている様子を表している。

② 賽の河原で塔をつくったくらいで救われるとは思えない「私」が、自分の罪をまざまざと感じさせられ、その戦（おのの）きに襲われている様子を表している。

③ 賽の河原がいかにさみしいものであったかを身をもって知った「私」が、死者たちへの切ない思いを懸命に振り払おうとしている様子を表している。

④ 賽の河原のぞっとする妖気のなかで、子供たちの霊の叫びを聞いた「私」が、心の底から震え上がって、まだ心身ともにそれから脱しきれないままでいる様子を表している。

⑤ 賽の河原で自分の罪の救いとして難しい作業を終えた「私」が、罪から救済された思いを失うまいとしている様子を表している。

問3 傍線部B「私は再び窓へ行き、その石を……下の掘割の中へ投げた。」とあるが、それは「私」にとってどのようなことを意味しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① かつて自分の子を宿した女性を死に追いやったことに激しい悔恨を覚えている「私」は、生まれるはずであった子供の唯一の形見である「小さな石」を掌で暖めてから掘割に投げ込むことで、そこに深い鎮魂の思いを託しているのである。

② 自身の過去を振り返る時、犯してきた様々の罪のみが思い返される「私」は、それら幾つもの罪の証（あか）しである「小さな石」を掘割に投げ入れることによって、そうした過去の一切から目をそむけ、新たな心で生き直そうと決心しているのである。

③ これまで数々の死に立ち会ってきた「私」にとり、「小さな石」とはそれら死んでいった人々への自己の不実さを常に突きつけるものであったが、それを掘割の底に沈めることで、「私」は自責の念を心の深部に抱き続けようと決意しているのである。

④ 「私」にとって過去とは多くの人々との死別や生別を意味するものであり、「小さな石」はそうした惨めな生のしるしに外ならなかったが、それを掘割に投げ放つことのうちに、「私」は幸福な人生の新たな始まりを予感しているのである。

⑤ 深い罪の意識の中で過去につきまとわれている「私」にとって、「小さな石」とはそのような過去を象徴するものであり、それを掘割に投げすてることに、「私」はそうした過去に対する拘泥から解き放たれることへの願いをこめているのである。

共通テスト現代文

OUR TEXTBOOK 2024
1 学期

Features
「読」から「解」へ
1.〈論理的文章〉

5.展開の予測 028 **山崎正和『日本文化と個人主義』**
6.長文読解法 030 **岩井克人「資本主義と人間」**
7.出題意図の把握 040 **渡辺裕「聴衆の『ポストモダン』？」**
10.論理を追う❶ 064 **近藤譲「『書くこと』の衰退」**
11.論理を追う❷ 072 **加藤周一『文学とは何か』**

2.〈文学的文章〉

8.設問別対策❶ 050 **堀江敏幸「送り火」**
9.部分と全体❶ 058 **北杜夫『幽霊』**
12.設問別対策❷ 076 **加藤幸子『海辺暮らし』**
13.部分と全体❷ 086 **夏目漱石『道草』**

5　論理的文章　〈展開を予想しつつ読む〉

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

誰もが認めることだが、近代以前の古い文化観は、洋の東西を問わず、意識的、無意識的に大国主義的な傾向を秘めていた。古代ギリシアに始まる西洋でも、中国歴代の王朝社会でも、みずからの生活様式をほかにない固有性として捉え、しかもそれを内外に施してもとらない価値とするのが、常識であった。いいかえれば、みずからの生活様式だけが文化であり、その外には文化の空白であるアヤバンが広がっていると考え、それを軽蔑して無視するか、あるいは力をふるって教化しようとするのが、文化観の古典的なかたちであった。

この考え方は、じつは西洋ではひそかに近代以後にまで生きのび、植民地への宣教や、民族間の戦争を支える理論として使われてきた。たとえば、西洋文化を個人主義の文化としてイキテイし、それに対して日本文化を集団主義の文化と呼ぶ人たちは、多くの場合、暗黙のうちにこの大国主義的な文化観に毒されている。彼らは一方で、個人主義を西洋にしか見られない特色だと思い込み、しかも同時に、人間にとって一般的に個人は集団よりも本質的なあり方だと考えている。当然、本質的なものは普遍的であるから、普遍性が文化の生命だとすれば、西洋の個人主義は日本の集団主義よりも、文化的に質の高いものだということになる。

明らかに、この文化観が犯しているのは単純な論理の誤りであって、もし人間にとって本質的で普遍的なものがあれば、［　I　］という理屈が見落とされている。

じっさい、一、二、三といった整数の観念や、上下、左右、大小といった認識の形式は、限りなく普遍性に近い広がりを持っているが、そういうものは、現にどんな文化にも始めから共有されている。かりに表面上、ひとつの文化にめだって他の文化にはめだたない特色があるとしても、もしそれが人間一般の本質に根ざした特色なら、必ずそのウホウガはどんな文化にも内在的に隠れているであろう。そこに見られる文化の違いは、何ものかの現れ方の程度の違いにすぎず、他の特色とのつりあいの違いにすぎないはずである。それにつけて、室町時代の末期、日本には使命感に溢れた西洋の宣教師たちが訪れたが、彼らを相手に当時の日本人が交わした愉快な会話が思い出される。宣教師たちは、当然のこととして、キリスト教の神が永遠普遍の真理であることを説き、その教えにめざめるよう民衆を諭した。これにたいして日本人は、Aもしそれが永遠の真理であるなら、なぜ自分たちがそれを始めから知らずにいて、歴史上の今、あらためて教えられねばならないのか、と訊ね返したと言われる。

（山崎正和『日本文化と個人主義』より）

問一　傍線部ア～ウのカタカナを漢字に直せ。

問二　空欄 I を補うのに、最も適当なものを選べ。

ア　それがなぜさまざまな文化を生じさせたのか、
イ　それがどうして個人においてのみ認められなければならないのか、
ウ　それがひとつの文化のなかにしか存在しないということはありえない、
エ　それがむしろ日本の集団主義にこそひそんでいるのではないだろうか、
オ　それが逆に日本の集団主義の優位を主張できる根拠になるはずである、

問三　傍線部Aの理由として最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

ア　日本人は、永遠普遍の真理があるという考え方をもっていなかったから。
イ　日本人は、一文化の特色を普遍性として強調する矛盾に気がついたから。
ウ　日本人は、自国の文化に誇りを持っており、他文化の強制を嫌ったから。
エ　日本人は、自国文化に内在する普遍性にいまだ思いが及ばなかったから。
オ　日本人は、多くの文化が普遍性を共有することを既に理解していたから。

6　評論　長文読解の思考回路

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

(注1)フロイトによれば、人間の自己愛は過去に三度ほど大きな痛手をこうむったことがあるという。一度目は、コペルニクスの地動説によって地球が天体宇宙の中心から追放されたときに、二度目は、ダーウィンの進化論によって人類が動物世界の中心から追放されたときに、そして三度目は、フロイト自身の無意識の発見によって自己意識が人間の心的世界の中心から追放されたときに。

しかしながら実は、人間の自己愛には、すくなくともうひとつ、フロイトが語らなかった傷が秘められている。だが、それがどのような傷であるかを語るためには、ここでいささか回り道をして、まずは(注2)「ヴェニスの商人」について語らなければならない。

ヴェニスの商人――それは、人類の歴史の中で「(注3)ノアの洪水以前」から存在していた商業資本主義の体現者のことである。海をはるかへだてた中国やインドやペルシャまで航海をして絹やコショウや絨毯（じゅうたん）を安く買い、ヨーロッパに持ちかえって高く売りさばく。遠隔地とヨーロッパとのあいだに存在する価格の差異が、莫大（ばくだい）な利潤としてかれの手元に残ることになる。すなわち、ヴェニスの商人が体現している商業資本主義とは、地理的に離れたふたつの国のあいだの価格の差異を媒介して利潤を生み出す方法である。そこでは、利潤は差異から生まれている。

だが、A経済学という学問は、まさに、このヴェニスの商人を抹殺することから出発した。

年々の労働こそ、いずれの国においても、年々の生活のために消費されるあらゆる必需品と有用な物資を本源的に供給する基金であり、この必需品と有用な物資は、つねに国民の労働の直接の生産物であるか、またはそれと交換に他の国から輸入したものである。

『国富論』の冒頭にあるこのアダム・スミスの言葉は、一国の富の増大のためには外国貿易からの利潤を貨幣のかたちで(ア)**チクセキ**しなければならないとする、重商主義者に対する挑戦状にほかならない。スミスは、一国の富の真の創造者を、遠隔地との価格の差異を媒介して利潤をかせぐ商業資本的活動にではなく、勃興（ぼっこう）しつつある産業資本主義のもとで汗

水たらして労働する人間に見いだしたのである。それは、経済学における「人間主義宣言」であり、これ以後、経済学は「人間」を中心として展開されることになった。

たとえば、(注4)リカードやマルクスは、スミスのこの人間主義宣言を、あらゆる商品の交換価値はその生産に必要な労働量によって規定されるという労働価値説として定式化した。

実際、リカードやマルクスの眼前で進行しつつあった産業革命は、工場制度による大量生産を可能にし、一人の労働者が生産しうる商品の価値(労働生産性)はその労働者がみずからの生活を維持していくのに必要な消費財の価値(実質賃金率)を大きく上回るようになったのである。労働者が生産するこの剰余価値――それが、かれらが見いだした産業資本主義における利潤の源泉なのであった。もちろん、この利潤は産業資本家によって搾取されてしまうものではあるが、リカードやマルクスはその源泉をあくまでも労働する主体としての人間にもとめていたのである。

だが、産業革命から二百五十年を経た今日、ポスト産業資本主義の名のもとに、旧来の産業資本主義の急速な変貌(へんぼう)が伝えられている。ポスト産業資本主義――それは、加工食品や繊維製品や機械製品や化学製品のような実体的な工業生産物にかわって、B技術、通信、文化、広告、教育、娯楽といったいわば情報そのものを商品化する新たな資本主義の形態であるという。そして、このポスト産業資本主義といわれる事態の喧騒(けんそう)のなかに、われわれは、ふたたびヴェニスの商人の影を見いだすのである。

なぜならば、商品としての情報の価値とは、まさに差異そのものが生み出す価値のことだからである。事実、すべての人間が共有している情報とは、その獲得のためにどれだけ労力がかかったとしても、商品としては無価値である。逆に、ある情報が商品として高価に売れるのは、それを利用するひとが他のひととは異なったことが出来るようになるからであり、それはその情報の開発のためにどれほど多くの労働が投入されたかには無関係なのである。

まさに、ここでも差異が価格を作り出し、したがって、差異が利潤を生み出す。それは、あのヴェニスの商人の資本主義とまったく同じ原理にほかならない。すなわち、このポスト産業資本主義のなかでも、労働する主体としての人間は、商品の価値の創造者としても、一国の富の創造者としても、もはやその場所をもっていないのである。

いや、さらに言うならば、伝統的な経済学の独壇場であるべきあの産業資本主義社会のなかにおいても、われわれは、抹殺されていたはずのヴェニスの商人の巨大な亡霊を発見しうるのである。

産業資本主義――それも、実は、ひとつの遠隔地貿易によって成立している経済機構であったのである。ただし、産業資本主義にとっての遠隔地とは、海のかなたの異国ではなく、一国の内側にある農村のことなのである。

産業資本主義の時代、国内の農村にはいまだに共同体的な相互（イ）フジョの原理によって維持されている多数の人口が（ウ）タイリュウしていた。そして、この農村における過剰人口の存在が、工場労働者の生産性の飛躍的な上昇にもかかわらず、彼らが受け取る実質賃金率の水準を低く抑えることになったのである。たとえ工場労働者の不足によってその実質賃金率が上昇しはじめても、農村からただちに人口が都市に流れだし、そこでの賃金率を引き下げてしまうのである。

それゆえ、都市の産業資本家は、都市にいながらにして、あたかも遠隔地交易に（エ）ジュウジしている商業資本家のように、労働生産性と実質賃金率という二つの異なった価値体系の差異を媒介できることになる。もちろん、そのあいだの差異が、利潤として彼らの手元に残ることになる。これが産業資本主義の利潤創出の秘密であり、それはいかに異質に見えようとも、利潤は差異から生まれてくるというあのヴェニスの商人の資本主義とまったく同じ原理にもとづくものなのである。

この産業資本主義の利潤創出機構を支えてきた労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異は、歴史的に長らく安定していた。農村が膨大な過剰人口を抱えていたからである。そして、この差異の歴史的な安定性が、その背後に「人間」という主体の存在を措定してしまう、C伝統的な経済学の「錯覚」を許してしまったのである。

かつてマルクスは、人間と人間との社会的な関係によってつくりだされる商品の価値が、商品そのものの価値として実体化されてしまう認識論的錯覚を、商品の物神化と名付けた。その意味で、差異性という抽象的な関係の背後にリカードやマルクス自身が措定してきた主体としての「人間」とは、まさに物神化、いや人神化の産物にほかならないのである。

差異は差異にすぎない。産業革命から二百五十年、多くの先進資本主義国において、無尽蔵に見えた農村における過剰人口もとうとうコ（オ）カツしてしまった。実質賃金率が上昇しはじめ、もはや労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異を媒介する産業資本主義の原理によっては、利潤を生みだすことが困難になってきたのである。あたえられた差異を媒介するのではなく、みずから媒介すべき差異を意識的に創（つく）りだしていかなければ、利潤が生み出せなくなってきたのである。その結果が、差異そのものである情報を商品化していく、現在進

行中のポスト産業資本主義という喧噪(けんそう)に満ちた事態にほかならない。

差異を媒介して利潤を生み出していたヴェニスの商人 X――あのヴェニスの商人の資本主義こそ、まさに普遍的な資本主義であったのである。そして、D「人間」は、この資本主義の歴史のなかで、一度としてその中心にあったことはなかった。

（岩井克人(いわいかつひと)「資本主義と『人間』」による）

（注）1　フロイト――オーストリアの精神医学者（一八五六～一九三九）。精神分析の創始者として知られる。

2　「ヴェニスの商人」――シェークスピアの戯曲『ヴェニスの商人』をふまえている。

3　ノアの洪水――ノアとその家族が方舟(はこぶね)に乗り大洪水の難から逃れる、『旧約聖書』に記されたエピソード。

4　リカード――アダム・スミスと並ぶイギリスの経済学者（一七七二～一八二三）。

問1 傍線部(ア)〜(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の群の ①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) チクセキ

① ゾウチクしたばかりの家
② 原文からのチクゴヤク
③ ガンチクのある言葉
④ チクバの友との再会
⑤ 農耕とボクチクの歴史

(イ) フジョ

① 家族をフヨウする
② 遠方にフニンする
③ フセキを打つ
④ 免許証をコウフする
⑤ フソクの事態に備える

(ウ) タイリュウ

① 作業がトドコオる
② 義務をオコタる
③ 口座から振りカえる
④ 苦難にタえる
⑤ フクロの中に入れる

(エ) ジュウジ

① ジュウソク感を得る
② フクジュウを強いられる
③ アンジュウの地を探す
④ 列島をジュウダンする
⑤ ユウジュウフダンな態度

(オ) コカツ

① 経済にカツリョクを与える
② 勝利をカツボウする
③ 大声でイッカツする
④ 説明をカツアイする
⑤ ホウカツ的な議論を行う

問2 傍線部A「経済学という学問は、まさに、このヴェニスの商人を抹殺することから出発した」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 経済学という学問は、差異を用いて莫大な利潤を得る仕組みを暴き、そうした利潤追求の不当性を糾弾することから始まったということ。

② 経済学という学問は、差異を用いて利潤を生み出す産業資本主義の方法を排除し、重商主義に挑戦することから始まったということ。

③ 経済学という学問は、差異が利潤をもたらすという認識を退け、人間の労働を富の創出の中心に位置づけることから始まったということ。

④ 経済学という学問は、労働する個人が富を得ることを否定し、国家の富を増大させる行為を推進することから始まったということ。

⑤ 経済学という学問は、地域間の価格差を利用して利潤を得る行為を批判し、労働者の人権を擁護することから始まったということ。

問3 傍線部B「技術、通信、文化、広告、教育、娯楽といったいわば情報そのものを商品化する新たな資本主義の形態」とあるが、この場合、「情報そのもの」が「商品化」されるとはどういうことか。その具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 多くの労力を必要とする工業生産物よりも、開発に多くの労力を前提としない特許や発明といった技術の方が、商品としての価値をもつようになること。

② 刻一刻と変動する株価などの情報を、誰もが同時に入手できるようになったことで、通信技術や通信機器が商品としての価値をもつようになること。

③ 広告媒体の多様化によって、工業生産物それ自体の創造性や卓越性を広告が正確にうつし出せるようになり、商品としての価値をもつようになること。

④ 個人向けに開発された教材や教育プログラムが、情報通信網の発達により一般向けとして広く普及したために、商品としての価値をもつようになること。

⑤ 多チャンネル化した有料テレビ放送が提供する多種多様な娯楽のように、各人の好みに応じて視聴される番組が、商品としての価値をもつようになること。

問4 傍線部C「伝統的な経済学の『錯覚』」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 産業資本主義の時代に、農村から都市に流入した労働者が商品そのものの価値を決定づけたために、伝統的な経済学は、価値を定める主体を富の創造者として実体化してしまったということ。

② 産業資本主義の時代に、都市の資本家が農村から雇用される工場労働者を管理していたために、伝統的な経済学は、労働力を管理する主体を富の創造者と仮定してしまったということ。

③ 産業資本主義の時代に、大量生産を可能にする工場制度が労働者の生産性を上昇させたために、伝統的な経済学は、大きな剰余価値を生み出す主体を富の創造者と認定してしまったということ。

④ 産業資本主義の時代に、都市の資本家が利潤を創出する価値体系の差異を積極的に媒介していたために、伝統的な経済学は、その差異を媒介する主体を利潤の源泉と見なしてしまったということ。

⑤ 産業資本主義の時代に、農村の過剰な人口が労働者の生産性と実質賃金率の差異を安定的に支えていたために、伝統的な経済学は、労働する主体を利潤の源泉と認識してしまったということ。

問5 傍線部D『人間』は、この資本主義の歴史のなかで、一度としてその中心にあったことはなかった」とあるが、それはどういうことか。本文全体の内容に照らして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 商業資本主義の時代においては、商業資本主義の体現者としての「ヴェニスの商人」が、遠隔地相互の価格の差異を独占的に媒介することで利潤を生み出していたので、利潤創出に参加できなかった「人間」の自己愛には深い傷が刻印されることになった。

② アダム・スミスは『国富論』において、真の富の創造者を勤勉に労働する人間に見いだし、旧来からの交易システムを成立させていた「ヴェニスの商人」を市場から退場させることで、資本主義が傷つけた「人間」の自己愛を回復させようと試みた。

③ 産業資本主義の時代においては、労働する「人間」中心の経済が達成されたように見えたが、そこにも差異を媒介する働きをもった、利潤創出機構としての「ヴェニスの商人」は内在し続けたため、「人間」が主体として資本主義にかかわることはなかった。

④ マルクスはその経済学において、人間相互の関係によってつくりだされた価値が商品そのものの価値として実体化されることを物神化と名付けたが、主体としての「人間」もまた認識論的錯覚のなかで物神化され、資本主義社会における商品となってしまった。

⑤ ポスト産業資本主義の時代においては、希少化した「人間」がもはや利潤の源泉と見なされることはなく、価値や富の中心が情報に移行してしまったために、アダム・スミスの意図した「人間主義宣言」は完全に失効したことが明らかとなった。

問6 この文章の表現について、次の(i)・(ii)の各問いに答えよ。

(i) 波線部Xのダッシュ記号「――」のここでの効果を説明するものとして**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 直前の内容とひと続きであることを示し、語句のくり返しを円滑に導く効果がある。
② 表現の間(ま)を作って注意を喚起し、筆者の主張を強調する効果がある。
③ 直前の語句に注目させ、抽象的な概念についての確認を促す効果がある。
④ 直前の語句で立ち止まらせ、断定的な結論の提示を避ける効果がある。

(ii) この文章の構成の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 人間の主体性についての問題を提起することから始まり、経済学の視点から資本主義の歴史を起源にさかのぼって述べ、商業資本主義と産業資本主義を対比し相違点を明確にした後、今後の展開を予測している。
② 差異が利潤を生み出すことを本義とする資本主義において、人間が主体的立場になかったことを検証した後、その理由を歴史的背景から分析し、最後に人間の自己愛に関する結論を提示している。
③ 人間の自己愛に隠された傷があることを指摘した後で、差異が利潤を生み出すという基本的な資本主義の原理をふまえてその事例の特徴を検証し、最後に冒頭で提起した問題についての見解を述べている。
④ 差異が利潤を生み出すという結論から資本主義の構造と人間の関係を検証し、人間の労働を価値の源泉とする経済学の理論にもとづいて、具体的な事例をあげて産業資本主義の問題を演繹(えんえき)的に論じている。

(note)

7　論理的文章　〈出題意図を意識する〉

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

音楽の場が侵すべからざる非日常的な空間であったコンサートホールを離れて日常生活の場へと移動したということは、音楽を日常化させ、聴き手の聴取態度を根本的に変質させた。純粋に鑑賞を目的とした聴衆たちが集まってくる特殊な空間の中で作品の中に作者の個性を聴き取り、その個性の結晶としての表現を読みとるという極度に集中的・精神的な性格をもっていた聴取行為は、日常生活の中に移されることによって、散漫で表面的な環境体験へと形を変える。

こうした動きは最近の新しいメディアの登場によってさらに加速化された。ヘッドホンステレオの出現によって、人々はオーディオ装置の置いてある場所にすらゆく必要がなくなり、音楽を一つの環境として持ち歩くことができるようになった。また、CDの出現は作品の一部分をピックアップして繋ぎ合わせて聴くような断片的な聴き方を容易にし、その結果、作品は作者の個性によって統一された一つのまとまった全体であることをやめ、局所的な刺激断片の集合体と化した。

かつては厳しく排除された断片的な感覚刺激を求める聴き方が、作品を作者の精神と結びつけ、そこに作者の思想を読みとろうとするような「真面目」な聴き方をク(ア)チクする。残ったのは表層的な感覚刺激と戯れるA「軽やかな」聴衆の存在である。音楽のスタイルもまたそうした聴き方に対応して変化し、今や音楽文化全体が「軽やか」になりつつある、二〇世紀に進行した聴取形態の変化をやや乱暴にまとめればそんなところになるであろう。

（渡辺裕「聴衆の『ポストモダン』？」）

問1　傍線部(ア)〜(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の①〜⑤のうちから、一つ選べ。

(ア)　クチク

① チクイチ報告する。
② 家屋をゾウチクする。
③ チクサン業に従事する。
④ ハチクの勢い。
⑤ チョチクを奨励する。

問2　傍線部A「『軽やかな』聴衆」とあるが、聴き手の聴取態度のどのようなありかたを『軽やかな』といっているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 各人の好みで曲の一部を断片的に聴いたり、日常生活の中で時や場所を選ばず手軽に音楽を楽しむようなありかた。

② それぞれが軽妙と感じる曲をピックアップして聴いたり、日常生活を彩る重要なBGMとして楽しむようなありかた。

③ 適当に選んだ曲から作者の思想を探して楽しんだり、日常生活の折々に所構わず熱中して音楽を聴くようなありかた。

④ 好きな曲を気ままに繋ぎ合わせて楽しんだり、日常の生活から逃避するために集中的に音楽を聴くようなありかた。

⑤ 軽快な旋律を選んで編集して楽しんだり、日常生活に適度な刺激を与えてくれる効果音として聴くようなありかた。

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

だが本当にそうなのだろうか？

まず、「作曲家神話」の形成というかなり具体的なテーマを論ずることからはじめたい。一九世紀という時代はとりわけ B大作曲家に関する数多くの「神話」を生み出してきた。そして最近の研究の中で、バッハ、モーツァルトらの巨匠たちに関してわれわれがこれまで信じてきた話の多くが虚構であったことが明らかにされるようになり、多くの「神話」が解体されるにいたった。

バッハがその人生の後半、ライプツィヒにとどまり、敬虔（けいけん）なルター派信者として宗教音楽に没頭したという話は、(注1)教会カンタータの作曲年代の研究の進展とバッハの手紙などの新資料の発見によって、ほとんど否定され、彼の教会音楽への関心はライプツィヒに移って間もなく失われてしまったらしいことが判明した。

晩年のモーツァルトが人々に理解されなかったために、自作を演奏してもらえず、生活費にも事欠くほど貧乏しながら(イ)**ケンメイ**に清らかな作品を書き続けたという話も、ウィーンでの演奏会記録の調査などから最近では疑問視されはじめ、ついにはモーツァルトが貧乏したのはビリヤードをやりすぎてすってしまったからにちがいないなどという説まで登場する始末である。

ベートーヴェンを描いた肖像画や彫像の体系的な調査によって、われわれがよく眼（め）にする、あの眼光鋭い強そうな顔は一九世紀後半以降に急速に普及したものであることが明らかとなった。個々の歴史的事実のみならず、自らの**カ**(ウ)**コク**な運命に抗して強靭（きょうじん）な意志力をもって一生を闘い続けた作曲家ベートーヴェンという作曲家のイメージ自体が、一九世紀に形成された「神話」だったともいえるのである。

これらの「神話」の多くが近代的な聴取形態の確立した一九世紀に形成され、最近になって、そのような聴取形態の崩壊とともに解体したのは偶然ではない。この種の「神話」は、まさに現代において解体しつつある「真面目な」聴衆を支えてきた「純粋鑑賞」の精神の所産であるということができるからである。

この種の神話の多くがその作品を作った作曲家の人格や作曲家がそれを作った時の状況に関するものであることに注意しておきたい。聴き手は作品を聴きながら作者の人格や個性を感得し、作曲をした時の作者の心情に思いを馳（は）せる。それは作品を鑑賞するという行為が、まさにそのようにあるべきだと考えられてきたからである。作品が作者の精神の結晶であり、その個性の発露であるという限りにおいて、作品を純粋に鑑賞するとはそのようなことなのであり、ただ音を追うだけの感覚表層の快楽に流された行為は真の鑑賞とはいえないということになる。

Cところがここに一つのパラドックスがある。作品を純粋に鑑賞するということは、同時に聴き手が作者を離れた作品それ自体に集中するということをも要求するからである。学者でもない限り、聴き手は鑑賞の際に現実の作者についての伝記を調べて裏付けをとるなどということはしない。もちろん聴き手が現実の作曲家や作曲の状況についての知識を動員する場合もあるにせよ、そういうことを調べるのは学者の役割であり、それがなければ鑑賞が成り立たないわけではない（もしそうであれば、われわれの鑑賞行為はほとんど成り立たなくなってしまうであろう）。

鑑賞行為はむしろ、よけいな知識のような不純な要素を排して、作品に純粋に集中することでなくてはならなかった。その結果作者の人格や作曲の状況は、実証的なドキュメントによってではなく、鑑賞者の想像力によって補われることにならざるを得ないのである。

これは西洋の近代的な芸術作品の基本的なあり方にかかわっている。

作者は実在の人間として現実の(注2)コンテクストの中で作品を作るが、それが公にされ、純粋に鑑賞される対象となるという限りにおいて作品はそういう現実のコンテクストからは切り離される。そしてこうして現実のコンテクストからいったん切り離された作品に、聴き手は鑑賞行為の中で想像力によって再び新たなコンテクストを纏わせるのである。その結果、現実の作曲家や作曲の状況ではなく、作品をもとに想像力によってイメージされた作曲家や作曲の状況が作品というテクストに対するコンテクストとして聴き手にもたらされる。

作曲家にかかわる「神話」はそのような間隙を縫って作品に付着してくる。一九世紀におびただしくもたらされたさまざまな「作曲家神話」はこのような近代的な芸術作品のあり方から構造的に生み出されてくるのであり、それが作品を純粋に鑑賞し、作者の精神の所産として解釈しようとする近代的聴取態度の相関者であることは以上のことから納得されるであろう。

（渡辺裕「聴衆の『ポストモダン』？」）

（注）1　教会カンタータ――声楽曲の一形式。
2　コンテクスト――文脈。ここでは作品をとりまく状況や情報。

問1 傍線部(イ)・(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(イ) ケンメイ

① 鉄棒でケンスイをする。
② 生命ホケンに入る。
③ 社員をハケンする。
④ ケンシン的に看病する。
⑤ 昼夜ケンコウで働く。

(ウ) カコク

① 深山ユウコクに分け入る。
② 図をコクメイに描く。
③ イッコクを争う。
④ 肉体をコクシする。
⑤ 豊かなコクソウ地帯。

問3 傍線部B「大作曲家に関する数多くの『神話』とあるが、それらの『神話』はどのようにして成立したと考えられるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① ベートーヴェンの肖像画や彫像によくみられる眼光鋭い強そうな顔のイメージから、彼が自らの運命の厳しさに屈することなく、強靭な意志力をもって一生を闘い続けた作曲家であったという「神話」が生じてきた。

② モーツァルトがビリヤードをやりすぎて貧乏になったという事実は、彼の音楽が与える清澄な印象によって純化され、貧しい中でも作曲活動をおろそかにすることはなかったという「神話」を生み出すにいたった。

③ 肖像画や彫像どおりの眼光鋭く雄々しいベートーヴェンの顔つきが、彼の音楽が与える勇壮な印象と重ね合わせられることで、彼が苦難に満ちた自らの人生に敢然と立ち向かったのだという「神話」が形成された。

④ 人生の後半においてバッハがライプツィヒにとどまった事実は、敬虔なルター派信者のイメージとあいまって、彼が宗教音楽に没頭し、数々の荘厳なカンタータを作曲したという「神話」を生み出すことになった。

⑤ モーツァルトの音楽が与える清澄な印象から、晩年の彼が当時の人々に理解されず、作品を演奏してもらえないという苦境に陥りながらも、貧困の中でひたむきに作品を書き続けたという「神話」が生み出された。

問4 傍線部C「ところがここに一つのパラドックスがある」とあるが、なぜ「パラドックスがある」といえるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 作品を純粋に鑑賞するとは、作者の心情を想像しながら聴くことであると考えられると同時に、ただ作品を表層的に受容することをも要求されるという二面性をもつといえるから。

② 作品を純粋に鑑賞するとは、作者の思想を真面目に取り入れることであると考えられると同時に、作者とは切り離されたものとして受け入れることをも要求されるという二面性をもつといえるから。

③ 作品を純粋に鑑賞するとは、作者の精神や個性を感じ取ることであると考えられると同時に、ただ作品を作品そのものとして享受することをも要求されるという二面性をもつといえるから。

④ 作品を純粋に鑑賞するとは、作者が曲を作った時の状況を調べたうえで聴くことであると考えられると同時に、作品に集中して聴くことをも要求されるという二面性をもつといえるから。

⑤ 作品を純粋に鑑賞するとは、作者の人格や精神と結びつけて聴くことであると考えられると同時に、精神を集中することによって感受することをも要求されるという二面性をもつといえるから。

【3】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

そういう点からすれば、現代の聴衆のあり方はまさにそのような神話を生み出す構造の対極にあるといえるだろう。彼らが「軽やかな聴衆」として刹那(せつな)的・つまみぐい的に作品とかかわるという限りで、またそれを作曲家の人格の所産として精神的に鑑賞することをやめてしまうという限りで、神話は生み出されることはない。その意味で現代が「脱神話化」の時代であるということは決して偶然のことではない。

だが、これは事柄の一面に過ぎない。Dなぜなら現代はまた作品というテクストとコンテクストとの別の形のかかわりを生じさせているからである。その一例として映像メディアの存在を挙げることができる。

レコードやCDが聴覚以外の要素を捨象して「純粋鑑賞」の原理を推し進めたのに対して、最近ではビデオや(注3)LDなどの視覚メディアが普及し、視覚的な要素を捨象して聴覚的な要素だけを取り出してきた従来の音響メディアがいかに一面的であったかが明らかになってきた。オペラのようにもともと視覚的要素が重要であったものはいうに及ばず(オペラのレコードやCDなどという、よく考えてみれば欠陥商品としか思えないようなものが堂々と出回っていたところにかつての「純粋鑑賞」のありようが象徴されている)、純粋な器楽演奏でも音響が視覚映像とともに与えられることによって異なった印象が生ずる。

これは一面ではあらゆるコンテクストを消去して純粋に音だけを求めてきた近代的な「純粋鑑賞」に対する(注4)アンチテーゼともいえ、ある場面では、コンテクストをも含めたトータルな体験を回復することによって「純粋鑑賞」によって生じる神話を除去する方向にはたらく。事実、ビデオやLDで熊(くま)のような顔をしたピアニストが(エ)**センサイ**な音楽を紡ぎ出している光景を眼にすることがある。もし音だけ聴いていれば演奏家に関する何らかの「神話」が生じたかもしれないが、映像によって演奏家の顔という現実のコンテクストが与えられることによって、想像力によって別のコンテクストが付加されることが妨げられたのである。

しかしながら、映像はまた別の形で新たな神話を作り出すこともある。作曲家やそれにまつわる題材を取り上げた映像が音楽とともに与えられることによって、映像はその作品にかかわる架空のコンテクストを生み出す。しかも文字で書かれた伝記とは異なり、映像のもつ圧倒的なインパクトと、その音楽との巧妙な結合によって引き起こされる強烈なイメージは、このようなコンテクストを生み出すうえで絶大な効果を**ハッ**(オ)**キ**する。

(渡辺裕「聴衆の『ポストモダン』?」)

(注) 3　LD――レーザーディスク。映像・音声の記録媒体の一つ。
4　アンチテーゼ――ある主張に対立してとなえられる主張。

問1　傍線部(エ)・(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(エ)　センサイ

① 選手センセイをする。
② 左方向にセンカイする。
③ シンセンな魚介類。
④ ガスのモトセンをしめる。
⑤ 食物センイを摂取する。

(オ)　ハッキ

① キジョウの空論。
② キを一にする。
③ オーケストラをシキする。
④ コッキを掲揚する。
⑤ キに乗じる。

問5　傍線部D「なぜなら現代はまた……挙げることができる」とあるが、「映像メディア」は現代の音楽文化とどのように関係しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 映像メディアは、視覚的な要素をも含めたトータルな体験を回復することで「作曲家神話」を解体したが、その一方で視覚的な情報の方が聴覚的な情報よりも強いイメージをもつために別種の「神話」を作り出す原因にもなった。

② 映像メディアは、従来は捨象されていた視覚的な要素を回復することによって一九世紀的な「神話」を解消する方向にはたらくが、その一方で映像のもたらすイメージが作品と結びつくことで新たな「神話」を生成させることにもなった。

③ 映像メディアは、視覚的な要素を作品と結びつけることで近代の「作曲家神話」を解体したが、視覚的な情報のもつ圧倒的なインパクトと強烈なイメージを利用することで新たな「神話」を生み出すことにもなった。

④ 映像メディアは、視覚的な要素を強調することによって従来の「純粋鑑賞」がいかに聴覚的な要素に偏していたかを明らかにしたが、その一方で視覚的な要素を優位においたために新たな「神話」を作り出すことにもなった。

⑤ 映像メディアは、「純粋鑑賞」の原理を否定することによって「作曲家神話」を除去する方向にはたらくが、その一方で現実の作曲家や演奏家の視覚的な情報を与えることで別種の「神話」をもたらすことにもなった。

問6 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 筆者は、現代の聴衆が「不真面目」になったことを批判しているのではなく、近代の聴衆の「真面目」さが数多くの「作曲家神話」を生み出したのであり、それらの「神話」を解体するためには「不真面目」になることこそが必要であったのだと主張している。

② 筆者は、レコードやCDといった新しいメディアの出現が、音楽鑑賞の場をコンサートホールという特殊な空間から日常生活の場へと移動させたと概括したうえで、そのことによって音楽が一般の大衆へとひろがることになったと歓迎している。

③ 筆者は、現代が「脱神話化」の時代であるということは事柄の一面に過ぎないとしながらも、「作曲家神話」に支配された近代の聴衆のありかたに比べると、「神話」から解放された部分もある現代の「軽やかな聴衆」のありかたをより高く評価している。

④ 筆者は、「純粋鑑賞」とは、現実の作者から離れることと作者の思想や心情を感受することを同時に要求するものであったとしたうえで、そのために聴き手は現実から離れた作者像を想像力によって作り上げ、「作曲家神話」を生み出したと分析している。

⑤ 筆者は、現代の「軽やかな聴衆」が一九世紀に生成された「神話」を解体させつつあると賞賛しているわけではなく、彼らを「軽やか」にした新しいメディアも、「神話」の生成につながるコンテクストを生み出す可能性があることを指摘している。

⑥ 筆者は、レコードやCDの登場は音楽鑑賞の場を日常生活の場へと移動させ、ヘッドホンステレオの登場は音楽を持ち歩くことさえ可能にしたとまとめたうえで、しかしながら映像メディアが現代の音楽文化にもたらす変化はそれ以上に大きいと予想している。

(note)

8　文学的文章　〈設問への意識〉❶

次の文章は、堀江敏幸の小説「送り火」の一節である。父の死後、老いた母とのふたり暮らしが心細くなった絹代は、自宅の一部である二十畳敷きの板の間を独身女性に限定して貸し出すことにした。以下の文章はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

しかし、半年以上のあいだ、借り手はひとりもあらわれなかった。独身女性を対象とするには、設備がどうのより、いささかひろすぎるのが問題だったかもしれない。もう貸間なんてよけいなことを考えず、やっぱり母とふたりで静かに暮らそうとあきらめかけた二月末の寒い日曜日、事前になんの連絡もなくふらりとあらわれたのが陽平さんだった。周旋屋さん――不動産屋のことを陽平さんはそう言った――で、ひろい、板敷きの部屋がひとつ、空いている、とうかがったのですが、と当時四十代後半にさしかかっていたはずの陽平さんはなぜかいまとまったくおなじかすれ声の（ア）老成したしゃべり方で切り出し、申し訳ありません、男の方にはお貸ししないんですと驚くふたりに、はい、それはもう、うかがったうえで、やってきたんです、と言い、まだ二十代だった絹代さんの顔を恥ずかしくなるくらいじっと見つめて、おだやかにつづけたのである。じつはむかしからの夢である書道教室を開く決心をかためて、会社を辞めた。交通の便のいい町なかは高すぎるし、そもそもじゅうぶんなひろさの部屋がない。公民館の集会室を借りようかとも考えたのだが、椅子（いす）と（注1）リノリウムの床ではしっくり来ないし、それよりなにより、公共施設でお金をとる催しはできないと役所に断られて行き詰まった。たしかにここは不便そうに見えるが、バスもあるし、山の上の小学校の通学路にもなっているから、近隣の子どもたちを集めやすいと思う、もしできるならば、住むのではなく、毎日、夕方から夜にかけての何時間かだけ、お宅を教室として貸していただけないものか。陽平さんは部屋も見ずに、風呂あがりのような表情でそう語って頭を下げた。

母と娘は、正直、（イ）不意をつかれて顔を見合わせた。男性に、しかも書道教室として貸すなんて考えもしなかったからだ。ともあれせっかくだからと部屋を案内し、どうぞ召しあがってくださいと陽平さんから差し出された豆大福をお茶請けに三人で話をしているうち、絹代さんは、このひとが会社を辞めたのは書道教室を開く開かないという以前に、勤め仕事にむいていなかったからだろうと思った。Aまわりを担んだりはしないけれど、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気を持っている。年齢も、まったく読めなかった。でも、なんだかこの人なら信用できそうだと絹代さんは直感し、まだとまどっている母親に、小さな子が集まるんならにぎやかでいいんじゃないかな、楽しそうだから、貸してあげましょう

5　10　15　20　25

よ、と好意的な意見を述べた。母親は母親でまたちがう基準から陽平さんを眺めていたらしいのだが、自分よりも遅いペースで話す男の人をひさしぶりに見たと言ってしまいには納得してくれたのである。

貸し教室としての賃料は不動産屋で適切な額を見積もってもらい、数日後には与えられた書式での契約を無事に済ませる早わざで、それから十日ほどのちに、折り畳み式の細長い座卓が五つと薄い座布団が十数枚、そのほか、紙だの墨だの筆だの作品を乾かすのにつかう下敷きとしての古新聞だのといった消耗品がつぎつぎに運び込まれて（ウ）教室の体裁をなし、新学期がはじまって落ち着いたころには、貼り紙や口コミも手伝って、学年もばらばらな小学生が五名集まった。とても暮らしが成り立つような人数ではなかったけれど、夏休みを迎えるまでには総勢十二名となり、家の空気もがらりと変わってしまった。勤めている駅裏の大手電器店から絹代さんが自転車で帰ってくると、いちはやく学校を終えた低学年の子どもたちが課題を済ませていて、新興の一戸建てばかりで古い田舎家を知らない彼らは、ぎしぎしきしむ階段があるだけでもう楽しいらしく、わざと大きな音をたてて降りてくる。階段は居間の一角にあるので、教室に出入りする子どもたちは、絹代さんと母親の生活をそのまま横切っていくことになり、なんだか親類の家に遊びに来ているような雰囲気なのだ。そしてかならず、おばちゃん、おばあちゃん、さよなら、と言って帰っていく。この年でおばちゃんはないよ、と泣くふりをしたりすると子どもたちは逆に喜んで、ぜったいにおねえちゃんとは呼んでくれない。そして、B絹代さんにはなぜかそれがとても嬉しかった。

絹代さんは遅い子どもだったから、母親はそのころもう還暦を過ぎていたのだが、夕方、じっと坐っているだけでだんだんお腹がすいて、集中力がなくなってくる小さな子どもたちのために、ずっと悩まされている膝の痛みも忘れて、ふだん口にしているより味を濃くして食べやすく工夫した煮付けとご飯の簡単な食事を用意したり、おやつにおはぎをつくったりするようになった。これには絹代さんと陽平さんのぶんも入っていたので、日々の延長でしかなかったとはいえ、それでも大人数の食事を用意することに忘れていた喜びを見出した様子で、母親の気の張りはまちがいなく娘にも伝わった。絹代さんも仕事が終わってからのつきあいを抑えて、子どもたちとまじわるために帰宅を急ぐようになったからである。食事のできる書道塾はやがて親たちのあいだで評判になり、外出予定が入っている日など、もっと遅くまで子どもをあずかってもらえないかと頼んでくる人も出てきた。子どもたちは、陽平先生に赤丸をもらったあと、すすも油汚れもないきれいなランプがいくつもぶらさがっている階下の居間で食事をし、そのまま食卓で宿題をやったり、隣の畳の間に置いてあるテレビを見たりする。話についていけない母親のかわりに、そういうときはどうしても絹代さんがいなければならず、本業がどちらにあるのだかわからなくなるほどだった。

最初のうち、絹代さんは遠慮して教室の様子をのぞくことはしなかったのだが、親からの電話で子どもを呼び出したり、おやつの差し入れをしたりするときには、どうしたって見え

てしまう。階段のすぐ近くに物入れがあるため、陽平さんは取り出しやすいようにとそのまえに自分の机を置いていた。だから子どもたちの顔を見るより先に、彼らのほうをむいて坐っている陽平さんの、針金でも入っているんじゃないかと疑いたくなるくらいまっすぐな背中と鶏ガラみたいにほそい首筋を拝まなければならないのだが、手本をしたためているときも朱を入れているときも、硯で墨をすっているときも、子どもたちと言葉を交わしているときも、まだ(注2)枕を話しているだけで本編に入っていない噺家みたいに座布団から垂直に頭がのびていて、その姿勢がまったく変化せず、食事の際も変わらないものだから、たまに傾いているとかえって不自然な感じがするのだった。(注3)墨は餓鬼に磨らせ、筆は鬼に持たせよ。教室の壁に貼られた格言の、ここぞというときには力が発揮できるのにそれをあえて抑える自然体は――そういう意味だと教えてくれたのは、もちろん陽平さんだ――、すべての行動に当てはまる指針だと思った。

しかし、Cとりわけ絹代さんを惹きつけたのは、教室ぜんたいに染みいりはじめた独特の匂いだった。子どもたちはみな既製の墨汁を使っており、時間をかけて墨を磨るのは陽平先生だけだったけれど、七、八人の子どもが何枚も下書きし、よさそうなものを脇にひろげた新聞紙のうえで乾かしていると、夏場はともかく、窓を閉め切った冬場などは乾いた墨と湿った墨が微妙に混じりあい、甘やかなのになぜか命の絶えた生き物を連想させるその不気味な匂いがつよくなり、絹代さんの記憶を過去に引き戻した。まだ小さかったころ、ここにも生き物がうごめいていたのだ。絹代という名前は祖父母がつけてくれたもので、彼らはこの古い家の二階で細々と養蚕を手がけ、生活の資をさずけてくれる大切な生き物を、親しみと敬意をこめて「おかいこさん」と呼んでいた。同居していた息子夫婦はともに会社勤めだったから、孫の絹代さんがあとを継ぐ可能性はほとんどなかった。あの時分はまだ片手間にでも養蚕にかかわっている家がいくらもあったし、そこで生まれた娘に絹子だの絹江だの絹代だのといった名前をつけることもないではなかったが、絹代さん自身は、二階の平台にならべられた浅い函の底をわさわさとうごめいている白っぽい芋虫の親玉と自分の名前がむすびつけられるのを、あまり好ましく思っていなかった。

触ってごらん、と言われるままに触れたその虫の皮はずいぶんやわらかく、しかも丈夫そうだった。使いこんだ白い鹿革の手袋の、ところどころ穴があいたふうの表面の匂いとかさっく音をこの書道教室に足を踏み入れた瞬間ふいに思い出し、匂いといっしょに、あのグロテスクな肌と糸の美しさの、驚くべきへだたりにも想いを馳せた。あたしは肌がつるつるさらさらして絹みたいだから絹江になったの、絹代ちゃんとこみたいに蚕を飼ってるからつけられた名前じゃないよ、と一文字だけ名前を共有していたともだちが突っかかるように言った台詞が、絹代さんの頭にまだこびりついている。生家の周辺を離れれば、養蚕なんてもう、ふつうの女の子には気味の悪いものでしかない時代に入っていたのだ。それなのに、墨の匂

いを嗅いだとたん、かつてのおどろおどろしい記憶がなつかしさをともなう思い出にすりかわったのである。陽平さんにそれを話すと、墨はね、松を燃やして出てきたすすや、油を燃やしたあとのすすを、膠であわせたものでしょう、膠っていうやつが、ほら、もう、生き物の骨と皮の、うわずみだから、絹代さんが感じたことは、そのとおり、ただしい、と思いますよ、と真剣な顔で言うのだった。生きた文字は、その死んだものから、エネルギーをちょうだいしてる。重油とおなじ、深くて、怖い、厳しい連鎖だね。

なぜだろう、絹代さんはそのときはじめて、陽平さんのこれまでの人生を、あれこれ聞いてみたいとつよく思った。ほとんど毎日顔を合わせて食事をしているこの不思議な男の人の過去と未来を知りたい気持ちがどんどんふくらんで、それを押しとどめることができなくなっていった。どこで生まれて、どこで育って、どんな子ども時代、どんな青年時代を送ったのか。教室を閉めたあと、無理に頼んで持ってきてもらった古いアルバムを居間で開きながら飽きもせずに質問を重ねていると、これまで陽平さんを知らずにいたことがとても信じられなかった。絹代さんの横顔にときどき視線を投げながら、陽平さんは遅くまで、質問のひとつひとつに、あまりにまじめすぎて逆にはぐらかされているのではないかと聞き手が不安になるほど丁寧な説明をくわえた。そういう陽平さんの顔を、今度は絹代さんが見つめているのだった。

絹代さんの気持ちが固まったのは、翌年、あんなに楽しそうに子どもたちと接していた母親が心臓発作で急死して、その喪が明けたさらに翌年の正月のことだ。全員参加の書き初め大会が教室で開かれ、四文字以内で好きな言葉を清書し、それをみんなに披露しながらひとりずつ新年の抱負を述べたとき、陽平さんは最後にすっくと立ちあがって一同を見渡し、当時大変な人気があったテレビ番組にひっかけて「絹への道」と書いた紙を掲げると、シルク、ロード、です、これが、ぼくの、今年の、抱負、です、と例の口調でそう読みあげておおいに笑いを取ったのだが、子どもたちには洒落にしか聞こえない話で陽平さんがなにを言おうとしているのか、「初日の出」だなんてありきたりな言葉でお茶をにごした飛び入り参加の絹代さんにはすぐに理解できた。頬が少しほてった。有名な女優さんとおなじだねえと大人たちからいくら褒められても嬉しくなかった名前を、陽平さんは、あたたかい、人肌に触れるために生まれてきたなめらかな布地に、一瞬で変えてくれたのである。

(注) 1 リノリウム——建築材料の一つ。
2 枕——本題に入る前の導入部分。
3 墨は餓鬼に磨らせ、筆は鬼に持たせよ——本来は、墨をするときはやわらかくすり、筆を使うときは力を込めて勢いよく書くのがよいというたとえのこと。

問1 傍線部ア～ウの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) 老成した
① しわがれて渋みのある
② 知性的で筋道の通った
③ 年のわりに落ち着いた
④ 重々しく低音の響いた
⑤ 静かでゆっくりとした

(イ) 不意をつかれて
① 突然の事態に困り果てて
② 見込み違いで不快になって
③ 予想していないことに感心して
④ 初めてのことであわてて
⑤ 思いがけないことにびっくりして

(ウ) 教室の体裁をなし
① 教室の準備がようやく済んで
② 教室とは異なった感じになって
③ 教室として立派になって
④ 教室がいったん雑然として
⑤ 教室らしい様子になって

問2 傍線部A「まわりを拒んだりはしないけれど、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気を持っている」とあるが、「絹代さん」は「陽平さん」をどのような人物としてとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 穏和で誠実な感じであるが、泰然自若として周囲に惑わされない人物。
② 包容力があり寛大な面もあるが、無為自然で隠遁(いんとん)者を思わせる人物。
③ 爽(さわ)やかで優しい印象を与えるが、謹厳実直で慎重に物事を判断する人物。
④ 柔軟性があって温厚であるが、闊達(かったつ)自在で思いのままに行動する人物。
⑤ 慎み深く控えめであるが、直情径行で確固とした意志を持った人物。

問3　傍線部B「絹代さんにはなぜかそれがとても嬉しかった」とあるが、この部分を含む子どもたちとのやりとりを通してうかがえる「絹代さん」の心情とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 「おねえちゃん」と呼ばれて当然だと思っていたが、「おばちゃん」という呼び方に表れた子どもたちの気さくな態度に触れたので、仲間意識の高まりを感じて嬉しく思っている。

② まだ二十代なのに「おばちゃん」と呼ばれるのは不本意ではあるが、自分を頼りにする子どもたちの気持ちが伝わってくるので、保護者になったように感じて嬉しく思っている。

③ 子どもたちから「おばちゃん」と呼ばれると年寄り扱いされているようで嫌だったが、陽平さんに近づいたような気がしたので、書道教室を一緒に経営しているように感じて嬉しく思っている。

④ 父親の死後、母親とふたりきりで寂しく暮らしていたが、自分になついて遠慮なく振る舞う子どもたちとにぎやかに交流するようになったので、家族に対するような親密さを感じて嬉しく思っている。

⑤ 部屋を貸すまで、大人ばかりで静かに暮らしていたが、泣くふりをすると喜ぶ生意気盛りの子どもたちが出入りするようになったので、以前の活気がよみがえったように感じて嬉しく思っている。

問4　傍線部C「とりわけ絹代さんを惹きつけたのは、教室ぜんたいに染みいりはじめた独特の匂いだった」とあるが、「絹代さん」が匂いに惹きつけられたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 家族と過ごした幼年時代の記憶が墨の匂いによって呼び起こされ、子どもたちと一緒にいる楽しい時間と重なって鮮やかによみがえってきたから。

② 自分の名前と結びついたグロテスクな姿態の蚕にまつわる記憶が、墨の匂いによって、家族とつながるなつかしい思い出に変化したから。

③ 家族の生活の資をさずけてくれる大切な生き物として、かつては蚕に親しみと敬意を感じていたことを、墨の匂いを嗅ぐことによって思い出したから。

④ 気味の悪いものでしかなかった養蚕にかかわる思い出が、墨の匂いを通してよみがえったが、書道を教える陽平さんへのほのかな想いへと変質したから。

⑤ 墨の匂いが死んだ生き物を連想させ、蚕を飼っていた忌まわしい記憶を呼び起こしたが、そのときの生活をなつかしく思い出したから。

問5 傍線部D「有名な女優さんとおなじだねえと大人たちからいくら褒められても嬉しくなかった名前を、陽平さんは、あたたかい、人肌に触れるために生まれてきたなめらかな布地に、一瞬で変えてくれたのである」とあるが、ここに至るまでの「絹代さん」の心の動きはどのようなものと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 絹代という名前が美しい有名な女優と同じだと言われても、過去の嫌な記憶に結びつくので好きになれないでいたが、陽平さんが墨の由来とともに名前の意味を教えてくれ、皆の前でシルクロードになぞらえた愛情告白をしてくれたため、温かい気持ちになっている。

② 墨の匂いに関連した生き物の死と人間の営みとのつながりを教えてくれた陽平さんから、書き初めに託された愛情表現を受けたことで、好きになれなかった名前とともに自分のことも肯定的に受け止められるようになり、陽平さんと一緒に生きていこうと考えている。

③ これまで好きになれなかった養蚕の記憶に結びついていた自分の名前が、陽平さんの愛情告白を秘めた書き初めによって、悠久の歴史を想起させるシルクロードとも結びつくものだと気づき、これまでの人生を肯定的に受け入れることができるようになっている。

④ かつては友達にからかわれた養蚕の記憶しかなかった自分の名前が、陽平さんのまっすぐな生き方を知ることによって、家族との温かい生活の思い出に結びつくものだと理解するようになり、慕っていた陽平さんとともに生きていく喜びでいっぱいに なっている。

⑤ 陽平さんの書道に対する姿勢にひかれる一方、墨の匂いでよみがえった自分の過去に思いをはせることで、ようやく自分の名前の意味を肯定的に受け止めることができるようになったので、書き初めに託された陽平さんの愛情を受け入れようと決心している。

問6 この文章における表現の特徴について説明したものとして適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 「鶏ガラみたいにほそい首筋」「まだ枕を話しているだけで本編に入っていない噺家みたいに座布団から垂直に頭がのびていて」のように、「陽平さん」の姿が比喩表現を用いて描写されることによって、「陽平さん」を見つめる「絹代さん」の特異な感性が強調されている。

② 「甘やかなのになぜか命の絶えた生き物を連想させるその不気味な匂い」「使いこんだ白い鹿革の手袋の、ところどころ穴があいたふうの表面の匂いとかさつく音」のように、感覚に訴える表現が多用されることによって、絹代さんの実感が巧みに表現されている。

③ 「おばちゃん、おばあちゃん、さよなら、と言って帰っていく」「触ってごらん、と言われるままに」などでは、かぎ括弧を用いずに会話の内容が示されることによって、現実感が生み出され、会話を発する人物が生き生きと描き出されている。

④ 「わざと大きな音をたてて降りてくる」「隣の畳の間に置いてあるテレビを見たりする」のように、回想の形で語られる中に現在形の表現が挿入されることによって臨場感が強められ、登場人物の心理状態と行動との結びつきが明示されている。

⑤ 「はい、それはもう、うかがったうえで、やってきたんです」や「シル、ク、ロード、です、これが、ぼくの、今年の、抱負、です」のように、読点で区切りながら陽平さんの話し方が描写されることによって、その人物像が浮かび上がるように工夫されている。

⑥ 「陽平さん」「陽平先生」「絹代さん」など、人物同士がふだん呼び合っている名称や、「ひとりもあらわれなかった」「いささかひろすぎる」など、平仮名書きが多用されることによって、大人の世界に子どもの視点が導入され、物語が重層的に語られている。

9　文学的文章　〈部分と全体〉❶

次の文章は、北杜夫の小説『幽霊』の一節である。主人公の「僕」は、ある日、少年野球チームの投手に選ばれたものの、運動神経が発達し、口笛のうまい、いろいろな能力を持つ従兄に依然としてコンプレックスを感じていた。本文はそれに続く話である。これを読んで、後の問いに答えよ。

それはそれとして、学課のうえでのささやかな自負が僕を訪れることもないではなかった。だが、それはあくまでも湿っぽい憂鬱な自負にちがいなかった。もしも従兄の持っている才能のひとつと引き換えができるのだったら、僕は喜んでそれらのすべてを放棄したことだろう。ただ図画に関しては、僕はかなりおおらかな気持ちで自分の能力をうけいれていた。なにも沢山の賞状を貰ったからではなくて、さまざまのものの形の魅力、一色とも見える単純な色合いのなかにも含まれている微妙な色彩の混合、そうしたものを識別し把握すること自体が僕を娯しませたからである。

投手に抜擢されたころのある日、僕は掃除当番であとにのこったことがあった。教師の点検もすみ仲間もかえってしまうと、列をなして並んだ几帳面な机と椅子のうえに、教室特有のがらんとしたしずけさがながれた。僕は運動靴の紐をなおしながら机に腰かけ、見るともなくあたりを見まわした。うしろの壁には優秀な図画や習字が貼られていた。四重丸をつけられたものがすべて貼りだされ、やがて貼る場所がなくなると、特に上手なのを一枚か二枚のこしてとりはずされるのだった。ちょうどそういう整理が行われたあとだったので、そこには六種類の図画が都合十枚だけのこっていたが、そのなかに僕の絵が六枚あった。

ふいに、いかにも子供っぽい、だが僕にとっては得体の知れぬ憤ろしさにちかい感情が、胸の底からわきあがってきた。

「この組には六十人もいるが」と僕は考えた。「僕ひとりのほうがその六十人よりうまいんだ、僕たったひとりのほうが……」

上半身をのばし、それらの絵をじっと眺めているうちに、僕は A 自分のなかにひそんでいる何者かが、皮膚をむずがゆくさせるのを感じた。そいつをごまかしてしまうことは不可能らしかった。そいつはしきりと僕をうながし、さあ描いてみろ、いっぺんお前の力をだしきってみろと囁くのだった。その日の午後に図画の時間があった。僕たちは花瓶をパステルで描かされたが、時間がおわると教師はその花瓶に百合の花をさしていた。おそらく次の時

間に上級のクラスがそれを描いたのであろう。

あやつられたように、僕はランドセルを片手でさげたまま、ひっそりとしたもの寂しい廊下をたどり、二階の図画教室をのぞいてみた。やはりがらんとした教室の四つの台のうえに、百合の花弁がしずまっているのが窺われた。そっと僕は足をふみいれ、いそいでランドセルから画用紙をとりだすと、ひとつの花の前に座をしめた。図画の教師に見つかったとしてもおそらく僕ならば叱られまいという気持ちが、とうとう僕を大胆にした。落ち着いてゆっくりとデッサンをとった。不満足だったのでそれを捨て、次の紙にはぶっつけに花弁から描きはじめた。ひとつの花弁は実物よりずっとねじくれてしまったが、そのほうがどうしても僕の心にかなった。気ままにかなり無雑作に、僕はやわらかいパステルをあやつった。白くぬられた花弁を爪でひとところぐっとこすると、にぶい光沢がうまれてきた。いつかの展覧会にだした僕の枇杷の絵に、図画の教師はそうした技法をほどこしてくれたのだった。そのうちに、ときたま廊下をとおる跫音も、かすかに校庭から伝わってくる放課後の遊び声も、すべて気にかからなくなった。熟れきった花粉嚢を描いたころから、僕は次第に我をわすれた。花瓶や茎や葉はごくざっとなぞっただけだったが、それがすこし歪んで大きすぎる花自体を巧みにつよめてくれるようであった。僕は花にだけ熱中した。花弁の白さのなかに、たそがれの光線が、雄しべ雌しべのかげが、バックの濃緑の布が、微妙な色あいを映していた。そういう捉えがたい陰翳をなんとしてもあらわしたかった。窓からながれている光が弱まるにつれ、そのさゆらぐかげは刻々に変化した。描いている僕のほうも変化するようだった。それゆえ、Bたかぶったやるせない努力はいつになっても終わりがなかった。ときどき訪れる呪縛から解きはなされたひとときに、僕は自分の絵が、台のうえの百合とはまるきり異なった、妖しい歪められたものになってゆくのを見た。花弁の色はもう白いとはいえなかったし、百合の花と見えるかどうかも危ぶまれた。それでも僕は、自分の描きだした奇態な像に執着した。たしかにそのほうが底の知れぬ魅力をたたえていた。実際本物の百合の花が、またどんなにつまらなく見えたことだろう。僕があの鳳蝶なら、もちろんこの絵の花にとびつくにちがいなかった。そして何色ともつかぬ花の香にむせり、くろずむまでに真紅の花粉のなかをころげまわるにちがいなかった……

どのくらいの刻がながれたかはわからない。ふと放心から覚めてみると、教室のなかはすっかり暗くなっていた。身体じゅうがふぬけたようにくたくたとなり、つみ重なった疲労が節々を痛ませた。僕は重たい頭をふり、すこしばかり伸びをして、ほとんど無関心に自分の

絵を眺めやった。ただうすぐろい色の混合が雑然と見えるばかりで、さきほどの興奮はどこかへ行ってしまった。それでも子細にながめると、この出鱈目な絵にはCなにか僕を満足させるものを含んでいた。僕は絵を二つに折り、パステルとともにランドセルにしまいこんだ。

また、なんという心身の疲れようだったろう。廊下にでるとそのまま坐りこんでしまいたかったし、空虚な後味がしきりにした。窓辺に立って僕は外を見た。空はまだ明るかったが、校庭はすっかり昏れてしまっていた。人っ子ひとり見えなかった。昏れのこった空の澄明さが、それを一層寂しげに見せた。僕は自分が絵に憑かれていたあいだ、ほかの子供たちが、おそらくはどんなに活発にたのしく遊んでいただろうかを考えた。ぎくしゃくとランドセルを背負いなおして、ぎしぎしときしむ階段をおりてゆきながらも、ふしぎな悔いが身をせめたてた。それはこう僕に告げた。

「Dつまらないことだ。益のないことだ。絵なんか、もう嫌いになれ」

僕は思いだしたように口笛をふこうとして口をとがらせた。すうすうと息の音ばかりがした。

問1 傍線部A「自分のなかにひそんでいる何者かが、皮膚をむずがゆくさせる」とは、どのようなことを述べているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 自分の図画の能力と、従兄の持っている才能のうちの一つとを引き換えにしたいというひそかな思いが、内部からおさえがたくわきあがってくること。

② 自分がひそかに自負している図画の能力を誇示し、認められたいという思いが、からだの奥底からおさえがたくおこって、しきりに外部にあらわれ出ようとすること。

③ 自分がこの組の六十人よりも図画がうまいのだということを誇らしく思う気持ちが、それを気恥ずかしく思う気持ちに打ち勝って、おさえがたく胸の底からわきあがってくること。

④ 自分の持っている本当の能力を、絵を描くことを通して存分にあらわしてみたいという欲求が、内部からおさえがたくわきあがり、その実行をうながしてくること。

⑤ 自分の内部にひそむ、子供っぽい得体の知れない憤ろしさが、おさえがたく胸の底からわきあがり、絵を描くことで、その解消をうながしてくること。

問2 傍線部B「たかぶったやるせない努力はいつになっても終わりがなかった。」とあるが、このときの心理の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 光線の加減で微妙に変化する百合の花弁の妖しい色あいに魅了され、対象の百合と一体になって、それを描くことに熱中するあまり、もはや時間の経過さえまったく意識されなくなってきている。

② 光線の加減で微妙に変化してやまない百合の花弁の色あいを、なんとかして描き出そうとすればするほど、内部のイメージもふくらみ変化して、なかなか自分の絵に満足しきれないでいる。

③ 百合の花弁の微妙な色あいを追求しようとするが、時間が経過するにつれ、自分自身も百合とともに変化していくので、描くにあたっての確固たる視点が定まらず、焦燥感におそわれている。

④ 百合の花弁を正確に描こうとすればするほど、画中の百合が、変化してやまない自分の内面に対応し、実物の百合とは似ても似つかないものに歪められていくように思っている。

⑤ 画中の百合が、時間の経過とともに、実物の百合とは異なった妖しいものに変化していき、絵に熱中する度合いもますます高まり、それにつれて対象の百合の魅力が増大するように感じている。

問3 傍線部C「なにか僕を満足させるものを含んでいた。」とあるが、なぜその絵は「僕」を満足させることになったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 絵の中の百合は、本物の百合と比較すれば、魅力に欠けるが、それは自分の全身全霊を打ち込んで描いたものにほかならないという自覚があったから。

② 絵の中の百合の妖しい歪められた像は、ありきたりな写実的描写からは到底生まれえないもので、自分の画才のすばらしさをあらためて感じさせたから。

③ 絵の中の百合は、出鱈目に見えるものの、自分が執着し表現しようとした、本物の百合にはない妖しい魅力をそなえているように感じられたから。

④ 絵の中の百合が出鱈目であるところに、かえって現在の自分が置かれている、追い詰められ、周囲に反抗したいという精神状況の反映が認められたから。

⑤ 絵の中の百合は、歪められているがゆえに、かえって妖しい魅力を感じさせ、図画の教師の高い評価を得るにちがいないという自信を持たせたから。

問4 傍線部E「つまらないことだ。益のないことだ。絵なんか、もう嫌いになれ」とあるが、このことばから主人公のどのような心の変化が読み取れるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 自他ともに認める図画の才能に存分の力をふるい、自分でも満足し得る出来ばえに陶酔感すら味わったが、冷静になると、その絵は出鱈目なものだと思われ、自己の才能に限りない絶望感を抱くとともに、無駄な時間を費やしたという苦い悔恨の思いをかみしめている。

② 得体の知れない憤ろしい感情に駆り立てられるままに、図画の才能を発揮することに自己を没入させ、自己陶酔することもできたが、われにかえると、自分の絵がいかにも雑然としたものに見え、挫折感と寂しさを味わいつつも、そのなかから新たに自己を鼓舞する決意も生まれはじめている。

③ 級友たちとは違った才能の持ち主だという優越感から、図画の才能に全力を傾け自己陶酔の世界に入りこんだが、その夢からさめてみると、これまでの自分がいかにも幼稚だったことが痛感され、その反省のなかから自分を冷静に客観視し得るような心の成長が訪れはじめている。

④ 自負する図画の才能を発揮しようと、自己の世界に没頭し陶酔したが、その後の虚脱感のなかで、しだいにその試みが、従兄や仲間たちの明るく自由な世界からほど遠く、ひとりよがりなものだったと感じられてきて、苦い悔恨と自己嫌悪に、いっそう深くとらわれはじめている。

⑤ 心の底からつき上げてくる創作意欲に駆り立てられ、自己独自の世界を築き上げることができたという満足感を味わうことはできたが、その陶酔からさめると、かえって自分の才能の貧しさだけが痛感され、言いようのない自己嫌悪と徒労感におそわれはじめている。

(note)

10 論理的文章 〈論理を捉える〉 ❶

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

近代西欧の作曲家たちは、各時代ごとに、「音楽とは何か」という問いにそれぞれ異なった解答を与えてきたように思える――例えば、音楽とは抽象的な音の組み合わせの楽しみであるとした一派もあれば、音楽とは作曲者個人の内面的感情の表出であると考えた時代もあった。しかし、音楽が何であると考えるにせよ、各時代各派の人々は、作曲行為の結果として産み出される音楽作品というものは完結性のある客体的な存在をもつ音響構成体である、という了解を暗黙の内に保ってきたようだ。そして、特に注目すべきことは、このような作品概念が、音楽を楽譜という形で紙に「書き記す」という伝統と表裏一体の関係にある、という点である。

よく知られているように、音楽を「書き記す」という伝統は、中世後期からルネサンスの(注1)記譜法の発明に(ア)**タン**を発する。それ以前の音楽は、基本的には口頭伝承に依存したものであったわけだが、合理的な記譜法の発明は、そうした音楽を紙の上に書き留めて保つことを可能にしたのである。そして、ルネサンス期に、そうした記譜法が、更に、ひとつひとつの音の高さや長さを合理的に正確に示し得るように改められてゆくにつれて、かつての口頭伝承依存の時代には思いもよらなかったような、A非常に複雑な音楽が可能になってくる――口頭伝承依存期の(注2)単旋律の聖歌に代わって、個々に独立した動きをもついくつもの(注3)声部が同時に組み合わされるような、複雑な(注4)対位法的音楽が、芸術音楽の主体となってゆくのである。こうした複雑な音楽は、書き記されない限り伝達し得ないというばかりではなく、その作曲そのものも、「書くこと」に依存してはじめて可能になる。それは、一篇の長大な小説や論文を(イ)**シッピツ**する文筆家の創作過程になぞらえてみればわかりやすいかもしれない。つまり、文筆家は、頭の中で自分の作品を完成してからそれを機械的に文字として書きつけてゆくわけではなく、書きながら考え、推敲を重ねることによって、徐々に自らの作品を実現してゆく。その意味では、「書くこと」なしには、考えを進めることもできず、したがって、その創作過程は、「書くこと」に依存している、と言えるだろう。このことは、音符を紙に書きつけて作曲してゆく作曲家の創作過程にも当てはまる。すなわち、音楽が紙に書き記されるようになって以来、作曲という創作行為をも含めた意味で、音楽は「筆

5 10 15 20 25

記」に依存するようになったのである。そして、筆記によって、作曲家は、音楽の細部から全体構造までにわたって入念な制御を行って、ひとつのまとまりのある音楽作品を仕上げることができる。恐らく、筆記に頼らずとも、完結性のある客体的な存在をもつ音楽作品を実現することは不可能ではないだろうが、筆記によってそれははるかに容易に行われ得るようになる。つまり、近代西洋音楽に広く行き渡っている作品概念は、音楽の筆記的本性によって促進されたものだ、とも言えるわけである。

さて、よく言われるように、紙に記された楽譜は、実際の演奏によって音響として実現されない限り、いまだ音楽ではない。存在論的な視点から考えれば、この指摘はまったく正しい。しかしその一方で、作曲家が自らの音楽作品を提示し得るのは、楽譜という形においてでしかない。作曲家は、自分の作品を直に音響として人々に提示することはできないのである(独唱曲や独奏曲の場合ならまだしも、合奏曲であれば、複数の楽器を自分ひとりで操るわけにはいくまい)。作曲家が提示した楽譜は、演奏者によって演奏されて、B音楽としての実体を得る。言い換えれば、作曲家が提示するものは、音楽作品そのものであるよりも、むしろ、その音楽作品の「(注5)テクスト」なのであって、演奏者は、その「テクスト」を解釈して音響化することで、その音楽作品を実現する。したがって、ある作品は、様々な演奏家によって色々な解釈の下で異なって実現され得るが、それらの諸実現がどれも同じひとつの「テクスト」に基づいてなされたものであるが故に、それらはすべて、そのひとつの特定の音楽作品として同定される――ベートーヴェンが作曲した「運命」交響曲は、(注6)フルトヴェングラーが演奏しても、(注7)ブーレーズが演奏しても、ベートーヴェンという作曲家の「運命」交響曲という作品なのである。

今ここで述べてきたような、音楽の筆記的特性とでも呼び得る性質は、今世紀の前衛音楽によって、単に受け継がれただけではなく、一層推し進められていった。作曲技法における筆記性が強まるだけでなく、同時に、演奏者に「解釈」の自由がほとんど残されていないような「テクスト」が書かれる傾向が促進され、音楽における「テクスト」の優位が絶対視されるようになっていったのである。このような音楽の筆記性は、一九五〇年代の前衛音楽でほぼ飽和状態にまで達した――少なくとも、多くの音楽家たちはそう実感していた。そして、一九六〇年代後期には、そうした筆記性の飽和への反動として、非筆記的な即興演奏へと向かう動きが、突然、急進的な前衛音楽家たちの間に広がり始める。そうした即興演奏とは、

正に、演奏する奏者同士の間で行われる音響をバイ(ウ)カイとした口述的コミュニケーションを主眼とした音楽である。演奏の現場で直に、演奏に参加している全員によって作られるその音楽には、書き記された「テクスト」といったものは存在せず、したがって、「テクスト」の作者としての「作曲者」というものもない。強いて言えば、そこでの演奏者全員がそのまま同時にその音楽の作曲者であって、その音楽は、つまり、「個人」の名をもっていないのである――C音楽は、「無名性」を獲得するのだ。

これは、西洋近代の芸術音楽に保たれ続けてきた筆記的伝統の否定であり、それはまた同時に、長い間筆記の優位によって抑え込まれてきた口述的な音楽の復権を意味していた。恐らく、一九六〇年代末から七〇年代にかけての時期は、筆記性の衰退と口述性の復権が最も(エ)ケンチョに意識された時代だった、と言えるだろう。前衛音楽の内部で、即興演奏による音楽への関心が急速に高まったというだけでなく、前衛音楽家をも含めた多くの一般の人々が、非西欧の民族的伝統音楽に真摯(しんし)な興味を示し始める、という現象も見られるようになった。非西欧の諸民族の伝統音楽は、口頭伝承に大きく依存してきた音楽であって、近代西欧音楽のような筆記性をそなえていない。ある程度までその理由によって、かつてそれらの音楽は、西洋音楽の伝統の中に居る人々から「原始的」なものでしかない、と見なされていた。しかし、その当の西洋音楽の筆記性優位が揺らぎ始めたとき、人々は、非筆記的本性の音楽にも正当な価値を認め、それらを、西洋音楽とは異なった種類の優れた音楽伝統として、高く評価するようになったのである。今や、アジア・アフリカ等の非西欧の諸音楽は、原始的なものであるどころか、西洋の音楽家たちが筆記的伝統をぬけ出すに当たっての、格好の導き手として意識され始めたのだった。

即興演奏という手段によって、そしてまた、非西欧の民族的伝統音楽をある程度まで参考にすることによって、前衛音楽家たちは、筆記性の否定(否定とまではいかないにしても、少なくともその「希薄化」)を試みたわけだが、興味深いことに、その試みは、ある意味で、それまでの芸術音楽と他のポピュラー的音楽(ジャズ、ロック、いわゆるポピュラー・ミュージック等)との間にあった溝を埋めるような結果を産んだ。つまり、ポピュラー系の音楽では、もともと、筆記的「テクスト」の重要性は極めて希薄なものでしかなかったからである――例えば、ポピュラー系の音楽では、たとえ「作曲者」がいたとしても、曲は、普通、その作曲者の名によってではなく、歌手の名によって記憶される。それは、その音楽が、作

60 65 70 75 80

曲者が書いた楽譜としての「テクスト」にはあまり依存していないことの、ひとつの証しである。そして実際、前衛音楽家たちのその種の試みから生まれてきた音楽のいくつかは、それまでの芸術音楽の聴衆層の範囲を越えて、ジャズやロックの愛好家たちにも積極的に迎えられている。

こうした、筆記性の衰退という十数年前以来の事態を目の当たりにして、今日、作曲家たちは、再び、「作曲とは何か」という問題を問い直しつつある。多くの作曲家たちは、もう一度、「書くこと」の可能性を探り始めた。筆記性を否定した口述的音楽の洗礼を受けた後で、作曲家たちは、西洋近代の音楽伝統の根幹であり続けてきた「筆記性」を、距離をとって見ることができるような位置に至った、と言えるだろう。それは、伝統を単に受けいれて引き継ぐことでもなく、単に拒絶することでもない。「書くこと」の新たな形での復権が成されるとき、そこに、単なる否定ではない、「近代」の**チョウ**（オ）**コク**が達成できるのではなかろうか。Dそういう期待をもって活動している作曲家は、「ジャズは好きですか？」という問いに、多分、漠然と「いいえ」とだけ答えてしまうことになるのだ。

（近藤譲『書くこと』の衰退」〈一九八五〉による）

（注）
1 記譜法――音楽を視覚的に書き表す方法。
2 単旋律の聖歌――教会などで歌われたメロディーだけの（ハーモニーのない）宗教歌。
3 声部――ソプラノ・アルト・テノール・バスあるいは高音部・低音部などのパート。
4 対位法――独立した複数の旋律を組み合わせた作曲技法。
5 「テクスト」――ここでは「書かれたもの」の意味。
6 フルトヴェングラー――ドイツの指揮者（一八八六～一九五四）。
7 ブーレーズ――フランスの作曲家、指揮者（一九二五～）。

問1 傍線部(ア)〜(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) タン

① タンテキな表現
② タンネンに調べる
③ 心身をタンレンする
④ 真理をタンキュウする
⑤ セイタン百年を祝う

(イ) シッピツ

① 名誉をウシナう
② シメった空気
③ 政務を下る
④ ウルシ塗りの盆
⑤ 氷をムロから出す

(ウ) バイカイ

① 原野をカイコンする
② 責任をカイヒする
③ 病気がカイユする
④ ユウカイ事件が起きる
⑤ 親身にカイゴする

(エ) ケンチョ

① ケンアクな雰囲気だ
② ケンジツに生きる
③ ケンシン的に仕える
④ ケンビ鏡で見る
⑤ 費用をケンヤクする

(オ) チョウコク

① 悩みはシンコクだ
② 筆跡がコクジしている
③ コクメイな日記をつける
④ 裁判所にコクソする
⑤ コクドを開発する

問2 傍線部A「非常に複雑な音楽が可能になってくる」とあるが、音楽を「書き記す」ことで、どうして「非常に複雑な音楽が可能」になるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから選べ。

① 書くということは頭の中で自分が考えたことを目に見えるような形にすることであり、それによって、書く人の内面的感情という複雑で表現しにくいものが表現できるようになるから。

② 書くことで、ひとつひとつの音がしっかりと固定化し、それまでは曖昧な記憶に頼りがちであった音楽を、正確に演奏することができるようになるから。

③ 書かれたものを見ることで作曲家は自分の作ろうとする曲を確認し、音の長さや高さなどの細かい違いまで検討しながら、種々の旋律を組み合わせることができるようになるから。

④ 書くことによって、ひとつのまとまりのある音楽を表現することが可能になり、一見無秩序で流動的な音楽を、より秩序だったものへと近づけていくことができるようになるから。

⑤ 書かれた楽譜によって実際の演奏が行われる場合には、個々の指揮者や演奏者たちが、それぞれに独自の解釈を加え、多様な演奏ができるようになるから。

問3 傍線部B「音楽としての実体」とあるが、「音楽としての実体」についての作者の考え方を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 紙の上に書かれた楽譜としての音楽は、実際に演奏者によって演奏されることで、はじめて自立し完結した「テクスト」として存在するようになる。

② 音楽作品は、様々な演奏者によって色々な解釈をほどこされることで、はじめて作曲家の特定の作品として存在するようになる。

③ 一般になじみにくい近代西洋音楽の作品は、実際に演奏され音響構成体となることで、はじめて幅広い聴衆層に受けいれられる存在となる。

④ 楽譜の存在がそのまま音楽というわけではなく、音楽は演奏され感覚に訴えるものとなることで、はじめて実現された音楽として存在するようになる。

⑤ 作曲家が提示した楽譜を演奏者ができるだけ忠実に演奏することで、はじめて音楽は筆記的特性に富んだ「テクスト」として存在するようになる。

問4 傍線部C「音楽は、『無名性』を獲得するのだ」とあるが、それは具体的にはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 音楽が、ある特定の人間の作品であることから解放され、演奏者たちが演奏の現場で共同して即興的に作り出す作品として存在するということ。

② 口頭伝承期の音楽がそうであったように、音楽は作曲家や演奏者だけのものではなく、ある特定の集団に共有される財産のようなものとなるということ。

③ 演奏者が作曲家の意向に全面的に従うために、「解釈」をする必要がなくなり、熟練した技があれば、ほとんど自動的に演奏ができるようになるということ。

④ 音楽が、筆記的性格の強い近代西洋音楽から、非西欧の民族的伝統音楽に近づくことによって、「原始的」な力に満ちた野生的エネルギーをとりもどすということ。

⑤ 作曲家ではなく歌手の名によって記憶されるポピュラー音楽のように、世代を超えた多くの人々によって支持される大衆性をもつということ。

問5 傍線部D「そういう期待をもって活動している作曲家は、『ジャズは好きですか？』という問いに、多分、漠然と『いいえ』とだけ答えてしまうことになるのだ」とあるが、なぜ「漠然と『いいえ』とだけ答えてしまうことになる」のか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 急進的な前衛音楽家にとって、演奏者の間で行われる音響によるコミュニケーションであるジャズは、西洋近代の音楽伝統を乗り越えるものとして認識されているから。

② 音楽を「書き記す」という伝統を洗練させてきた近代西欧の作曲家にとって、アジア・アフリカ等の非西欧の音楽の流れをくむジャズは、すでに乗り越えられたものであるから。

③ 「書くこと」を距離をとって見ることができるようになった作曲家にとって、ポピュラー音楽であるジャズは、あまりに日常性と結びつきすぎて芸術的な音楽には向かないから。

④ 書くという伝統を単に受け継ぐだけではなく、拒絶するだけでもない作曲家にとって、即興性の強いジャズは、「書くこと」を考える上では参考にならないから。

⑤ 「書くこと」に新たな可能性を見いだそうとする作曲家にとって、ジャズの口述性は乗り越えなければならない課題である一方、その課題は容易に達成できるものではないから。

問6　本文の内容について説明したものとして適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 音楽を楽譜に書き記すというスタイルが定着するにしたがって、演奏される音楽作品はきわめて複雑になるとともに、まとまりをもった客体的な存在としての性格を強めていった。

② 文筆家が書きながら考え、推敲を重ねながら作品を実現するように、急進的な前衛音楽家たちは、音楽の筆記的特性を推進することで、演奏者に解釈の自由がほとんどない「テクスト」を創出した。

③ 楽譜として書き記された「テクスト」はだれが見ても、時間をおいて見ても、同一であるので、基本的に「解釈」の自由がほとんど残されず、そのため実際の演奏はどの楽団が行っても同じようなものになる傾向が促進された。

④ 口述的な音楽の復権は、西洋近代の芸術音楽に保たれてきた筆記的伝統に対して、口頭伝承に大きく依存してきた非西欧の諸民族の音楽家たちが主体的に反発したことがきっかけとなっている。

⑤ 一九六〇年代の前衛音楽は、演奏者に確かな解釈を与える「テクスト」の優位に反発して、口頭伝承依存期の即興演奏へと回帰し、非筆記的な音楽へと衰退していった。

⑥ 前衛音楽家たちによる即興演奏の流行は、非西欧の伝統音楽の再発見と連動して、従来の筆記的伝統に依存した傾向を希薄化し、やがて芸術音楽と大衆音楽とを近づけることとなった。

11 論理的文章 〈論理を捉える〉❷

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

文学的な経験と科学的な経験の性質を区別することは、それぞれの典型的な例については、あまり困難な仕事ではない。

科学は具体的な経験の一面を抽象し、抽象化された経験は、他の同類の経験と関係づけられて分類される。このように抽象化され、分類された経験は、原則として、一定の条件のもとでくり返されるはずのものである。したがって科学は、法則の普遍性について語ることができるのである。たとえば一個の具体的なレモンは、その質量・容積・位置・運動等に（ア）カンゲンされることによって、力学の対象となり、またその効用や生産費や小売価格などにカンゲンされることによって、経済学の対象となる。力学や経済学は、具体的なレモンについてではなく、抽象化された対象について、その対象が従う法則をしらべるのである。

文学は具体的な経験の具体性を強調する。具体的な経験は、分類されることができない、またけっしてそのままくり返されることもない。分類の不可能な、一回かぎりの具体的な経験が、文学の典型的な対象である。（注）梶井基次郎の「レモン」の経験は、その色、その肌触り、その手に感じられる重みのすべてにかかり、それを同じ質量の石によって換えることもできないし、それを同じ値段の他のレモンで換えることもできない。彼が必要としたのは、レモン一般ではなくて、いわんや固体一般でも、商品一般でもなくて、そのレモンである。そしてその日、そのところで、そのレモンによる経験は、たとえ同じレモンによっても、別の日、別のところで、ふたたび経験されることのないものである。すなわちその経験に関して、法則をつくることができないのは、いうまでもない。そのレモンのそのレモンたる所以にもとづく経験——具体的で特殊な一回かぎりの経験は、科学の対象にはならない。A まさに科学が成りたたぬところにおいて、文学が成りたつのである。文学の表現する経験は、科学の扱う対象から、概念上、はっきりと区別することができる。

しかし文学を、科学から区別するのと同じやり方で、日常生活から区別することは困難であろう。日常生活の経験は、文学的な面をふくむと同時に、また科学的な面もふくむ。日常生活における経験は、文学の出発点ともなり得るし、また科学の出発点ともなり得る。八百屋でレモンを買う主婦は、多かれ少なかれレモンを商品としての、また食品としての一面からみて、そのレモンの他の性質を無視するであろう。またそうするからこそ、主婦の経験は蓄

積され、法則化され、上等のレモンを安く買う買物上手にもなり得るのである。

B 梶井基次郎流のレモンの経験は、主婦を買物上手にはしない。もっと一般化していえば、およそ社会生活を営む上に必要な知識を、主婦にあたえない。しかしそういう実用的な知識を必要としない子供は(家計をあずかっているのは主婦で、子供ではない)、母親が台所においたレモンをみて、その（イ）**コウタク**に惹かれ、手にとってみてその冷たい肌触りに、ながく忘れることのない感覚的なよろこびを感じるかもしれない。その感覚はそのとき限りのものである(あるいはその後何年か経ったのち、たとえば一人の女のひざにふれたとき、にわかにその感覚がまざまざとよみがえるといったようなものであろう)。古来詩人の心をもって童心にたとえたのには、理由がある。しかしその理由は、子供の心が純真無垢だからではない(純真（ウ）**ソボク**な農夫が都会人の空想であるように、純真無垢な子供は成人の空想にすぎないだろう)。そうではなくて、子供は社会に対して無責任だからである。責任がないから、その経験を積み重ねて、法則を見いだす必要もない。したがって経験を分類し、分類するために抽象化する必要も少ないだろう。すなわち具体的経験をその具体性においてとらえることができる。もし主婦の買うレモンが経済学者の対象にちかいとすれば、子供のレモンは、梶井基次郎のレモンに似ているのである。

総じて経験の抽象化の程度という点からみれば、日常生活の経験は、一方で文学的経験と連続し、他方で科学的経験に連続している。別のことばでいえば、経験の抽象化の軸によって、一方の極端である文学的経験を、他方の極端である科学的経験から区別することは容易だが、その中間の日常的経験から区別することは困難だということになる。

（加藤周一『文学とは何か』）

(注) 梶井基次郎 —— 一九〇一年〜一九三二年。小説家。大阪府生まれ。代表作に『檸檬』『城のある町にて』などがある。「レモン」は作品『檸檬』の中のレモンのことで、作品には、「私」が京都の寺町の八百屋で一個のレモンを買って、「つまりはこの重さなんだな。」と実感する場面がある。

問一　傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に直せ。

問二　次の⑴・⑵の二つの文をそれぞれ本文中に補うにはどこが適当か。その場所の直後の五字を抜き出して記せ。

⑴ (その他の性質、たとえば色や味や産地や値段を捨象されることによって)

⑵ (その他の性質、たとえば位置や運動量などを捨象されることによって)

問三　傍線部A「まさに科学が成りたたぬところにおいて、文学が成りたつのである」とはどういうことか、五〇字以内で説明せよ。

問四　傍線部B「梶井基次郎流のレモンの経験は、主婦を買物上手にはしない」とあるが、なぜか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

① 梶井基次郎流のレモンの経験は、分類の不可能な、一回かぎりの具体的な経験にすぎず、買物をくり返すことにより、直観的な感覚をみがき、駆け引きを覚えていく主婦にはあまり必要ではないから。

② 具体的で特殊な一回かぎりの梶井基次郎流のレモンの体験は、あまりにも文学的なもので、文学的感動とは無縁の日常生活を送っている主婦の手堅い買物感覚をかえって狂わせることになるから。

③ 梶井基次郎流のレモンの経験は、その色、その肌触り、その重さの実感など、味に関係しないものであったので、食品としての一面からみてレモンを買う主婦にはあまり参考にはならないから。

④ 子供と同じように社会に対して無責任な詩人の心を持っていた梶井基次郎流のレモンの経験は、家計をあずかって責任ある立場の主婦にとっては、実用性があり社会性もある経験とはなりえないから。

⑤ 梶井基次郎流のレモンの経験は、具体的で特殊な一回かぎりの経験であり、実用的な経験のくり返しと、分類された知識の積み重ねが大切な主婦の買物には必ずしも役に立たないから。

（note）

12 文学的文章 〈設問への意識〉❷

次の文章は、加藤幸子の小説「海辺暮らし」の一節である。漁師であった夫に先立たれたお治婆さん(元木治)は、他の土地に住む娘夫婦の同居の誘いを断り、夫が漁業権を手放した際に得た補償金の残金を元手に、干潟に遊びに来る客を相手にした駄菓子屋を一人で営んでいる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。

店に続く四畳半は、風の通り道である。海の匂いが満ちていて、貝殻にもぐりこんだ宿借りの心境が分ってくる。お治婆さんがうたた寝をしているところへ《コーガイさん》が訪ねてきた。お治婆さんは慌てて起きあがり、一枚だけの客用座布団の上へ招じ入れた。市役所からは月一度の割りで、だれかが訪問にくる。水質調査の名目だが、お治婆さんの体と気持が弱って、家を手放すつもりになってはいまいか偵察するためである。その意図を承知の上で、お治婆さんは《コーガイさん》の訪問を楽しみにしている。

今回は初対面の人だった。先月までは停年間近の(注1)白皙の紳士で、結構話が弾んだものだった。新しい訪問者は、アニメのロボットみたいに顔も肩も胴体も四角ばっている。

「公害課の梶と申します」

傍らに採集した海水の広口瓶をていねいに立ててから、名刺をお治婆さんに差し出した。訪問先が、まれにみる(注2)陋屋であることにびくともした様子はない。お治婆さんはちょっと感心した。(注3)ルルは初めて会う人物を特に念入りに調べる癖があるので、梶氏の前に坐って動こうとしない。そのためまるで猫に向かって、お辞儀をしているように見える。

「元木さんのことは、前任の平田からよくうかがっております」

「前の方は、どうされましたか？」

「県庁のほうへ栄転してゆかれました」

「まあ、それはよかったですこと」

お治婆さんは、梶氏を(ア)つくづくと眺めた。壮健そうな働き盛りである。A教育のしがいもあるというものだ。

「そうそう」お治婆さんは急に思い出した。

「前の方は、よく浅蜊の佃煮を召しあがっていかれました」

(注4)蠅帳を開けて佃煮の小皿を取り出すと、冷えた(注5)麦湯とともに梶氏にすすめた。

「こういうものが、お口に合うかどうか……」

「あ、これは、どうも」相手は恐縮した。「ぼくの大好物ですよ。母の料理は和風でしたのでね。頂きます」

行儀よく梶氏は三個の浅蜊を口へ運ぶと、首をかしげて言った。

「とてもいいお味ですな。最近、佃煮の製造法が画一的になってしまいましたが、これは一味ちがう。(注6)酒悦ですか、それとも目新？」

「あら、いやだ」お治婆さんは、頬を染めた。

「あたしが作ったんですよ。この前で掘った浅蜊で」

《市役所》はすとんと箸を戻し、その拍子に畳に転げた一個にルルが飛びついた。

「ここの貝なんですか、ここの干潟の……」

声がかなり上ずっている。

「そうですとも」お治婆さんは力をこめて言った。「ここの浅蜊はよく太って汁気が多いので、おだしがよく出ますよ。たまには(注7)稚児蟹も集めて煮ますけれど、あれはいがいがして口当りが悪いんですの。でもカルシーウムがいっぱいありますからね、蟹の甲羅には」

風が急いで通り抜け、お治婆さんの短い白髪が総毛立った。梶氏は坐り直すと、緊張の面持で言った。

「ごぞんじないんですか。この干潟の水の測定値は(注8)ＢＯＤ14PPMです」

「はいはい、前の方もそのように言われていましたよ」

「とても汚れているという証拠です」

「でもこういうお水のほうが、浅蜊や牡蠣はよく肥えますわ」

「そればかりじゃありませんよ」

梶氏は(イ)躍起になって言った。

「川向うの埋立地に工場がびっしり建っているでしょうが」

「ええ、ええ。毎日きれいな煙を吐いて……まるで七色鉛筆のよう」

「呑気なことを言わないでください。あれはみな悪い煙や廃水を出すので、住宅地から追い出されてきた工場です」

「……」

初めて老婆が沈黙したので、梶氏は調子に乗ってたたみかけた。

「廃水には、いろいろの化学物質が混じっているのです。だからそれを吸いこんでいる貝なども食べないほうがいいのです」

「おや、まあ」

お治婆さんは(ウ)頓狂な声で叫んだ。

「この貝にもドクが入っているのですか」震える指で、彼女は佃煮の小皿を差した。「どうしましょう。あたしの責任だわ」

「え?」

「だって日曜祭日には、何百人っていう町の人たちが貝掘りに来るんですもの。今日だってほら、子どもたちがあんなに夢中になって……。さっそく立札を立てなくっちゃ。『工場からドクが出ています。貝を採らないでください』って。ここはあたしの干潟ですもの……、もう間にあわないかも知れないけれど、でも知った以上は……」

B新任の《市役所》の顔色が変わった。

「そんなこと、まったく必要ありませんよ、おばあちゃん。こうやって毎月厳重に検査を実施しているのは、そのためなんですから。基準値を超えることはめったにないのです。ただ、気分の問題で……」

「おや、そうでしたか」お治婆さんはにっこりした。「気分なら、今のところ上々ですわ」

「そうでしょうとも」

「さあさあ、ドクでないことが分ったのですから、もう少しおつまみくださいませ。佃煮の好きな方に巡り会って、ほんとうに嬉しいですわ」

梶氏は仕方なく小皿に箸を近づけて、数個の浅蜊を麦湯で流しこんだ。この苦役が終ると、彼はある決心の色を浮かべて、お治婆さんに向き直ったのである。

「さて、元木治さん」

「はい」お治婆さんは小首をかしげて、素直な生徒みたいに返事をした。

「来年度の市の計画では、この干潟を埋め立ててゴミ処理場を建設することになっています」

お治婆さんの首の傾斜は、ますます深くなった。

「だから元木さんには、本年中にぜひここを引き払っていただきたいのですよ」

お治婆さんは麦湯を啜って、かすかに笑みを浮かべた。

「もちろん最大の補償をさせていただきます。引っ越しの費用も労働力も、私どもで提供いたします」

少し疑いを生じながら、梶氏は続けた。お治婆さんは相手の口もとをじっと見つめていながら、何の反応も表明しなかった。

「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ・ネ」

梶氏は周囲を見まわした。彼はこの金属的な音声が、目の前の老婆から発せられたことを信じることができなかったのである。

「ゼンゼン聞コエナクナリマシタ」

「は？」

「トキドキ耳ガ、遠イトコロニ行ッテシマウノデス。Cアナタノ楽シイオ話ヲモット聞キタイノデスガ、残念デス。耳ハタ方ニハ戻リマス。良カッタラソレマデココデオ待チクダサイマセ」

市の意向を伝えようとする虚(むな)しい努力の末に、梶氏は落胆しきって立ちあがった。お治婆さんはその前に立ちふさがった。そして一本の棒キャンデーを差し出したのである。

「今日ハトテモ暑イノデ、町ヘノ道々、コレデ口ノ中ヲ冷ヤシテオ帰リクダサイマセ」

《市役所》が肩を落として帰っていく様を、お治婆さんとルルは並んで見送った。梶氏は、もらったキャンデーを舐(な)めるために、ときどき立ち止まった。そうしなければ、たぶん溶けたキャンデーは掌(てのひら)からズボンに滴り落ちて、染みをつくる原因になったであろう。

(注)

1 白皙――色白なこと。

2 陋屋――狭くてみすぼらしい家。

3 ルル――お治婆さんが飼っている猫の名。

4 蠅帳――蠅(はえ)などが入らないように金網などを張ってある、食物を入れるための戸棚。

5 麦湯――麦茶のこと。

6 酒悦・貝新――いずれも佃煮の老舗(しにせ)の名。

7 稚児蟹――スナガニ科の小型の蟹。体長一センチ程度で、河口の干潟などに群れをなして生息している。

8 BOD――生物化学的酸素要求量。有機物による水質汚染の度合いを表す指標に用いられる。

問1 傍線部(ア)〜(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) つくづくと

① 興味を持ってぶしつけに
② ゆっくりと物静かに
③ 見くだすようにじろじろと
④ 注意深くじっくりと
⑤ なんとなくいぶかしげに

(イ) 躍起になって

① 夢中になって
② さとすように
③ 威圧するように
④ あきれたように
⑤ むきになって

(ウ) 頓狂な声

① びっくりして気を失いそうな声
② あわてて調子はずれになっている声
③ ことさらに深刻さを装った声
④ とっさに怒りをごまかそうとした声
⑤ 失望してうちひしがれたような声

問2　傍線部A「教育のしがいもあるというものだ」とあるが、このときのお治婆さんの心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 初対面の自分にも丁寧なあいさつをする梶氏を実直だが真面目過ぎる人だと思い、現実にはそれほど簡単に物事が運ばないことを思い知らせてやろうと手ぐすねを引いている。

② 初めて見るであろう陋屋にも全く物怖じする様子を見せない梶氏を骨のある役人だと思い、立ち退きを求めるためには役人としてどう振る舞えばよいかをわからせてやろうと意気込んでいる。

③ 広口瓶をていねいに立てる梶氏の几帳面なしぐさから梶氏を信頼できる人だと思い、この人になら人々の遊び場となっている干潟の価値を認めさせることができるのではないかと期待している。

④ 初めての訪問にもかかわらず臆する気配を見せない様子から梶氏を頑強そうな人だと思い、役所の言いなりにはならないこちらの対応のしかたを知らしめる相手として不足はないと楽しみにしている。

⑤ 物言いや態度から役人としての能力の高さが認められる梶氏を実行力も伴った人だと思い、家を手放すつもりはないという自分の考えを役所に理解させることができるはずだと奮い立っている。

問3 傍線部B「新任の《市役所》の顔色が変わった」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 勢いこんで口にした、工場から出される煙や水に注意を促した言葉が、工場からドクが出ていると書かれた立札を実際に立てる行動にお治婆さんを誘いかねない事態になったことに驚き、うろたえたから。

② 工場から出る煙や水の汚染は厳重な検査をしているので実際は問題にならないという主張を無視して、工場のドクについての立札を立てるというお治婆さんの行動があまりにも独善的なので、びっくりしてしまったから。

③ 工場から出ているドクに対して無頓着（むとんじゃく）なお治婆さんにドクの危険性を説明していたが、思いがけなくお治婆さんが取り乱してしまったので責任を感じ、工場の害を強調し過ぎたことを取りつくろおうと焦ったから。

④ 市の意向に逆らい続けるお治婆さんを警戒して訪問すると、気さくに浅蜊の佃煮を勧めてくれる親切な人柄に心を許し始めたのだが、干潟を自分の土地であるかのように言うので、そのずうずうしさに憤りを覚えたから。

⑤ 工場の危険性を説明して干潟から立ち退いてくれるよう説得に来ただけなのに、お治婆さんに町の人たちが採る貝にドクが入っていると思い込ませてしまい、良心の呵責（かしゃく）を感じさせてしまったことを気の毒に感じたから。

問4　傍線部C「アナタノ楽シイオ話ヲモット聞キタイノデスガ、残念デス」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　文字通りには、体の変調によって梶氏との会話を中断したことをお治婆さんが悔やむ言葉であるが、梶氏を責める気持ちが表されており、市役所の担当者と対等に渡り合おうとするお治婆さんの気丈さがうかがわれる。

②　文字通りには、体の変調から会話が続けられないことをお治婆さんが心から梶氏に訴える言葉であるが、市役所の担当者とかかわり合うことを諦（あきら）める気持ちが表れており、梶氏を教育する気力が失せていることがうかがわれる。

③　文字通りには、体の変調が起こったお治婆さんが会話の中断を申し出る形式的な言葉であるが、話を続けられなくなった切ない心情が隠されており、会話を介して孤独な思いを解消しようと願っていることがうかがわれる。

④　文字通りには、お治婆さんが体の変調を感じ梶氏との会話を続けられなくなったことを惜しむ言葉であるが、市役所の担当者に対する皮肉が込められており、梶氏をやりすごそうとするお治婆さんの賢さがうかがわれる。

⑤　文字通りには、お治婆さんが体の変調により梶氏の楽しい話を聞けなくなったことを謝る言葉であるが、空空しい言い方であり、そもそも梶氏とは会話を交わしたくなかったお治婆さんの本音がうかがわれる。

問5 この文章中の叙述に対する説明として適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① ８行目の「新しい訪問者は、アニメのロボットみたいに顔も肩も胴体も四角ばっている」は、梶氏の体型の描写であるとともに、梶氏が立派な体格をしたヒーロー的な存在であることも明らかにしている。

② ３１行目の「《市役所》」は、梶氏を勤め先の名称によって指し示す擬人法であり、梶氏が「市役所」を代表して公害対策に日々奔走する役人であることを強調している。

③ ６３行目の「おばあちゃん」という呼び方が７２行目の「元木治さん」に変わったことは、市側の意向を伝達するために、梶氏が会話におけるふたりの関係性を変化させ、自らの公的な立場を明確にしたことを示している。

④ ９４行目の「《市役所》が肩を落として帰っていく様を、お治婆さんとルルは並んで見送った」という描写は、梶氏が責めを負わせられる側であり、お治婆さんが責める側であるという関係を具体的に示している。

（note）

13 文学的文章 〈部分と全体〉 ❷

次の文章は、夏目漱石の小説『道草』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

島田は吝嗇な男であった。妻のお常は島田よりもなお吝嗇であった。

「爪に火を点すってえのは、あの事だね」

彼が実家に帰ってから後、こんな評が時々彼の耳に入った。しかし当時の彼は、お常が長火鉢のそばへすわって、下女に味噌汁をよそってやるのを何の気もなくながめていた。

「それじゃ何ぼ何でも下女がかわいそうだ」

A彼の実家のものは苦笑した。

お常はまた飯櫃やお菜のはいっている戸棚に、いつでも錠をおろした。たまに実家の父が訪ねて来ると、きっと蕎麦を取り寄せて食わせた。その時は彼女も健三も同じものを食った。その代わり飯時が来ても決していつものように膳を出さなかった。それを当然のように思っていた健三は、実家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚いた。

しかし健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議なくらい寛大であった。外へ出る時は(注)黄八丈の羽織を着せたり、縮緬の着物を買うために、わざわざ(注)越後屋まで引っぱって行ったりした。その越後屋の店へ腰を掛けて、柄を択り分けている間に、夕暮れの時間がせまったので、おおぜいの小僧が広い間口の雨戸を、両側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなって、大きな声を揚げて泣き出した事もあった。

彼の望むおもちゃは無論彼の自由になった。その中には(注)写し絵の道具も交じっていた。彼はよく紙を継ぎ合わせた幕の上に、(注)三番叟の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜んだ。彼は新しい独楽を買ってもらって、時代を着けるために、それを河岸ぎわの泥溝の中に浸けた。ところがその泥溝は薪積み場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は独楽の失くなるのが心配さに、日に何べんとなく(注)扱い所の土間を抜けて行って、何べんとなくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹の穴を棒で突ッついた。それから逃げそこなったものの甲を抑えて、いくつも生け捕りにして袂へ入れた。……

要するに彼はこの吝嗇な島田夫婦に、よそからもらい受けた一人っ子として、(ア)異数の

取り扱いを受けていたのである。

しかし B夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜んでいた。

彼らが長火鉢の前で差し向かいにすわり合う夜寒の宵などには、健三によくこんな質問を掛けた。

「お前のおとっさんはだれだい」

健三は島田の方を向いで彼を指さした。

「じゃお前のおっかさんは」

健三はまたお常の顔を見て彼女を指さした。

これで自分たちの要求を一応満足させると、今度は同じような事をほかの形できいた。

「じゃお前の本当のおとっさんとおっかさんは」

健三はいやいやながら同じ答えを繰り返すよりほかに仕方がなかった。しかしそれがなぜだか彼らを喜ばした。彼らは顔を見合わせて笑った。

ある時はこんな光景がほとんど毎日のように三人の間に起こった。ある時は単にこれだけの問答では済まなかった。ことにお常はしつこかった。

「お前はどこで生まれたの」

こう聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門——高藪でおおわれた小さな赤い門の家をあげて答えなければならなかった。お常はいつこの質問を掛けても、健三が差しつかえなく同じ返事のできるように、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であった。けれども彼女はそんな事には一向頓着しなかった。

「健坊、お前本当はだれの子なの、隠さずにそうおいい」

彼は苦しめられるような心持ちがした。時には苦しいより腹が立った。向こうの聞きたがる返事を与えずに、わざと黙っていたくなった。

「お前だれが一番好きだい。おとっさん？　おっかさん？」

健三は彼女の意を迎えるために、向こうの望むような返事をするのがいやでたまらなかった。彼は無言のまま棒のように立っていた。それをただ(イ)年歯の行かないためとのみ解釈したお常の観察は、むしろ簡単に過ぎた。彼は心のうちで彼女のこうした態度を忌み悪んだのである。

夫婦は全力を尽くして健三を彼らの専有物にしようとつとめた。また事実上健三は彼らの専有物に相違なかった。従って彼らから大事にされるのは、つまり彼らのために彼の自由を

奪われるのと同じ結果に陥った。C彼にはすでに身体(からだ)の束縛があった。しかしそれよりもなお恐ろしい心の束縛が、何もわからない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影を投げた。

夫婦は何かに付けて彼らの恩恵を健三に意識させようとした。それである時は「おとっさんが」という声を大きくした。ある時はまた「おっかさんが」という言葉に力を入れた。おとっさんとおっかさんを離れたただの菓子を食ったり、ただの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられていた。

自分たちの親切を、無理にも子供の胸に外部からたたき込もうとする彼らの努力は、かえって反対の結果をその子供の上に引き起こした。健三はうるさがった。

「なんでそんなに世話を焼くのだろう」

「おとっさんが」とか「おっかさんが」とかが出るたびに、健三はおのれひとりの自由をほしがった。自分の買ってもらうおもちゃを喜んだり、(注)錦絵(にしきえ)を飽かずながめたりする彼は、かえってそれらを買ってくれる人をうれしがらなくなった。少なくともD両(ふた)つのものをきれいに切り離して、純粋な楽しみにふけりたかった。

夫婦は健三をかわいがっていた。けれどもその愛情のうちには変な報酬が予期されていた。金の力で美しい女を囲っている人が、その女の好きなものを、いうがままに買ってくれるのと同じように、彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動する事ができずに、ただ健三の(ウ)歓心を得るために親切を見せなければならなかった。そうしてE彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。しかも自ら知らなかった。

(注)
1 黄八丈 ―― 黄色の地に鳶(とび)・茶などの縞(しま)を織り出した絹織物。八丈島が本産地。
2 越後屋 ―― 東京日本橋にあった大呉服店。
3 写し絵 ―― 光線によって、ガラスに描いた絵などを幕に映し出すもの。幻灯。
4 三番叟 ―― 歌舞伎の舞の役。ここでは、それを模した人形のおもちゃ。
5 扱い所 ―― 今の区役所または町役場などに当たるもの。
6 錦絵 ―― 江戸時代に創始された華麗な多色刷浮世絵版画。

問1 傍線部A「彼の実家のものは苦笑した。」とあるが、なぜ苦笑したのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① お常が、実家のものの前で、これ見よがしに下女に味噌汁をよそっていたから。
② 主人の妻から味噌汁をよそってもらっている下女が、いかにも恐縮していたから。
③ 主人から冷遇されている下女に対して、健三がほとんど無関心な態度を示したから。
④ お常が、主人の妻という身分でありながら、健三の前で下女に味噌汁をよそったから。
⑤ お常が、下女に手ずから味噌汁をよそってやったのは、その量を惜しんでのことだから。

問2 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) 異数の取り扱い
① 一人っ子の扱いとしては異常なまでの冷遇
② 神経質な養子に対する養父母の格別な配慮
③ 日ごろけちな養父母としては例を見ない厚遇
④ 小心な養子を傷つけまいとする細心の注意
⑤ 厳格な養父母にしては例外的な甘やかし

(イ) 年歯の行かない
① まだ年齢相応に自立心が育っていない
② 親の心を見通して答えるには幼すぎる
③ まだ幼くて親の機嫌を取り結べない
④ 親に歯向かうまでには成長していない
⑤ 状況に応じた判断をするにはまだ幼い

(ウ) 歓心を得る
① 健三が喜んでくれるように機嫌をとる
② 健三が関心を示してくれるように配慮する
③ 健三が喜んで賛成してくれるように気を使う
④ 健三がなるほどと感心してくれるように工夫する
⑤ 健三が取り入ってくれるように仕向ける

問3 傍線部B「夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜んでいた。」とあるが、「一種の不安」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 健三は、夫婦にとってよりも実家にとってこそ大切な一人っ子であったので、いつかは夫婦のもとから実家に帰ってしまうのではないかと気がかりだったのである。

② 健三は、夫婦から大切に育てられたが、感受性が鋭く正義感も強かったので、彼らはその愛情の裏にある意図を見破られてしまうのではないかといつも心配だったのである。

③ 健三は、子供ながらに自分が養子でしかないことを十分に知っており、そのことが夫婦の将来の生活への見通しに対して無言の圧迫を与えてしまっていたのである。

④ 健三は、神経質で頭のよい少年だったので、夫婦がいくら高価なおもちゃなどを与えても、いつもその魂胆が見透かされているのではないかと、気がかりだったのである。

⑤ 健三は、夫婦にとってよそからもらい受けた大切な一人っ子であったが、自分たちを父母として本当に認めているかどうか確信が得られず、いつも心配だったのである。

問4 傍線部C「彼にはすでに身体の束縛があった。……ぼんやりした不満足の影を投げた。」とあるが、ここで「身体の束縛」「心の束縛」とはどのようなことをさすか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 「身体の束縛」とは、生まれながら身体に制約を受けた存在として、健三がその限界を越えられなかったことであり、「心の束縛」とは、健三が自分の実の父母や生家について自由に話すことが許されていなかったこと。

② 「身体の束縛」とは、健三が自分の知らない間に島田夫婦の養子にされてしまっていたことであり、「心の束縛」とは、健三の将来が養父母の恩恵を意識させられるだけの、きわめてせまいものになってしまっていたこと。

③ 「身体の束縛」とは、健三が島田夫婦のもとを離れて、自由に遊びまわることが禁じられていたことであり、「心の束縛」とは、健三が自分の自由な意志で菓子やおもちゃを買い求めることを、養父母が許さなかったこと。

④ 「身体の束縛」とは、島田夫婦がよそからもらい受けた養子として、健三が二人の専有物になっていたことであり、「心の束縛」とは、健三のすべての事柄が養父母との関連のもとにあり、心の自由な分野を持てなかったこと。

⑤ 「身体の束縛」とは、島田夫婦がしばしば健三に質問をしたために、それが苦痛にまでなったことであり、「心の束縛」とは、健三が養父母以外の人々と心の交流を持つことが、養父母により妨げられてしまっていたこと。

問5 傍線部D「両つのもの」とは何と何をさすか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① おのれひとりの自由と純粋な楽しみ
② おもちゃや錦絵と島田夫婦
③ おもちゃや錦絵と実家の人々
④ おのれひとりの自由と島田夫婦
⑤ 純粋な楽しみとおもちゃや錦絵

問6 傍線部E「彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 島田夫婦が健三を愛するのは、義理の親とはいえ当然のことであったが、甘やかしすぎたために、結果として健三のわがままを増長させてしまったのである。
② 健三には小さな赤い門のある家の懐かしい思い出があって、島田夫婦の心からの愛情もただ煩わしいものとして、かえって彼らに無言の反抗をしたのである。
③ 島田夫婦は健三が本当の子ではなかったので、愛情を表現するのにもいつも押しつけがましいものがあって、結果として彼の離反を招くことになったのである。
④ 健三は島田夫婦にとって、義理の子とはいえ、たった一人の子であったために、まるで自分たちの専有物のように取り扱って、逆に自縄自縛に陥ったのである。
⑤ 島田夫婦には実子がなく、子供を育てた経験が十分ではなかったので、健三の扱いに慎重になりすぎて、たえず不安にかられざるをえなかったのである。

共通テスト現代文

OUR TEXTBOOK 2024
夏期

Features
夏のポイントチェック

❶ 論理的な文章

094　土屋賢二『猫とロボットとモーツァルト』
098　鷲田清一「『大人』になれない社会？」

❷ 文学的な文章・小説

102　黒井千次「庭の男」
114　井上荒野「キュウリいろいろ」

❸ 第３問対策

当日配布

14 論理的文章 〈求められる思考回路〉 ❶

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

変形によって芸術のすべてが説明できる、とは言えなくても、芸術的創造が先行するものの変形を重要な要素として含むことは疑いがない。このことから、いくつかのことが帰結する。

芸術の創造が先行するものから出発してそれを変形するのであれば、芸術のスタイルが変化するのは必然的である。この点で芸術は科学と異なっている。

科学の場合でも変化というものはあるし、その変化は、客観的真理への接近といったものではなく、(注)クーンのいうパラダイム・チェンジといった性格をもつものかもしれない。しかし、科学の場合は変化する必然性はないように思われる。もし科学がその目標に到達して、すべてをきれいに説明できるような日がくれば、そこからさらに変化していかなければならないという理由はない。科学の場合、変化は、まだ目標に達していないことのしるしである。しかし芸術の場合、変化は未完成のしるしではないし、いつの日にか変化しないような状態に到達するわけでもない。

もしバッハが偉大で（たしかに偉大である）、完璧（かんぺき）な曲を作った（実際、完璧と思わずにはいられない。訂正の余地がないように思えるのだから）のだとすれば、人類はそれ以降の作曲家を必要とせず、バッハも完璧な曲を作った後は作曲をやめたとしてもよさそうなものである。しかし実際には、どの芸術家も作品を作れるかぎり作り続けるのであり、芸術家はつぎからつぎに登場するのである。これは芸術全般にみられる基本的事実である。A どんなに「完璧な作品」を作っても、それで終わりということにはならないのである。

芸術のたどる変化は、服装などの流行の変化に似ているところがある。服装の流行の（ア）ヘンセンも、終焉（しゅうえん）をむかえることはないだろう。しかし服装の場合は、同じ個人が年月を経たあげくに以前の好みに帰るということがありうるが、芸術の場合は不可逆的であるように思われる。服装の流行は循環しうるが、芸術の場合は過去とまったく同じスタイルが復活することはないように思われるのである。

伝統や歴史の中で先行のものを基盤としてはじめて芸術が成立するのだとすれば、「すぐれた芸術作品は時代を越えて万人の胸を打つものだ」という考えは誤解をはらんでいると言えるだろう。

アリストテレスは、詩人の方が歴史家よりもすぐれていると考えた。それは、歴史家が現実的事実にかかわるのに対し、詩人は可能性にかかわるからである。このことでアリストテレスが意味しているのは、歴史家は現実の個別的事物にあてはまることしか語らないが、詩人（イ）ジョジ詩、悲劇、喜劇などの作者）は人間一般など、普遍的に成り立つことを語る、ということである。これは重要な指摘であるとわたしは思う。しかしそれを（ウ）カクチョウして、すぐれた芸術は時代と場所を越えて万人の胸を打つ、とまで言うのは飛躍である。作品に感動するためには、伝統のなかに身をおいて、先行するものを十分理解していなくてはならない。先行のものから離れては制作も鑑賞もできないのである。

B「芸術は人間の純粋な感性に訴える」という考え方も誤解を招くものである。芸術が知性だけで十分だ、と言えないことは明らかであるが、かといって感性さえあればよい、というものでもない。制作にも鑑賞にも、何が先行するもので、どのように変形されているかということに対する理解の果たす役割は大きい。この理解は、感動することとは違うし、制作することとも違うが、感動にも制作にも不可欠のものである。理解ということでわたしが意味しているのは、制作の背景とか動機（芸術家の生い立ちとか社会情勢など）についての知識ではなく、基本的には、変形の理解をはじめ、専門家の条件の多くを含む複合的なもののことである。

（土屋賢二『猫とロボットとモーツァルト』による）

（注）　クーンのいうパラダイム・チェンジ――アメリカの科学哲学者トーマス・クーン（一九二三～一九九六）が提示した概念で、科学者たちが共通して用いている思考パターン自体が転換すること。

問1 傍線部(ア)〜(ウ)のカタカナを漢字に直せ。

問2 傍線部A「どんなに『完璧な作品』を作っても、それで終わりということにはならない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① 客観的にその発達を測ることができる科学に対して、芸術の分野ではそうした尺度がないため、芸術家は常にその尺度を作ろうとして、絶えず創作を試みるから。

② いかにすぐれた芸術作品を作り上げようとも、その作品は多くの人々に評価され、流行するため、次第にその芸術作品に慣れてしまい、それとは違う新たな作品が求められるようになるから。

③ 科学においては、変化は最終的な目標に達していないことを示すものだが、芸術においては、変化は新たな作品を生み出す絶え間ない運動であり、先行作品の変形が必然的なものだから。

④ 科学は、より高度なものへ、優れたものへ、という形で変化していくが、芸術作品の創造は、そうした絶えず上昇していく変化ではなく、循環的な変化だから。

⑤ 芸術作品は、先行して作られた作品の影響下にあり、先行する作品を十分理解し、それを模倣、変形して創作しようとするが、芸術においては完全な理解が不可能だから。

問3 傍線部B『芸術は人間の純粋な感性に訴える』という考え方も誤解を招くものである」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

① 芸術を味わうことはそれ以前の作品との違いを味わうことでもあり、その意味で、様々な作品の形についての知識や、その変形を識別する能力が必要とされるため。

② 芸術は、人間の純粋な感性に訴えるというよりも、人間の醜さや弱点をも含めた、純粋とはいえないような暗い感性にも訴えることができるため。

③ 芸術は人間にとっての普遍的な真実を追求するが、人間は時代によって変化しており、時代を超越した純粋な感性などは実際にありえないため。

④ 芸術はそれまでの芸術作品を十分理解、変形することから生み出されており、先行する芸術作品をだれが、いつ、どのように作り上げたかという専門的な知識が必要とされるため。

⑤ 芸術に感動するときには、だれしも純粋に芸術作品をとらえているのではなく、そこには鑑賞者の個人的な体験や好みなどが反映しているため。

(note)

15 論理的文章 〈求められる思考回路〉 ❷

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

〈成熟〉とはあきらかに〈未熟〉の対になる観念である。生まれ、育ち、大人になり、老いて、死を迎える……。そういう過程としてひとの生が思い浮かべられている。そのなかで大人になることと未だ大人になっていないこととが、〈成熟〉と〈未熟〉として生の過程を二分している。

〈成熟〉とはまずはひとが生きものとして自活できるということであろう。食べ、飲み、衣をまとい、居場所をもち、仲間と交際することが独力でできるということ、つまりはじぶんでじぶんの生活をマネージできるということであろう。もっともひとは、他の生きもの以上に、生活を他のひとと協同していとなむという意味で社会的なものであって、だから〈成熟〉とはその生活の相互依存ということを排除するものではない。産み落とされたとたんに見捨てられ、野ざらしになって死にっきりということがわたしたちの社会ではよほどのことがないかぎりありえない以上、生まれたときもわたしたちは他のひとたちに迎えられたのであり、死ぬときも他のひとたちに見送られる。だれもが、生まれるとすぐだれかに産着を着せられ、食べさせてもらうのであり、死ぬときもだれかに死装束にくるまれ、棺桶に入れてもらうのである。

そうするとひとが生きものとして自活できることといっても、単純に独力で生きるということではないということだ。食べ物ひとつ、まとう衣ひとつ手に入れるのも、他のひとたちの力を借りないとできないのがわたしたちの生活であるかぎり、自活できるというのは他のひとたちに依存しないで、というのとはちがうのである。むしろそういう相互の依存生活を安定したかたちで維持することをも含めて、つまりは、じぶんのことだけでなく共同の生活の維持をも含めて他のひとの生活をも慮りながらじぶん（たち）の生活をマネージできるということが、成熟するということなのである。

そうすると成熟／未熟ということも、たんに生物としての年齢では分けられなくなる。〈成熟〉には社会的な能力の育成ということ、つまりは訓練と心構えが必要になるからである。生物としてなら成長のしるし、たとえば性徴というものがあるが、大人になるということはそういう生物としての成長以上のものを求める。からだが大きくなるというのは、たとえ見かけは大人と変わらなくとも、ひとにおいては未だ〈成熟〉のしるしではないのである。

A〈成熟〉は成長とは異なる。成長は、誕生 - 成長 - 衰退（老化） - 死という、生のリニアな過程のなかにその一フェイズとして位置づけられる。人間のばあいは、ほとんどすべての社会で、この生き物としての成長（身体とその能力の成長）の過程にさらに子どもと大人という区分が重ね描きされている。生物学的な成長の区別だけではなく、社会的な承認／未承認という規範的な区別が、ひととしての生の過程のなかに挿し込まれるということである。その承認はふつう「成人儀礼」というかたちで社会的にとりおこなわれる。その時期は多くの社会で十二歳から十五歳あたりに設定されてきたが、現代のように二十歳に設定されることもある。そのかぎりでそこには文化の恣意性が入りこんでいる。が、成熟／未熟というのはそうした大人／子どもの区別なのでもない。Bそれはさらにその上に重ね書きされる価値的な区別である。だから未熟なままで大人になる者もいるし、幼くしてすでに成熟している者もいる。

「通過儀礼はただ単に大人と子供とを分けるためにあるのではない。少なくとも年齢による大人と子供、老と若を区別するためにあるのではなく、むしろ大人と子供と言う概念を放棄して、経験の深さのちがいをはっきりさせるものなのである」。

このような指摘をするのは、哲学者の中村雄二郎である。成人儀礼という通過儀礼を、中村はここで、大人／子どもの区別をつける儀礼としてではなく、むしろ成熟／未熟の区別をつける儀礼として位置づけている。しかし、混乱続きの現在の「成人式」を見てそれが成熟を承認する儀礼だと考えるひとはおそらくいないだろう。

（鷲田清一『「大人」になれない社会?」による）

問1 傍線部A「〈成熟〉は成長とは異なる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 成長とは単に身体やその能力が成長していくことを言うが、〈成熟〉は、人が自分で自分の生活を独力で営めるようになっていくことを意味する。

② 成長とは身体が大きくなることとはいっても生物的な意味とは異なるが、さらに〈成熟〉は、他の生物とは異なり、社会的成長という面までを含む。

③ 成長とは身体の成長という外見的に判断可能なものだが、〈成熟〉は、見かけと関係なく、自分のことを自分でやろうとする内面的自立のことである。

④ 成長とは単に身体やその能力が成長することを言うが、〈成熟〉は、社会のなかで安定した相互の依存生活を営めるようになることを意味する。

⑤ 成長とは、身体面と、社会的な心構えが持てるようになる心理面での成長の双方をさすが、〈成熟〉は社会的生活ができるようになることを意味する。

問2 傍線部B「それはさらにその上に重ね書きされる価値的な区別である」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 社会が恣意的に決定した大人と子どもの区別は、各社会が決めた価値的なものであるため、未熟なまま大人になったり、その逆の状態が発生したりするということ。

② 成熟／未熟の区別は、社会恣意的な大人／子どもの区別でなく、さらにその上に社会的な相互依存生活ができるかどうかという判断が加わっているということ。

③ 「成人儀礼」としての通過儀礼は、単に年齢によって大人と子どもとを分けるためにあるのではなく、経験深さの違いをはっきりさせるためのものだったということ。

④ 社会が恣意的に決定した大人／子どもという区別の上に、「成人儀礼」というかたちで重ね書きされたものが、成熟／未熟の区別であるということ。

⑤ 成熟／未熟の区別は、社会が恣意的に決めた大人／子どもの区別に加えて、身体的、能力的に価値的な成長があって初めて可能になるものだということ。

（note）

16 文学的文章・小説 〈求められる思考回路〉 ❶

次の文章は、黒井千次「庭の男」（一九九一年発表）の一節である。「私」は会社勤めを終え、自宅で過ごすことが多くなっている。隣家（大野家）の庭に息子のためのプレハブ小屋が建ち、そこに立てかけられた看板に描かれた男が、「私」の自宅のダイニングキチン（キッチン）から見える。その存在が徐々に気になりはじめた「私」は、看板のことを妻に相談するなかで、自分が案山子をどけてくれと頼んでいる雀のようだと感じていた。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

立看板をなんとかするよう裏の家の息子に頼んでみたら、という妻の示唆を、私は大真面目で受け止めていたわけではなかった。落着いて考えてみれば、その理由を中学生かそこらの少年にどう説明すればよいのか見当もつかない。相手は看板を案山子などとは夢にも思っていないだろうから、雀の論理は通用すまい。ただあの時は、妻が私の側に立ってくれたことに救われ、気持ちが楽になっただけの話だった。いやそれ以上に、男と睨み合った時、なんだ、お前は案山子ではないか、と言ってやる僅かなゆとりが生れるほどの力にはなった。裏返されればそれまでだぞ、と窓の中から毒突くのは、一方的に見詰められるのみの関係に比べればまだましだったといえる。

しかし実際には、看板を裏返す手立てが摑めぬ限り、いくら毒突いても所詮空威張りに過ぎぬのは明らかである。そして裏の男は、私のそんな焦りを見透したかのように、前にもまして帽子の広いつばの下の眼に暗い光を溜め、こちらを凝視して止まなかった。流しの窓の前に立たずとも、あの男が見ている、との感じは肌に伝わった。暑いのを我慢して南側の子供部屋で本を読んだりしていると、すぐ隣の居間に男の視線の気配を覚えた。そうなると、本を伏せてわざわざダイニングキチンまで出向き、あの男がいつもと同じ場所に立っているのを確かめるまで落着けなかった。

隣の家に電話をかけ、親に事情を話して看板をどうにかしてもらう、という手も考えた。少年の頭越しのそんな手段はフェアではないだろう、との意識も働いたし、その前に親を納得させる自信がない。もしも納得せぬまま、ただこちらとのいざこざを避けるために親が看板を除去してくれたとしても、相手の内にいかなる疑惑が芽生えるかは容易に想像がつく。あの家には頭のおかしな人間が住んでいる、そんな噂を立てられるのは恐ろしかった。

ある夕暮れ、それは妻が家に居る日だったが、日が沈んで外が少し涼しくなった頃、散歩

に行くぞ、と裏の男に眼で告げて玄関を出た。家を離れて少し歩いた時、町会の掲示板のある角を曲って来る人影に気がついた。迷彩色のシャツをだらしなくジーパンの上に出し、俯きかげんに道の端をのろのろと近づいて来る。まだ育ち切らぬ柔らかな骨格と、無理に背伸びした身なりとのアンバランスな組合せがおかしかった。細い首に支えられた坊主頭がふと上り、またすぐに伏せられた。A隣の少年だ、と思うと同時に、私はほとんど無意識のように道の反対側に移って彼の前に立っていた。

「ちょっと」

声を掛けられた少年は怯えた表情で立ち止り、それが誰かわかると小さく頷く仕種で頭だけ下げ、私を避けて通り過ぎようとした。

「庭のプレハブは君の部屋だろう」

何か曖昧な母音を洩らして彼は微かに頷いた。

「あそこに立てかけてあるのは、映画の看板かい」

細い眼が閉じられるほど細くなって、警戒の色が顔に浮かんだ。

「素敵な絵だけどさ、うちの台所の窓の真正面になるんだ。置いてあるだけなら、あのオジサンを横に移すか、裏返しにするか――」

そこまで言いかけると、相手は肩を聳やかす身振りで歩き出そうとした。

「待ってくれよ、頼んでいるんだから」

肩越しに振り返る相手の顔は無表情に近かった。

「もしもさ――」

追おうとした私を振り切って彼は急ぎもせずに離れて行く。

「ジジイ――」

吐き捨てるように彼の俯いたまま低く叫ぶ声がはっきり聞えた。少年の姿が大野家の石の門に吸い込まれるまで、私はそこに立ったまま見送っていた。

ひどく後味の悪い夕刻の出来事を、私は妻に知られたくなかった。少年から見れば我が身が碌な勤め先も持たぬジジイであることに間違いはなかったろうが、一応は礼を尽して頼んでいるつもりだったのだから、中学生の餓鬼にそれを無視され、罵られたのは身に応えた。B身体の底を殴られたような厭な痛みを少しでも和らげるために、こちらの申し入れが理不尽なものであり、相手の反応は無理もなかったのだ、と考えてみようともした。謂れもない内政干渉として彼が憤る気持ちもわからぬではなかった。しかしそれなら、彼は面を上げて

私の申し入れを拒絶すればよかったのだ。所詮当方は雀の論理しか持ち合わせぬのだから、黙って引き下るしかないわけだ。その方が私もまだ救われたろう。

無視と捨台詞にも似た罵言とは、彼が息子よりも遥かに歳若い少年だけに、やはり耐え難かった。

夜が更けてクーラーをつけた寝室に妻が引込んでしまった後も、私は一人居間のソファーに坐り続けた。穏やかな鼾が寝室の戸の隙間を洩れて来るのを待ってから、大型の懐中電灯を手にしてダイニングキチンの窓に近づいた。もしや、という淡い期待を抱いて隣家の庭を窺った。手前の木々の葉越しにプレハブ小屋の影がぼうと白く漂うだけで、庭は闇に包まれている。網戸に擦りつけるようにして懐中電灯の明りをともした。光の環の中に、きっと私を睨み返す男の顔が浮かんだ。闇に縁取られたその顔は肌に血の色さえ滲ませ、昼間より一層生々しかった。

「馬鹿奴」

呟く声が身体にこもった。暗闇に立つ男を罵っているのか、夕刻の少年に怒りをぶつけているのか、自らを嘲っているのか、自分でもわからなかった。懐中電灯を手にしたまま素早く玄関を出た。土地ぎりぎりに建てた家の壁と塀の間を身体を斜めにしてすり抜ける。建築法がどうなっているのか識らないが、もう少し肥れば通ることの叶わぬ僅かな隙間だった。ランニングシャツ一枚の肩や腕に（注）モルタルのざらつきが痛かった。

東隣との低い生垣に突き当り、檜葉の間を強引に割ってそこを跨ぎ越し、我が家のプロック塀の端を迂回すると再び大野家との生垣を掻き分けて裏の庭へと踏み込んだ。乾いた小さな音がして枝が折れたようだったが、気にかける余裕はなかった。

繁みの下の暗がりで一息つき、足元から先に懐中電灯の光をさっと這わせてすぐ消した。右手の母屋も正面のプレハブ小屋も、明りは消えて闇に沈んでいる。身を屈めたまま手探りに進み、地面に雑然と置かれている小さなベンチや傘立てや三輪車をよけて目指す小屋の横に出た。

男は見上げる高さでそこに平たく立っていた。光を当てなくとも顔の輪郭は夜空の下にぼんやり認められた。そんなただの板と、窓から見える男が同一人物とは到底信じ難かった。これではあの餓鬼に私の言うことが通じなかったとしても無理はない。案山子にとまった雀はこんな気分がするだろうか、と動悸を抑えつつも苦笑した。

しかし濡れたように滑らかな板の表面に触れた時、指先に厭な違和感が走った。それがべ

ニヤ板でも紙でもなく、硬質のプラスチックに似た物体だったからだ。思わず懐中電灯をつけてみずにはいられなかった。果(はた)して断面は分厚い白色で、裏側に光を差し入れるとそこには金属の補強材が縦横に渡されている。人物の描かれた表面処理がいかなるものかまでは咄(とつ)嗟(さ)に摑めなかったが、それが単純に紙を貼りつけただけの代物ではないらしい、との想像はついた。雨に打たれて果無(はかな)く消えるどころか、これは土に埋められても腐ることのないしたたかな男だったのだ。

それを横にずらすか、道に面した壁に向きを変えて立てかけることは出来ぬものか、と持ち上げようとした。相手は根が生えたかの如(ごと)く動かない。これだけの厚みと大きさがあれば体重もかなりのものになるのだろうか。力の入れやすい手がかりを探ろうとして看板の縁を辿(たど)った指が何かに当った。太い針金だった。看板の左端にあけた穴を通して、針金は小屋の樋(とい)としっかり結ばれている。同じような右側の針金の先は、壁に突き出たボルトの頭に巻きついていた。その細工が左右に三つずつ、六カ所にわたって施されているのを確かめると、最早(もはや)男を動かすことは諦めざるを得なかった。夕暮れの少年の細めた眼を思い出し、理由はわからぬものの、Cあ奴はあ奴でかなりの覚悟でことに臨んでいるのだ、と認めてやりたいような気分がよぎった。

(注) モルタル ―― セメントと砂を混ぜ、水で練り合わせたもの。タイルなどの接合や、外壁の塗装などに用いる。

問一　傍線部A「隣の少年だ、と思うと同時に、私はほとんど無意識のように道の反対側に移って彼の前に立っていた。」とあるが、「私」をそのような行動に駆り立てた要因はどのようなことか。その説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 親が看板を取り除いたとしても、少年にどんな疑惑が芽生えるか想像し恐ろしく思っていたこと。

② 少年を差し置いて親に連絡するような手段は、フェアではないだろうと考えていたこと。

③ 男と睨み合ったとき、お前は案山子ではないかと言ってやるだけの余裕が生まれていたこと。

④ 男の視線を感じると、男がいつもの場所に立っているのを確かめるまで安心できなかったこと。

⑤ 少年の発育途上の幼い骨格と、無理に背伸びした身なりとの不均衡をいぶかしく感じていたこと。

⑥ 少年を説得する方法を思いつけないにもかかわらず、看板をどうにかしてほしいと願っていたこと。

問二　傍線部B「身体の底を殴られたような厭な痛み」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 頼みごとに耳を傾けでもらえないうえに、話しかけた際の気遣いも顧みられず一方的に暴言を浴びせられ、存在が根底から否定されたように感じたことによる、解消し難い不快感。

② 礼を尽くして頼んだにもかかわらず少年から非難され、自尊心が損なわれたことに加え、そのことを妻にも言えないほどの汚点だと捉えたことによる、深い孤独と屈辱感。

③ 分別のある大人として交渉にあたれば、説得できると見込んでいた歳若い相手から拒絶され、常識だと信じていたことや経験までもが否定されたように感じたことによる、抑え難いいら立ち。

④ へりくだった態度で接したために、少年を増長させてしまった一連の流れを思い返し、看板についての交渉が絶望的になったと感じたことによる、胸中をえぐられるような癒し難い無念さ。

⑤ 看板について悩む自分に、珍しく助言してくれた妻の言葉を真に受け、幼さの残る少年に対して一方的な干渉をしてしまった自分の態度に、理不尽さを感じたことによる強い失望と後悔。

問三　傍線部C「あ奴はあ奴でかなりの覚悟でことに臨んでいるのだ、と認めてやりたいような気分がよぎった」における「私」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 夜中に隣家の庭に忍び込むには決意を必要としたため、看板を隣家の窓に向けて設置した少年も同様に決意をもって行動した可能性に思い至り、共感を覚えたことで、彼を見直したいような気持ちが心をかすめた。

② 隣家の迷惑を顧みることなく、看板を撤去し難いほど堅固に設置した少年の行動には、彼なりの強い思いが込められていた可能性があると気づき、陰ながら応援したいような新た感情が心をかすめた。

③ 劣化しにくい素材で作られ、しっかり固定された看板を目の当たりにしたことで、少年が何らかの決意をもってそれを設置したことを認め、その心構えについては受け止めたいような思いが心をかすめた。

④ 迷惑な看板を設置したことについて、具体的な対応を求めるつもりだったが、撤去の難しさを確認したことで、この状況を受け入れてしまったほうが気が楽になるのではないかという思いが心をかすめた。

⑤ 看板の素材や設置方法を直接確認し、看板に対する少年の強い思いを想像したことで、彼の気持ちを無視して一方的に苦情を申し立てようとしたことを悔やみ、多少なら歩み寄ってもよいという考えが心をかすめた。

問四　本文では、同一の人物や事物が様々に呼び表されている。それらに着目した、後の(i)・(ii)の問に答えよ。

(i)　隣家の少年を示す表現に表れる「私」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　当初はあくまで他人として「裏の家の息子」と捉えているが、実際に遭遇した少年に未熟さを認めたのちには、「息子よりも遥かに歳若い少年」と表して我が子に向けるような親しみを抱いている。

②　看板への対応を依頼する少年に礼を尽くそうとして「君」と声をかけたが、無礼な言葉と態度を向けられたことで感情的になり、「中学生の餓鬼」「あの餓鬼」と称して怒りを抑えられなくなっている。

③　看板撤去の交渉をする相手として、少年とのやりとりの最中はつねに「君」と呼んで尊重する様子を見せる一方で、少年の外見や言動に対して内心では「中学生の餓鬼」「あの餓鬼」と侮っている。

④　交渉をうまく進めるために「君」と声をかけたが、直接の接触によって我が身の老いを強く意識させられたことで、「中学生の餓鬼」「息子よりも遥かに歳若い少年」と称して彼の若さをうらやんでいる。

⑤　当初は親の方を意識して「裏の家の息子」と表していたが、実際に遭遇したのちには少年を強く意識し、「中学生の餓鬼」「息子よりも遥かに歳若い少年」と彼の年頃を外見から判断しようとしている。

(ii)　看板の絵に対する表現から読み取れる、「私」の様子や心情の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

①　「私」は看板を「裏の男」と人間のように意識しているが、少年の前では「映画の看板」と呼び、自分の意識が露呈しないように工夫する。しかし少年が警戒すると、「素敵な絵」とたたえて配慮を示した直後に「あのオジサン」と無遠慮に呼んでおり、余裕をなくして表現の一貫性を失った様子が読み取れる。

②　「私」は看板について「あの男」「案山子」と比喩的に語っているが、少年の前では「素敵な絵」と大げさにたたえており、さらに、少年が憧れているらしい映画俳優への敬意を全面的に示すように「あのオジサン」と呼んでいる。少年との交渉をうまく運ぼうとして、プライドを捨てて卑屈に振るまう様子が読み取れる。

③　「私」は妻の前では看板を「案山子」と呼び、単なる物として軽視しているが、少年の前では「素敵な絵」とたたえ、さらに「あのオジサン」と親しみを込めて呼んでいる。しかし、少年から拒絶の態度を示されると、「看板の絵」「横に移」「裏返しにする」と物

扱いしており、態度を都合よく変えている様子が読み取れる。

④「私」は看板を「裏の男」「あの男」と人間に見立てているが、少年の前でとっさに「映画の看板」「素敵な絵」と表してしまったため、親しみを込めながら「あのオジサン」と呼び直している。突然訪れた少年との直接交渉の機会に動揺し、看板の絵を表する言葉を見失い慌てふためいている様子が読み取れる。

問五　Nさんは、二重傍線部「案山子にとまった雀はこんな気分がするだろうか、と動悸を抑えつつも苦笑した。」について理解を深めようとした。まず、国語辞典で「案山子」を調べたところ季語であることがわかった。そこでさらに、歳時記（季語を分類して解説や例句をつけた書物）から「案山子」と「雀」が詠まれた俳句を探し、これらの内容を【ノート】に整理した。このことについて、後の(i)・(ii)の問に答えよ。

【ノート】

●国語辞典にある「案山子」の意味

㋐　竹や藁などで人の形を造り、田畑に立てて、鳥獣が寄るのをおどし防ぐもの。とりおどし。

㋑　見かけばかりもっともらしくて、役に立たない人。

季語・秋。

●歳時記に掲載されている案山子と雀の俳句

ⓐ「案山子立つれば群雀空にしづまらず」（飯田蛇笏）

ⓑ「稲雀追ふ力なき案山子かな」（高浜年尾）

ⓒ「某は案山子にて候雀殿」（夏目漱石）

●解釈のメモ

ⓐ　遠くにいる案山子に脅かされて雀が群れ騒ぐ風景。

ⓑ　雀を追い払えない案山子の様子。

ⓒ　案山子が雀に対して虚勢を張っているように見える様子。

●「案山子」と「雀」の関係に注目し、看板に対する「私」の認識を捉えるための観点。

・看板を家の窓から見ていた時の「私」　→　X

・看板に近づいた時の「私」　→　Y

(i) Nさんは、「私」が看板を家の窓から見ていた時と近づいた時にわけたうえで、国語辞典や歳時記の内容と関連づけながら【ノート】の傍線部について考えようとした。空欄XとYに入る内容の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

(ア) X ―― 歳時記の句ⓐでは案山子の存在に雀がざわめいている様子であり、国語辞典の説明アにある「おどし防ぐ」存在となっていることに注目する。

(イ) X ―― 歳時記の句ⓒでは案山子が虚勢を張っているように見え、国語辞典の説明イにある「見かけばかりもっともらし」い存在となっていることに注目する。

(ウ) Y ―― 歳時記の句ⓑでは案山子が実際には雀を追い払うことができず、国語辞典の説明イにある「見かけばかりもっともらし」い存在となっていることに注目する。

(エ) Y ―― 歳時記の句ⓒでは案山子が雀に対して自ら名乗ってみせるだけで、国語辞典の説明アにある「おどし防ぐ」存在となっていることに注目する。

① X―(ア) Y―(ウ)
② X―(ア) Y―(エ)
③ X―(イ) Y―(ウ)
④ X―(イ) Y―(エ)

(ii) **【ノート】**を踏まえて「私」の看板に対する認識の変化や心情について説明したものとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① はじめ「私」は、ⓒ「某は案山子にて候雀殿」の虚勢を張る「案山子」のような看板に近づけず、家のなかから眺めているだけの状態であった。しかし、そばまで近づいたことで、看板は㋑「見かけばかりもっともらし」いものであることに気づき、これまで「ただの板」にこだわり続けていたことに対して大人げなさを感じている。

② はじめ「私」は、ⓑ「稲雀追ふ力なき案山子かな」の「案山子」のように看板は自分に危害を加えるようなものではないと理解していた。しかし、意を決して裏の庭に忍び込んだことで、看板の㋐「おどし防ぐもの」としての効果を実感し、雀の立場として「ただの板」に苦しんでいる自分に気恥ずかしさを感じている。

③ はじめ「私」は、自分を監視している存在として看板を捉え、㋐「おどし防ぐもの」と対面するような落ち着かない状態であった。しかし、おそるおそる近づいてみたことで、ⓒ「某は案山子にて候雀殿」のように看板の正体を明確に認識し、「ただの板」に対する怖さを克服しえた自分に自信をもつことができたと感じている。

④ はじめ「私」は、㋐「とりおどし」のような脅すものとして看板をとらえ、その存在の不気味さを感じている状態であった。しかし、暗闇に紛れて近づいたことにより、実際にはⓑ「稲雀追ふ力なき案山子かな」のような存在であることを発見し、「ただの板」である看板に心を乱されていた自分に哀れみを感じている。

⑤ はじめ「私」は、常に自分を見つめる看板に対してⓐ「群雀空にしづまらず」の「雀」のような心穏やかでない状態であった。しかし、そばに近づいてみたことにより、看板は㋑「見かけばかりもっともらし」いものであって恐れるに足りないとわかり、「ただの板」に対して悩んできた自分に滑稽さを感じている。

（note）

17 文学的文章・小説 〈求められる思考回路〉❷

次の文章は、井上荒野（いのうえあれの）の小説「キュウリいろいろ」の一節である。郁子は三十五年前に息子を亡くし、以来夫婦ふたり暮らしだったが、昨年夫が亡くなった。以下は、郁子がはじめてひとりでお盆を迎える場面から始まる。これを読んで、後の問いに答えよ。

おいしいビールを飲みながら、郁子は楊枝をキュウリに刺して、二頭の（注1）馬を作った。本棚に並べた息子と夫の写真の前に置く。

キュウリで作るのは馬、茄子（なす）で作るのは牛の見立てだという。郁子は田舎の生まれだから、実家の立派な仏壇にも、お盆の頃には提灯（ちょうちん）と一緒にそれらが飾られていた。足の速い馬は仏様がこちらへ来るときに、足の遅い牛は仏様が向こうへ戻るときに乗っていただくのだという。

実家を出てからも、郁子は毎年それを作ってきた。三十五年間――息子の草（そう）が亡くなってからずっと。

馬に乗って帰ってきてほしかったし、一緒に連れていってほしかった。あるときそれを夫に打ち明けてしまったことがある。キュウリの馬を作っていたら、君はほんとにそういうことを細々と熱心にやるねと、からかう口調で言われて、なんだか妙に腹が立ったのだ。あの子と一緒に乗っていけるように、立派な馬を作ってるのよ。言った瞬間に後悔したが、遅かった。俊介は何も言い返さなかった。ただ、それまでの無邪気な微笑（ほほえ）みがすっと消えて、暗い、寂しい顔になった。

後悔はしたのだ、いつも。だがなぜか再び舌が勝手に動いて、憎まれ口が飛び出す。そういうことが幾度もあった。俊介はたまったものではなかっただろう。いつも黙り込むだけだったが、いちどだけ（ア）腹に据えかねたのか「別れようか」と言われたことがあった。

別れようか。俺と一緒にいることが、そんなにつらいのなら……。

いやよ。郁子は即座にそう答えた。とうとう夫がその言葉を言ったということに（イ）戦きながら、でもその衝撃を悟られまいと虚勢を張って。

あなたは逃げるつもりなのね？　そんなの許さない。わたしは絶対に別れない。

震える声を抑えながら、そう言った。それは本心でもあった。息子の死、息子の記憶に、ひとりでなんかとうてい耐えきれるはずがなかった。だから昨年、俊介が死んでしまったと

きは、怒りがあった。とうとう逃げたのね、と感じた。怒りは悲しみよりも大きいようで、どうしていいかわからなかった。

郁子はビールを飲み干すと、息子の写真を見、それから夫の写真を見た。キュウリの馬は、それぞれにちゃんと一頭ずつ作ったのだった。帰りの牛がないけれど、べつに帰らなくたっていいわよねえ、と思う。馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい。

A写真の俊介が苦笑したように見えた。亡くなる少し前、友人夫婦と山へ行ったときのの(注2)スナップ。会話しながら笑っている顔。いかにも愉(たの)しげなゆったりとした表情をしているが、あとから友人にあれはあなたと喋(しゃべ)っているときよと教えられた。嘘(うそ)だわと思い、本当かしらとも思った。

数日前の同級生からの用件は、俊介の写真を借りたい、というものだった。名簿は一ページを四人で分割する形にして、本人が書いた簡単なプロフィールとともに、高校時代のスナップと、現在の写真を並べて載せたいのだという。この写真を貸すことはできるが、そうしたら返ってくるまでの間、書棚の額の片方が空になってしまう。

そのことが目下の懸案事項なのだった。写真を探さなければならない、と郁子は思った——じつのところ、この数日ずっとそう思っていた。夫と暮らした約四十年間の間に撮ったり、撮られたりして溜(た)まったスナップ写真は、押し入れの下段の布張りの箱に収まっている。箱の上には俊介が整理したアルバムも三冊ある。あれを取り出してみなければ。郁子はそう考え、なんだかもうずっと前、三十年も四十年も前から、そのことばかり考え続けていたような気がした。

(注)　1　馬 —— お盆の時に、キュウリを使って、死者の霊が乗る馬に見立てて作るもの。
　　2　スナップ —— スナップ写真のこと。人物などの瞬間的な動作や表情を撮った写真。

問1 傍線部(ア)・(イ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) 腹に据えかねた

① 本心を隠しきれなかった
② 我慢ができなかった
③ 合点がいかなかった
④ 気配りが足りなかった
⑤ 気持ちが静まらなかった

(イ) 戦(おのの)きながら

① 勇んで奮い立ちながら
② 驚いてうろたえながら
③ 慌てて取り繕いながら
④ あきれて戸惑いながら
⑤ ひるんでおびえながら

問2 傍線部A「写真の俊介が苦笑したように見えた。」とあるが、そのように郁子に見えたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① キュウリで馬を作る自分に共感しなかった夫を今も憎らしく思っているが、そんな自分のことを、夫は嫌な気持ちを抑えて笑って許してくれるだろうと想像しているから。
② 自分が憎まれ口を利いても、たいていはただ黙り込むだけだったことに、夫は後ろめたさを感じながら今も笑って聞き流そうとしているだろうと想像しているから。
③ かつては息子の元へ行きたいと言い、今は息子も夫も自分のそばにいてほしいと言う、身勝手な自分のことを、夫はあきれつつ受け入れて笑ってくれるだろうと想像しているから。
④ 亡くなった息子だけでなく夫の分までキュウリで馬を作っている自分のことを、以前からかったときと同じように、夫は今も皮肉交じりに笑っているだろうと想像しているから。
⑤ ゆったりとした表情を浮かべた夫の写真を見て、夫に甘え続けていたことに今さら気づいた自分の頼りなさを、夫は困ったように笑っているだろうと想像しているから。

（note）

18 第3問　対策のポイント

問題は当日配布します。

（note）

共通テスト現代文

OUR TEXTBOOK 2024
2 学期

Features
「実戦」へ
1.論理的な文章・頻出テーマ攻略

言語	122	【1】佐野洋子・加藤正弘 『脳が言葉を取り戻すとき』
	126	【2】田中克彦 「言語の思考・国家と民族のことば」
	128	丸山圭三郎『ソシュールを読む』
自然観	150	山本健吉 「日本の庭について」
歴史論	158	当日配布
近代論	162	当日配布
科学論	164	当日配布

2.文学的な文章・様々な設問形式に対処する

132	原民喜 「翳」
140	山田詠美 「眠れる分度器」

3.秋期講習

別途配布

19 論理的文章　頻出テーマ〈言語・認識〉❶

【1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ヨハネ伝福音書の冒頭に、次のような言葉が書かれている。

太初(はじめ)に言(ことば)ありき。
言は神と偕(とも)にあり。
言は神なりき。

ここには言葉の本質が描き出されている。これは、人間にとって言葉なくしてはこの世界は何の意味もなさず、言葉は人間の精神そのものである、という意味である。

ところで、まず最初に言葉があった、とはいったいどういう意味であろうか。

すべての始まりを宇宙の誕生に求めるなら、「太初にビックバンありき」とでも言うべきだろう。あるいはまた、人類の誕生をもってすべての始まりとするなら、「太初に生命(いのち)ありき」ということにならないだろうか。確かに、自然界（または宇宙）の営みとしてはそうかもしれない。しかし、人間は、単に生命体としてこの世に生まれてきただけでは、「人間」とはいえない。それは動物の一種としての「ヒト」である。「ヒト」は「イヌ」や「サル」などと同じ動物である。動物にとって、世界の意味はそれほど複雑なものではない。そこには、種としての生命を維持していく上で有益であるか無益または害になるものであるかの二つの意味＝価値しかない。言語哲学者の丸山圭三郎の言葉を借りれば、このような世界の構造は「身分(みわ)け構造」と呼ばれる。本能としての身体で世界を分けるからである。

一方、人間は「身」ではなく、「言葉」によって世界を分節し意味を与える能力を持っている。例えば一～二歳の子供が犬を見て、生まれて初めて「ワンワン」という言葉を発したとき、Aその瞬間からその子供の意識の中に「ワンワン」、すなわち犬の存在が生れるのである。もちろん「ワンワン」という言葉が発せられる何か月も前から、その子供の目には時折、犬の姿が映っていたことであろう。しかしそれは、茫洋(ぼうよう)とした外界の一風景に過ぎなかったはずである。ところが「ワンワン」と言葉にしたその瞬間、その茫洋とした外界から「ワンワン」が初めて意味を持った存在として切り取られるのである。と同時に、「ワンワン」と「ワンワンでない物」とが分けられるのである。こうして「人」は、種の本能とは別の次元で、次々と「言葉」によって世界を分け、世界に意味を与えていくのである。このようにして分けられた世界の構造は、前述の「身分け構造」に対して「言分(ことわ)け構造」と呼ばれる。言葉で世界を分けるからである。これによって人間は「真実／真実でない」「正しい／正しく

ない」「美しい／美しくない」など、単に生命を維持していくためだけなら必要のないさまざまな価値基準を持ち、さまざまな文化を持つようになったのである。言い換えると、それが人間の人間たる所以である。

一方、言葉には、すでに存在している事物や観念にラベルを貼る二次的な作用もある。例えばB キャラクター人形の愛称募集」などという広告に見るような場合である。われわれの日常的な感覚からすると、「言葉の役割とは何か」と問われたとき、むしろこちらのほうが答えとして当たっているのではないかと思われるかもしれない。しかしこれは、言葉の表層的な役割に過ぎない。言葉の本質は前者のほう、すなわちわれわれを取り巻く環境世界に意味を見出し、区別し、人間独自の文化を作り出していく働きにある。人間は言葉を持っているからこそ、この外界を意味の豊かな世界として認識することができるのである。すなわち言語は、人間が「人間」として世界に存在し続ける上での根本をなすものなのである。

北アメリカのイヌイットは、雪の状態を表現する名詞を百個近く持っているという。一方のわれわれは、粉雪、ぼたん雪、みぞれなど、雪の降る状態を表すための名詞をいくつか持っているが、積もった状態の雪を表現する名詞はほとんど持っていない。このことは、雪の状態を正確に認知する能力に関しては、イヌイットの言語に熟達したひとのほうがわれわれより優れているということを示している。また、虹は七色とされているが、赤 橙 黄 緑 青 藍 紫の七つの色のそれぞれに対して該当する名詞を持っている言語は必ずしも多くない。たった三つか四つの色名しか持たない言語もあり、そのような言語を使っている人は、色の名詞をたくさん持つ言語を使う人よりも色の認識能力が劣るという報告もある。

つまり、最初から色彩豊かな世界が人間とは無関係に独自に存在していて、後から現れた人間がそれに対して一つひとつ名前をつけていったのではないのである。 C 。

ご存じフーテンの寅さんの名ゼリフの一つに「数字の始まりが一ならば国の始まりは大和の国、島の始まりが淡路島で泥棒の始まりが石川五右衛門」というのがあったように記憶するが、人間存在にとっての太初はまさに言なのである。

（佐野洋子・加藤正弘『脳が言葉を取り戻すとき』による）

注　イヌイット……カナダ北部の先住民族。

問一　傍線部A「その瞬間からその子供の意識の中に「ワンワン」、すなわち犬の存在が生れる」とあるが、ここで言われている「犬の存在」を説明するものとしてもっとも適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 「ワンワン」という名で呼ばれる特殊な犬。
② 子供に対して吠えかかる犬。
③ 他の犬から区別される、かけがえのない一匹の犬。
④ 「ワンワン」として他のものと区別される対象。
⑤ 「ワンワン」という言葉。

問二　傍線部B「「キャラクター人形の愛称募集」などという広告に見るような場合」とあるが、どのような場合のことか。もっとも適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 環境世界に意味を見出し、区別し、人間独自の文化を作り出していく場合。
② 名前のないものに名前を与えることで世界に新たな意味づけをする場合。
③ 意味を持たない対象に名前を与えることで新しい意味を作り出す場合。
④ 新しい名前を与えることで、それまで気づかなかった意味を発見する場合。
⑤ 人間にとってすでに意味のわかっている対象に名前をつける場合。

問三　空欄Cに入れるのにもっとも適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① もちろん、色彩豊かな世界はあらかじめ存在しているが、人間はそこにある色彩を一つひとつ発見して名づけていくことで初めて相互に意思疎通ができるようになる
② 人間が言葉で名づけたことによって世界が意味を持って人間の前に立ち現れ、その結果、人間が「人間」として存在するようになったのである
③ 人間が色彩に一つひとつ名前をつけていくことによって初めて、それまで人間とは無関係に存在していた色彩豊かな世界は人間と結びつけられる
④ 色彩とはあくまでも色の名前なのだから、目の前の花の色は「赤」と名づければ赤くなり、「白」と名づければ白くなるのである
⑤ 「キャラクター人形の愛称募集」と同じように、色彩豊かな世界は名前を一つひとつ与えられて初めて、それを言葉で言い表わすことができるようになる

（note）

【2】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

外界は言語を通してはじめて秩序づけられて人間に把握される。外界はあたかも夜空に浮かぶ満天の星のようなものであって、目に入ってくるのは雑然と散らばった一つ一つの光る点でしかない。だが星々の間に人間はある解釈をほどこして、大熊座とかオリオン座とかの単位を設ける。この過程は発見というよりは創造と呼んだ方がふさわしい。星じたいには、それが熊や猟師にならなければならないという必然性は全くないからである。しかし、ことばがそれに名づけを行ったとたん、夜空に熊や猟師が現れる。このことがよく物語っているように、ことばはあらかじめ現実の中に示された分類に対して貼り付けられたレッテルでもなければ、人間の意識そのものでもない。つまり、ことばは、現実、客観的世界と人間との間に立ちはだかって、独自の世界を作り出している。ヴァイスゲルバーは言語の働きをこのようにとらえて、現実が意識にキャッチされるまでの中間領域を「精神の中間世界」と呼んだ。この中間世界は人間の音声によってつなぎとめられて、はじめてたしかなものとなる。ヴァイスゲルバーはこの過程を次のように考えた。つまり、針葉樹と闊葉樹はそれぞれ別のものであって、それ自体が人間に同族であることを認めよとは要求しない。だが日本語では、それらの違いを無視して、あえて「キ」とこれを呼んでいる。これを一つのものとしてとらえているのは、「精神の中間世界」のはたらきによる。

この「精神の中間世界」は、言語ごとに全部違っていて、それを寸分たがわず共有する言語は一つとしてない。客観的（物理的）には摂氏八〇度の水は、英語では熱い「水」と把握されるのに、日本語では「ユ」と把握する。同じ状態の客体が違って呼ばれるのは、この客体を意識につなぐ「中間世界」がちがうからである。とすると、言語が違えば我々は外界をも違ったふうにみていることになる。

（田中克彦「言語の思考―国家と民族のことば」）

問 傍線部の例として間違っているものを、次の①～④の中から一つ選べ。

① 虹の色は、日本では七色に数えるのが一般的だが、英語では六色に数えるのが普通である。

② 元素記号Oで示される元素は、日本語では「酸素」、英語では「oxygen」である。

③ 「management」という英語は、日本語の経営に相当する場合と「管理」に相当する場合がある。

④ 日本語では成長段階によって名前が変化する魚が、英語では成長段階に関わらず同じ名前で呼ばれる。

(note)

20 論理的文章　頻出テーマ〈言語・認識〉❷

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』のなかで「事物の命名は認識のあとになってもたらされるのではなくて、それは認識そのものである」と言っています。私たちはともすれば、コトバ以前に何かを認識して、それからその認識した対象に名前をつける、というふうに思いがちです。しかし、子供にとって対象物というものは、それが名前をもったときにはじめて知られる。名前というのは実は事物の本質である、ただ事物の上に貼り付いたラベルなどではなくて、事物の中にその色、あるいはその形と同じ資格で住み込んでしまう、ということではないでしょうか。

この、世界が分節されると同時に自分の意識も分節される、また自分の意識が分節されると同時に世界が差異化されるということに関して、私自身こんな経験をいたしましたのでご紹介いたします。

走っている電車の中でした。がらがらの座席に母親とともに坐（すわ）っていた三歳ぐらいの女の子が、「デンシャ、デンシャ」と習いたての単語を一生懸命口の中でつぶやいては、周囲の窓枠や席の布地を手でさすったあげく、思いあぐねた様子で母親にこうたずねたのです。「ママ、デンシャって人間なの？　それともお人形なの？」

コトバを覚えはじめたばかりの幼児にとっては、毎日の瞬間、瞬間が新しい分節、意味づけ意味づけられる行為の連続なのです。コトバ以前に、もちろん感覚＝運動的な知能による分節行為はあります。しかし、言語習得によって身につけるものは、そういう自然の分節行為ではなくて、まことに非自然の分節行為です。ですから、なかなか本能的納得というものは得られません。「デンシャって人形なのか人形なのか」という妙な質問も出てくるわけです。つまり、感覚＝運動的な知能から思考的な知能へと移行していく象徴化過程にあって、この女の子の世界の中では「電車」という語を知る以前は、こういうふうに分かれていたのでしょう。「動くもの、そして柔らかく温かい感触をもつもの」と、「動かないもの、そして固く冷たい感触をもつもの」という対立によって生じたカテゴリーにおいては、「人間」と「人形」という概念が無理なく処理されていました。「人間」というのは「動いて柔らかくて温かいカテゴリー」にすっぽり入っていましたし、「人形」はいくら人間と似ていても、「動かないし、さわれば固いカテゴリー」に属しています。ところが、「デンシャ」というコトバを習い、同時にその対象を認識したとき、「動きはするが、さわってみると冷たく固い感触

をもつ」新しいカテゴリーが登場しました。この子が混乱した理由はよくわかります。繰り返し繰り返し命名を通して、知覚と感覚は刻一刻と密になる認識の網目によって再編成を強いられる。事物（世界）と意識（人間）というものが相互に差異化されていくのです。そんなことを考えて母娘の会話を聞いていたのですが、女の子の興味深い問いかけは、A母親のほうは首をかしげながら「デンシャって人間？　デンシャって人形？」と歌うようにつぶやいていたのが、いまでも耳にのこっております。

あの有名なヘレン・ケラーの体験もそうなのです。感覚＝運動的な知能から、ある飛躍を可能にしたのが記号でした。water という語は手のひらに書かれた触覚イメージですが、このイメージがそれまで存在しなかった意味を担い、現実が分節され、彼女の意識も同時に分節されました。それまで感覚＝運動的に知覚していた水が、突然別の網の目に区切られて、記号の指向対象としての水となりました。

つまり指向対象が誕生するということは関係づけられたということになるのですが、関係の世界においては個は存在しません。最初の一語を覚えてからヘレン・ケラーの場合は一挙にコトバの世界が開けたと言われていますが、実は、最初の一語と言われている water は、実体的な一語の習得ではなく、water と non-water という対立構造把握の出発点であったのです。

（丸山圭三郎『ソシュールを読む』による）

注　メルロ＝ポンティ……フランスの哲学者（一九〇八～一九六一年）。

問一　傍線部A「母親の『バカねぇ、電車は電車よ』という非説得的な答え」とあるが、筆者はなぜ母親の返答を「非説得的」だとみなしたのか。その説明として適当と思われるものにはAを、不適当と思われるものにはBを記せ。

イ　幼児が新たな認識カテゴリーの存在を無視したことに対して、母親がまごついて投げやりな対応をしたから。

ロ　幼児が既知のカテゴリー以外のものに出会って混乱していたのに、母親が正面から向き合おうとしなかったから。

ハ　幼児が別のカテゴリーを認識したにもかかわらず、母親が新しいカテゴリーを教えようとしたから。

ニ　幼児が思考的な知能へと移行していく兆しが見えたのに、母親がそれに気づかず、的外れの対応をしたから。

ホ　幼児が思考的な知能へと移行していく過程にあることに母親が気づいて、大人の常識で対応しようとしたから。

問二 本文における筆者の考え方に合致するものを、次の中から一つ選べ。

イ 私たちは、事物を認識した後でその事物に名前をつけると考えがちだが、実はその順序は逆であって、事物の命名は事物の認識に先行する。

ロ 事物の意味というものは、ほんらい事物そのものの内にひそんでいるため、命名と差異化を通してはじめてその事物の意味の理解が可能となる。

ハ 名前を知ることと認識することは同時に起こるのであって、子どもは言語の習得を通じて絶えず現実を新たに区切りながら世界を認識していく。

ニ 語というものはそれ自体で独自の意味を持つものではなく、因果関係が複雑に入り組んだ認識の網の目の中に置かれてはじめて意味を持つことになる。

ホ 言語を習得する以前の成長段階にある子どもは、意味を担う記号を理解することができないため、世界を分節されていない連続体として見ている。

（note）

21 文学的文章 〈苦手な人が多い設問・表現叙述〉

次の文章は、原民喜「翳」（一九四八年発表）の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

私は一九四四年の秋に妻を喪ったが、ごく少数の知己へ送った死亡通知のほかに、満洲にいる魚芳へも端書を差出しておいた。妻を喪った私は悔み状が来るたびに、丁寧に読み返し仏壇のほとりに供えておいた。紋切型の悔み状であっても、それにはそれでまた喪にいるものの心を鎮めてくれるものがあった。本土空襲も漸く切迫しかかった頃のことで、出した死亡通知に何の返事も来ないものもあった。出した筈の通知にまだ返信が来ないという些細なことも、私にとっては時折気に掛るのであったが、妻の死を知って、ほんとうに悲しみを頒ってくれるだろうとおもえた川瀬成吉からもどうしたものか、何の返事もなかった。

私は妻の遺骨を郷里の墓地に納めると、再び棲みなれた千葉の借家に立帰り、そこで四十九日を迎えた。輸送船の船長をしていた妻の義兄が台湾沖で沈んだということをきいたのもその頃である。サイレンはもう頻々と鳴り唸っていた。A そうした、暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と蹲ったまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かった。その年も暮れようとする、底冷えの重苦しい、曇った朝、一通の封書が私のところに舞込んだ。差出人は新潟県××郡××村×川瀬丈吉となっている。一目見て、魚芳の父親らしいことが分ったが、何気なく封を切ると、内味まで父親の筆跡で、息子の死を通知して来たものであった。私が満洲にいるとばかり思っていた川瀬成吉は、私の妻より五ヵ月前に既にこの世を去っていたのである。

私がはじめて魚芳を見たのは十二年前のことで、私達が千葉の借家へ移った時のことである。私たちがそこへ越した、その日、(注1)彼は早速顔をのぞけ、それからは殆ど毎日註文を取りに立寄った。大概朝のうち註文を取ってまわり、夕方自転車で魚を配達するのであったが、どうかすると何かの都合で、日に二三度顔を現わすこともあった。そういう時も彼は気軽に(注2)一里あまりの路を自転車で何度も往復した。私の妻は毎日顔を逢わせているので、時々、彼のことを私に語るのであったが、まだ私は何の興味も関心も持たなかったし、殆ど碌に顔も知っていなかった。

私がほんとうに魚芳の小僧を見たのは、それから一年後のことと云っていい。ある日、私達は隣家の細君と一緒にブラブラと千葉海岸の方へ散歩していた。すると、向の青々とした草原の径をゴムの長靴をひきずり、自転車を脇に押しやりながら、ぶらぶらやって来る青年があった。私達の姿を認めると、いかにも懐しげに帽子をとって、挨拶をした。

「魚芳さんはこの辺までやって来るの」と隣家の細君は訊ねた。

「ハア」と彼はこの一寸とした(注3)逢遭を、いかにも愉しげにニコニコしているのであった。やがて、彼の姿が遠ざかって行くと、隣家の細君は、

「ほんとに、あの人は顔だけ見たら、まるで良家のお坊ちゃんのようですね」と嘆じた。その頃から私はかすかに魚芳に興味を持つようになっていた。

その頃――と云っても隣家の細君が魚芳をほめた時から、もう一年は隔っていたが、――私の家に宿なし犬が居ついて、表の(注4)露次でいつも寝そべっていた。褐色の毛並をした、その懶惰な雌犬は魚芳のゴム靴の音をきくと、のそのそと立上って、鼻さきを持上げながら自転車の後について歩く。何となく魚芳はその犬に対しても愛嬌を示すような身振であった。彼がやって来ると、この露次は急に賑やかになり、細君や子供たちが一頻り陽気に騒ぐのであったが、ふと、その騒ぎも少し鎮まった頃、窓の方から向を見ると、魚芳は木箱の中から魚の頭を取出して犬に与えているのであった。そこへ、もう一人雑魚売りの爺さんが天秤棒を担いでやって来る。魚芳のおとなしい物腰に対して、この爺さんの方は威勢のいい商人であった。そうするとまた露次は賑やかになり、爺さんの忙しげな庖丁の音や、魚芳の滑らかな声が暫くつづくのであった。――こうした、のんびりした情景はほとんど毎日繰返されていたし、ずっと続いてゆくもののようにおもわれた。だが、(注5)日華事変の頃から少しずつ変って行くのであった。

私の家は露次の方から(注6)三尺幅の空地を廻ると、台所に行かれるようになっていたが、そして、台所の前にもやはり三尺幅の空地があったが、そこへ毎日、八百屋、魚芳をはじめ、いろんな(注7)御用聞がやって来る。台所の障子一重を隔てた六畳が私の書斎になっていたので、御用聞と妻との話すことは手にとるように聞える。私はぼんやりと彼等の会話に耳をかたむけることがあった。ある日も、それは南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる、散漫な午後であったが、米屋の小僧と魚芳と妻との三人が台所で賑やかに談笑していた。そのうちに彼等の話題は(注8)教練のことに移って行った。二人とも青年訓練所へ通っているらしく、その台所前の狭い空地で、魚芳たちは「(注9)になえつつ」の姿勢を実演して(ア)興じ合っているのであった。二人とも来年(注10)入営する筈であったので、兵隊の姿勢を身につけようとして陽気に騒ぎ合っているのだ。その恰好がおかしいので私の妻は笑いこけていた。だが、B何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった。台所へ姿を現していた御用聞のうちでは、八百屋がまず召集され、つづいて雑貨屋の小僧が、これは海軍志願兵になって行ってしまった。それから、豆腐屋の若衆がある日、(注11)赤襷をして、台所に立寄り忙しげに別れを告げて行った。

目に見えない憂鬱の影はだんだん濃くなっていたようだ。が、魚芳は相変らず元気で小豆に立働いた。妻が私の着古しのシャツなどを与えると、大喜びで彼はそんなものも早速身に着けるのであった。朝は暗いうちから市場へ行き、夜は皆が寝静まる時まで板場で働く、

そんな内幕も妻に語るようになった。料理の骨が憶えたくて堪らないので、教えを乞うと、親方は庖丁を使いながら彼の方を見やり、「黙って見ていろ」と、ただ、そう呟くのだそうだ。(注12)鞠窮如として勤勉に立働く魚芳は、もしかすると、そこの家の養子にされるのではあるまいか、と私の妻は臆測もした。ある時も魚芳は私の妻に、――あなたとそっくりの写真がありますよ。それが主人のかみさんの妹なのですが、と大発見をしたように告げるのであった。

冬になると、魚芳は鴨を持って来て呉れた。彼の店の裏に畑があって、そこへ毎朝沢山小鳥が集まるので、釣針に蚯蚓を附けたものを木の枝に吊しておくと、小鳥は簡単に獲れる。餌は前の晩しつらえておくと、霜の朝、小鳥は木の枝に動かなくなっている――この手柄話を妻はひどく面白がったし、私も好きな小鳥が食べられるので喜んだ。すると、魚芳は殆ど毎日小鳥を獲ってはせっせと私のところへ持って来る。夕方になると台所に彼の弾んだ声がきこえるのだった。――この頃が彼にとっては一番愉しかった時代かもしれない。その後戦地へ赴いた彼に妻が思い出を書いてやると、「帰って来たら又幾羽でも鴨鳥を獲って差上げます」と何かまだ弾む気持をつたえるような返事であった。

翌年春、魚芳は入営し、やがて満洲の方から便りを寄越すようになった。その年の秋から私の妻は発病し療養生活を送るようになったが、妻は枕頭で(注13)女中を指図して慰問の小包を作らせ魚芳に送ったりした。温かそうな毛の帽子を着た軍服姿の(注14)写真が満洲から送って来た。きっと魚芳はみんなに可愛がられているに違いない。炊事も出来るし、あの気性では誰からも、(イ)重宝がられるだろう、と妻は時折噂をした。妻の病気は二年三年と長びいていたが、そのうちに、魚芳は(注15)北支から便りを寄越すようになった。もう程なく除隊になるから帰ったらよろしくお願いする、とあった。魚芳はまた帰って来て魚屋が出来ると思っているのかしら……と病妻は心細げに嘆息した。一しきり台所を賑わしていた御用聞きたちの和やかな声ももう聞かれなかったし、世の中はいよいよ兇悪な貌を露出している頃であった。千葉名産の蛤の缶詰を送ってやると、大喜びで、千葉へ帰って来る日をたのしみにしている礼状が来た。年の暮、新潟の方から梨の箱が届いた。差出人は川瀬成吉とあった。それから間もなく除隊になった挨拶状が届いた。魚芳が千葉へ訪れて来たのは、その翌年であった。

その頃女中を傭えなかったので、妻は寝たり起きたりの身体で台所をやっていたが、ある日、台所の裏口へ軍服姿の川瀬成吉がふらりと現れたのだった。彼はきちんと立ったまま、ニコニコしていた。久振りではあるし、私も頻りに上ってゆっくりして行けとすすめたのだが、C彼はかしこまったまま、台所のところの閾から一歩も内へ這入ろうとしないのであった。「何になったの」と、軍隊のことはよく分らない私達が訊ねると、「兵長になりました」

65 70 75 80 85 90

と嬉しげに応え、これからまだ魚芳へ行くのだからと、(注17)倉皇として立去ったのである。

そして、それきり彼は訪ねて来なかった。あれほど千葉へ帰る日をたのしみにしていた彼はそれから間もなく満洲の方へ行ってしまった。だが、私は彼が千葉を立去る前に街の歯医者でちらとその姿を見たのであった。恰度私がそこで順番を待っていると、後から入って来た軍服の青年が歯医者に挨拶をした。「ほう、立派になったね」と老人の医者は懐しげに肯いた。やがて、私が治療室の方へ行きそこの椅子に腰を下すと、間もなく、後からやって来たその青年も助手の方の椅子に腰を下した。「これは仮りにこうしておきますから、また郷里の方でゆっくりお治しなさい」その青年の手当はすぐ終ったらしく、助手は「川瀬成吉さんでしたね」と、机のところのカードに彼の名を記入する様子であった。それまで何となく重苦しい気分に沈んでいた私はその名をきいて、はっとしたが、その時にはもう彼は階段を降りてゆくところだった。

それから二三ヵ月して、(注18)新京の方から便りが来た。川瀬成吉は満洲の(注19)吏員に就職したらしかった。あれほど内地を恋しがっていた魚芳も、一度帰ってみて、すっかり失望してしまったのであろう。私の妻は日々に募ってゆく生活難を書いてやった。すると満洲から返事が来た。「大根一本が五十銭、内地の暮しは何のことやらわかりません。おそろしいことですね」――こんな一節があった。しかしこれが最後の消息であった。その後私の妻の病気は悪化し、もう手紙を認めることも出来なかったが、満洲の方からも音沙汰なかった。

その文面によれば、彼は死ぬる一週間前に郷里に辿りついているのである。「兼て彼の地に於て病を得、五月一日帰郷、五月八日、永眠仕候」と、その手紙は悲痛を押つぶすような調子ではあるが、それだけに、侘しいものの姿が、一そう大きく浮び上って来る。あんな気性では皆から可愛がられるだろうと、よく妻は云っていたが、善良なだけに、彼は周囲から過重な仕事を押つけられ、悪い環境や機構の中を堪え忍んで行ったのではあるまいか。親方から庖丁の使い方は教えて貰えなくても、辛棒した魚芳、久振りに訪ねて来ても、台所の閾から奥へは遠慮して這入ろうともしない魚芳。郷里から軍服を着て千葉を訪れ、(ウ)晴れがましく顧客の歯医者で手当してもらう青年。そして、遂に病躯をかかえ、とぼとぼと遠国から帰って来る男。……ぎりぎりのところまで堪えて、郷里に死にに還った男。私は何となしに、また(注20)魯迅の作品の暗い翳を思い浮べるのであった。

終戦後、私は郷里にただ死にに帰って行くらしい疲れはてた青年の姿を再三、汽車の中で見かけることがあった。……

（注）
1 彼は早速顔をのぞけ ――「彼は早速顔をのぞかせ」の意。
2 一里 ――里は長さの単位。一里は約三・九キロメートル。
3 逢遭 ――出会い。
4 露次 ――ここでは、家と家との間の細い通路。「露地」「路地」などとも表記される。
5 日華事変 ――日中戦争。当時の日本での呼称。
6 三尺 ――尺は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。
7 御用聞 ――得意先を回って注文を聞く人。
8 教練 ――軍事上の訓練。
9 になえつつ ――銃を肩にかけること。また、その姿勢をさせるためにかけた号令でもあった。
10 入営 ――兵務につくため、軍の宿舎に入ること。
11 赤襷 ――ここでは、召集令状を受けて軍隊に行く人がかけた赤いたすき。
12 鞠躬如として ――身をかがめてかしこまって。
13 女中 ――ここでは、一般家庭に雇われて家事をする女性。当時の呼称。
14 写真が満洲から送って来た。――「写真が満洲から送られて来た。」の意。
15 北支 ――中国北部。当時の日本での呼称。
16 除隊 ――現役兵が服務解除とともに予備役（必要に応じて召集される兵役）に編入されて帰郷すること。
17 倉皇として ――急いで。
18 新京 ――現在の中国吉林省長春市。いわゆる「満洲国」の首都とされた。
19 吏員 ――役所の職員。
20 魯迅 ――中国の作家（一八八一――一九三六）。本文より前の部分で魯迅の作品に関する言及がある。

問1 傍線部ア）～ウ）の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア） 興じ合っている
① 互いに面白がっている
② 負けまいと競っている
③ それぞれが興奮している
④ わけもなくふざけている
⑤ 相手とともに練習している

（イ） 重宝がられる
① 頼みやすく思われ使われる
② 親しみを込めて扱われる
③ 一目置かれて尊ばれる
④ 思いのままに利用される
⑤ 価値が低いと見なされる

(ウ) 晴れがましく

① 何の疑いもなく
② 人目を気にしつつ
③ 心の底から喜んで
④ 誇らしく堂々と
⑤ すがすがしい表情で

問2 傍線部A「そうした、暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と障ったまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かった。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 生命の危機を感じさせる事態が続けざまに起こり恐怖にかられた「私」は、妻との思い出に逃避し安息を感じていた。
② 身近な人々の相次ぐ死に打ちのめされた「私」は、やがて妻との生活も思い出せなくなるのではないかとおびえていた。
③ 世の中の成り行きに閉塞感を覚えていた「私」は、妻と暮らした記憶によって生活への意欲を取り戻そうとしていた。
④ 戦局の悪化に伴って災いが次々に降りかかる状況を顧みず、「私」は亡き妻への思いにとらわれ続けていた。
⑤ 思うような連絡すら望めない状況にあっても、「私」は妻を思い出させるかつての交友関係にこだわり続けていた。

問3 傍線部B「何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった」とあるが、「私」がこのとき推測した妻の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 魚芳たちが「になえつつ」を練習する様子に気のはやりがあらわで、そうした態度で軍務につくならば、彼らは生きて帰れないのではと不安がっている。
② 皆で明るく振る舞ってはいても、魚芳たちは「になえつつ」の練習をしているのであり、以前の平穏な日々が終わりつつあることを実感している。
③ 「になえつつ」の練習をしあう様子に、魚芳たちがいだく期待を感じ取りつつも、商売人として一人前になれなかった境遇にあわれみを覚えている。
④ 魚芳たちは熱心に練習してはいるものの、「になえつつ」の姿勢すらうまくできていないため、軍務についたら苦労するのではと懸念している。
⑤ 魚芳たちは将来の不安を紛らそうとして、騒ぎながら「になえつつ」の練習をしているのだが、そのふざけ方がやや度を越していると感じている。

問4 傍線部C「彼はかしこまったまま、台所のところの閾から一歩も内へ這入ろうとしないのであった」とあるが、魚芳は「私達」に対してどのような態度で接しようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 戦時色が強まりつつある時期に、連絡せずに「私達」の家を訪問するのは兵長にふさわしくない行動だと気づき、改めて礼儀を重んじようとしている。

② 再び魚屋で仕事ができると思ってかつての勤め先に向かう途中に立ち寄ったので、台所から上がれという「私達」の勧めを丁重に断ろうとしている。

③ 「私達」に千葉に戻るのを楽しみだと言いつつ、除隊後新潟に帰郷したまま連絡を怠り、すぐに訪れなかったことに対する後ろめたさを隠そうとしている。

④ 「私達」と手紙で近況を報告しあっていたが、予想以上に病状が悪化している「妻」の姿を目の当たりにして驚き、これ以上迷惑をかけないようにしている。

⑤ 除隊後に軍服姿で「私達」を訪ね、姿勢を正して笑顔で対面しているが、かつて御用聞きと得意先であった間柄を今でもわきまえようとしている。

問5 本文中には「私」や「妻」あての手紙がいくつか登場する。それぞれの手紙を読むことをきっかけとして、「私」の感情はどのように動いていったか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 妻の死亡通知に対する悔み状(2行目)を読んで、紋切型の文面からごく少数の知己とでさえ妻の死の悲しみを共有しえないことを知った。その後、満洲にいる魚芳から返信が来ないという些細なことが気掛かりになる。やがて魚芳とも悲しみを分かち合えないのではないかと悲観的な気持ちが強まった。

② 川瀬丈吉からの封書(12行目、112行目)を読んで、川瀬成吉が帰郷の一週間後に死亡していたことを知った。生前の魚芳との交流や彼の人柄を思い浮かべ、彼の死にやりきれなさを覚えていく。終戦後、汽車でしばしば見かけた疲弊して帰郷する青年の姿に、短い人生を終えた魚芳が重なって見えた。

③ 満洲から届いた便り(76行目)を読んで、魚芳が入営したことを知った。妻が送った防寒用の毛の帽子をかぶる魚芳の写真が届き(78行目)、新たな環境になじんだ様子を知る。だが、すぐに赴任先が変わったので、周囲に溶け込めず立場が悪くなったのではないかと心配になった。

④ 北支から届いた便り(81行目)を読んで、魚芳がもうすぐ除隊になることを知った。そこには千葉に戻って魚屋で働くことを楽しみにしているから帰ったらよろしくお願いするとあった。この言葉から、時局を顧みない楽天的な傾向が魚芳たちの世代に浸透しているような感覚にとらわれていった。

⑤ 新京から届いた便り(105行目)を読んで、川瀬成吉が満洲の吏員に就職したらしいことを知った。妻が内地での生活難を訴えると、それに対してまるで他人事のように語る返事が届いた。あれほど内地を恋しがっていたのに、役所に勤めた途端に内地への失望感を高めたことに不満を覚えた。

問6 この文章中の表現に対する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

① 2行目「魚芳」は川瀬成吉を指し、24行目の「魚芳」は魚屋の名前であることから、川瀬成吉が、彼の働いている店の名前で呼ばれている状況が推定できるように書かれている。

② 1行目「私は一九四四年の秋に妻を喪った」、17行目「私がはじめて魚芳を見たのは十二年前のことで」のように、要所で時を示し、いくつかの時点を行き来しつつ記述していることがわかるようにしている。

③ 25行目「ブラブラと」、29行目「ニコニコ」、35行目「のそのそと」、118行目「とぼとぼと」と、擬態語を用いて、人物や動物の様子をユーモラスに描いている。

④ 37～39行目に記された宿なし犬との関わりや68～75行目の鴨をめぐるエピソードを提示することで、魚芳の人柄を浮き彫りにしている。

⑤ 49行目「南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる」という部分は、「午後」を修飾し、思索に適さない様子を印象的に描写している。

⑥ 77行目「私の妻は発病し」、80行目「妻の病気は二年三年と長びいていたが」、83行目「病妻」というように、妻の状況を断片的に示し、「私」の生活が次第に厳しくなっていったことを表している。

22 文学的文章〈中心心理〉

次の文章は、山田詠美の小説「眠れる分度器」の一節である。主人公の時田秀美は転校してきて一か月になる。秀美は、子供を親の価値観でしばりつけたくないと考える母親のもとに育った。彼はいつも自分の感じたままに行動してしまうため、教室全体の協調性を重んじる担任の奥村の気持ちをことごとく逆なでしてしまうし、クラスの子供たちとも親しくなれないでいる。そんなある日、教室で、奥村から「このままだと不良になってしまうぞ」と言われて、秀美は立ち上がって反発する。本文はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

他の子供たちは、強烈な事件の成り行きを(ア)固唾を呑んで見守っていた。子供が教師に逆らうというのを彼らは、初めて、目撃したのだった。彼らにとって、教師は、自分たちの上に君臨する脅威に等しかった。彼らは、教師を漠然と恐れていた。その恐れを少なく感じさせる教師程、彼らの好意をものにすることが出来たが、その分、威厳は失われた。恐れるということは、従うということだった。彼らは、従うことが、どれ程、学校での生活を快適にするかという知恵を身につけていた。両親の口振り、特に母親のそれは、教師の領域を犯してはいけないのを、子供たちに常に悟らせているのだった。そこに、「尊厳に値するもの」というラベルの扱い方を、上手い具合に、組み込んでいた。それ故、子供たちは、そのラベルを剥がすのが、自分に困難をもたらすことに等しいと、本能的に悟っていた。

親しみ深い教師は、何人も存在していた。彼らを見つけ出すたびに、そっと、子供たちは、ラベルを剥がしてみる。そのことが、教師を喜ばせ、休息を伴った自らの地位の向上に役立つのを知っていたからだ。しかし、糊は、いつも乾かさないように注意している。生あたたかい唾を広げて、不都合を察知すると、すぐに、(イ)休息を封印する。

教師に忌み嫌われる子供は、その方法を、知らないのだった。習得してしまえば、これ程便利なものの存在に気付いていないのだった。鈍感さのために。あるいは、知ろうとしない依怙地さのために。A賢い子供たちは、前者を見下し、後者を排斥する。すると、不思議な優越感に身を浸すことが出来る。優越感は、連帯意識を育て、いっそう強固になって行く。そうなると、もう、それを捨てることが出来なくなる。恐いのだ。教師に対して持つ脅威よりも、はるかに、連帯から、はじき出されることに対する脅威の方が大きいのだ。

子供たちは、とうに、秀美を排斥しつつあったが、このような事件に遭遇すると、混乱し

て言葉を失ってしまうのだった。秀美が何の役にも立たない勇気を意味なく誇示しているように思われた。そこまでして、B彼が、何を証明したいのかを理解するには、子供は子供であり過ぎる。そして、彼を理解しようと試みるには、子供は、あまりにも大人のやり方を学び過ぎていた。

他の子供と自分は違う。この事実に、秀美は、とうに気付いていた。自分の物言いや態度が、他人を苛立たせるのも知っていた。そのことで、彼は、たびたび孤独を味わっていたが、自分には、常に支えてくれる母親と祖父が存在しているという安心感が、それを打ち消していた。打ち消して、それでも、まだ溢れてくる力強さを、保護者の二人から感じていた。そう思うと、学校での出来事など、取るに足りないことのようにすら思えてくる。彼は、自分の帰る場所に存在している大人たちから、自分の困難が、成長と共に減って行くであろうことを予測していた。それは、時間の流れに沿って泳いで行けば、たちまち、同種の人間たちに出会うだろうという確信に近いものをもたらした。

過去は、どんな内容にせよ、笑うことが出来るものよ。母親は、いつも、そう言って、秀美を落ち着かせた。自分の現在は、常に未来のためのものだ。彼は、そう思った。そして、ある堤防まで辿り着いた時に、現在は、現在のためにだけ存在するようになるのを予感した。堤防を越えようとする時、その汗のしたたりは、(ウ)現在進行形になる筈だ。それまでは、どのような困難も甘受するのが、子供の義務だと、彼は思った。くだらない教師に出会うのは身の不運、素晴らしい教師に出会うのは、素晴らしい贈り物。彼は、そう自分に言いきかせる。すると、必ず、心の内に、前の小学校の白井教頭の顔が浮かぶのだった。

秀美は、祖父の次に白井教頭を愛していた。彼は、子供たちに、自分を見くびらせるという高等技術をもって接していた。けれど、誰も、本心から白井を見くびる者はいなかった。見くびらせて子供と親しくなろうという魂胆を持った教師は、少なくなかったが、子供たちは、うわべのたくらみは、すぐに見抜いた。好かれようと子供に媚を売るのではなく、子供たちと同じ視線でものを見てみたいという、純粋な欲望から、彼は自らを気やすい者に仕立てていたのだった。そして、その姿勢は、好ましいものに、子供たちの目には映った。子供たちの世界で、やはり、嘘は罪であり続けるのだった。

秀美と数人の仲間は、休み時間や放課後、用もないのに、校長室の前をうろついた。そこに、白井教頭がいることが多いからだった。運良く、校長が不在の時、彼らは、中に入り、白井と話をすることが出来た。

秀美は、彼に、こんな質問をしたことがある。

「生きてるのと、死んでるのって、どう違うんですか？」
白井は、笑って、秀美を見詰めた。秀美の連れていた他の子供たちも、興味津々という表情を浮かべて彼の答えを待っていた。
「先生は死んだことないから、正確なことは解らんが、考えてみることは出来るぞ。きみたちは、どう違うと思う？」
子供たちは、口々に、叫んだ。
「心臓が止まっちゃうこと！」
「お墓が自分の家になること！」
「息が止まること！」
「えーと、えーと、天国の住人になること！」
「ばーか、おまえなんか、地獄に行くんだい」
「冷たくなって、動かなくなること！」
「食べ物を食べなくてもすむこと。ピーマンを食べなくてすむんだ」
「お墓にピーマンを入れてやるよ」
「うるせえ」
まあまあ、と言うように、白井は、子供たちを制した。
「なかなか、当たってるかもしれないぞ。でもな、心臓が止まっても呼吸が止まっても、お医者さんは、死んだと認めないこともあるんだぞ。それだけでは、生き返る場合もある」
白井の言葉に衝撃を受けて、子供たちは、顔を見合わせていた。信じられなかった。どうやら、死ぬのには、色々な条件があるらしい、と悟ったのは、この時が初めてだった。
「先生は、どう思うんですか？」
秀美は、もどかしそうに尋ねた。すると、C微笑を浮かべて、白井は、自分のワイシャツの袖をまくり上げて、腕を出した。
「先生の腕を噛んでみる勇気のある奴はいるか？」
意外な質問に、子供たちは、驚いて言葉を失っていた。
「ぼく、やります！」
秀美は、呆気に取られる仲間たちを尻目に、いきなり、白井の腕に噛みついた。
「もっと、もっと、手加減しないでいいぞ。なんだ、時田、おまえの歯は入れ歯か？　ちっとも、痛くないぞ」
秀美は、むきになって、上顎に力を入れた。白井は、さすがに、苦痛を感じたらしく、顔

を歪(ゆが)めた。
「いててて、降参、降参、すごいりっぱな歯だな、時田のは」
白井は、ゆっくりと、力を抜いた秀美の口を、腕から外した。そこには、歯の跡がくっきりと付き、血が滲(にじ)んでいた。
「わあ、血が出てる」
誰かが呟(つぶや)いた。秀美は、自分の唇を指で拭(ぬぐ)った。口の中が生あたたかく、錆(さ)びたような味が漂っていた。
「どうだ、時田、先生の血は？」
「あったかくって、ぬるぬるします。変な味がする」
「それが、生きているってことだよ」
白井の言わんとすることを計りかねて、子供たちは顔を見合わせた。秀美は、軽い吐き気をこらえながら、白井の次の言葉を待った。
「生きてる人間の血には、味がある。おまけに、あったかい」
「じゃ、死ぬと味がなくなっちゃうんですか？」
「そうだよ。冷たくて、味のないのが死んだ人の血だ」
へえっと、驚きの声が上がった。
「だからな、死にたくなければ、冷たくって味のない奴になるな。いつも、生きてる血を体の中に流しておけ」
「どうやったら、いいんですか？」
「そんなのは知らん。自分で考えろ。先生の専門は、社会科だからな。あんまり困らせるな。それから、時田、このことも覚えとけ。あったかい血はいいけど、温度を上げ過ぎると、血が沸騰して、血管が破裂しちゃうんだぞ」
秀美は、曖昧(あいまい)に頷(うなず)いた。彼は、舌に残る血の味を何度も反芻(はんすう)していた。味のある血。この言葉を、もしかしたら、自分は、生涯、忘れることはないのではないか。そんな予感が胸をかすめた。吐き気は、もう、とうに治まっていた。それどころか、D喉(のど)に移行する不思議なあたたかさを、いとおしくさえ思っていた。

問1 傍線部ア～ウの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア） 固唾を呑んで

① 声も出ないほど恐怖に怯えながら
② 何もできない無力さを感じながら
③ 張りつめた様子で心配しながら
④ 驚きと期待を同時に抱きながら
⑤ 緊張した面持ちで不快に思いながら

（イ） 休息を封印する

① 子供が教師から「尊厳に値するもの」という威厳を奪いとること
② 子供と教師が互いを「尊厳に値するもの」と認めて連帯し合うこと
③ 子供と教師が互いを「尊厳に値するもの」と認め合う関係を放棄すること
④ 子供が教師を「尊厳に値するもの」としての存在に復帰させること
⑤ 子供が自分を「尊厳に値するもの」として級友に認知させること

（ウ） 現在進行形

① 未来のために現在を越えようとする状態
② 現在を生きること自体が目的である状態
③ 現在が現在のままであり続ける状態
④ 現在が未来に向けて開かれている状態
⑤ 未来が現在の困難を癒やしてくれる状態

問2 傍線部A「賢い子供たちは、前者を見下し、後者を排斥する」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 教師を喜ばせるための秘訣を知っている子供たちは、クラス内で自分の地位を向上させようとしない子供を見下し、教師の言うことを聞かない意地っ張りな子供を排斥するということ。

② クラス内で安定した地位を占めることができた子供たちは、自分たちに媚びる子供を見下し、頑に自分たちに反抗する態度をとり続ける子供を排斥するということ。

③ 自分が教師よりも利口だと思っている子供たちは、無神経に教師の領域を犯してしまう子供を見下し、いつまでも子供らしいままでいようとする人間を排斥するということ。

④ 学校での生活を快適にするための術を心得ている子供たちは、表立って教師に逆らうような子供を見下し、クラスの連帯意識の重要性に気がつかない子供を排斥するということ。

⑤ 教室の中でうまく立ち回るための知恵を身につけている子供たちは、教師との関係に対して不器用な子供を見下し、自己主張を曲げない子供を排斥するということ。

問3 傍線部B「彼が、何を証明したいのか」とあるが、ここで「彼」が明らかにしたかったのは、どのようなことと考えられるか。本文全体の内容をふまえて、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 自分たちは、学校という場に拘束されており、子供であるということを理由にどれほど教師の脅威にさらされ、個人としての人権を無視されているかということ。

② 担任の奥村が、子供たちと同じ視線でものを見ていきたいという純粋な欲望を持ち、血の通った人間として互いに接しあえる教師であるかどうかということ。

③ 都合のいいときだけ子供の世界に歩み寄ろうとする担任の奥村のやり方は、教師としてふさわしくないのだから、自分が反抗するのは正当な行為だということ。

④ 時が過ぎればどんなことも笑い飛ばすことができるようになると言って自分を安心させてくれた母親の言葉が、学校という場でも通用するかどうかということ。

⑤ 担任の奥村は、クラス全体に自分の考え方を浸透させるために、わざと自分を見くびらせて子供と親しくなろうという魂胆を持った教師であるということ。

問4 傍線部C「微笑を浮かべて、白井は、自分のワイシャツの袖をまくり上げて、腕を出した」とあるが、この白井の行動にはどのような気持ちが込められているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 秀美には自分の中に興味や疑問が生じると性急に答えを求めたがる傾向がある。そんな彼のことを好ましく思いながらも、秀美の心のはやりをなだめ、一緒にみんなで考えるきっかけをつくろうとする気持ち。

② 心臓や呼吸が止まっただけでは人間の死とはいえないという話をしたことで、子供たちの表情はそれまでにない真剣なものに変わった。そこで、この場を利用して子供たちに人間の生命の大切さを理解させようとする気持ち。

③ 子供たち自身でものを考えるように会話をしむけることで、とりあえず子供たちの興味を引きつけることはできた。しかし、秀美だけは納得がいかない表情なので、わざと彼の勇気を試すようなものの言い方をして挑発する気持ち。

④ 人間の生と死にまつわる問題を子供たちと考えるのだから、いいかげんな理屈ではぐらかすわけにはいかない。だが、子供たちの目の前で、どうしたら生きていることの証(あかし)を見せてやることができるだろうかと思案する気持ち。

⑤ 好奇心が旺盛(おうせい)なくせに、普段は子供たちの仲間に入っていけない秀美が、いまやっと心を開こうとしている。絶好の機会だから、もっと彼の注意を引きつけて、人と人とが深く関(かか)わっていくことの楽しさを教えようとする気持ち。

問5　傍線部D「喉に移行する不思議なあたたかさを、いとおしくさえ思っていた」とあるが、ここでの「いとおし」さとは、どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 自分はいままで親しみを持てる教師と出会うことがなかったため、学校のなかではいつも孤独だったが、白井によってはじめて生きるということの意味を教えられた。ここでの「いとおし」さとは、素晴らしい先生との出会いの感動をいつまでも忘れたくないという気持ちである。

② 温度を上げ過ぎると、血管が破裂するぞという警告を受けて、秀美ははじめて自分がいかに学校内で先走った態度をとっていたかを思い知らされた。ここでの「いとおし」さとは、こうして新たに成長した自分を大切にしようとする気持ちである。

③ 喉を過ぎていく血のあたたかさを通して、秀美は、それが自分の体内にも流れており、結局、人間はみな平等なのだということを悟った。ここでの「いとおし」さとは、白井とのやりとりのなかで気づくことのできたその感動を、記憶にとどめたいという気持ちである。

④ 多くの教師たちは、うわべだけのやさしさを漂わせながら子供たちの世界に侵入してきたが、白井だけは本気で自分を心配してくれた。ここでの「いとおし」さとは、そんな白井の存在をいつまでも身近なものとして感じていたいと思慕する気持ちである。

⑤ はじめは錆びたようにしか感じられなかった血の味が、しだいに生きていることを実感させる味へと変化してきた。ここでの「いとおし」さとは、白井の教えを通して、生命のもっているあたたかさにふれた喜びを大切にしたいという気持ちである。

問6 本文の特徴を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 教師にうまく対応できる微妙なバランス感覚にすぐれた子供が優越感を抱き、それに従わなければ排斥されるようなクラスの人間関係を、子供本来のあり方から逸脱するものとして批判的にとらえる主人公の心理が描かれている。

② くだらない教師たちとの出会いを身の不運と考え、教室の中ではそれを甘んじて受け入れようとしながらも、思わず血を沸騰させて、担任の奥村に逆らう主人公の心情が、回想場面をまじえながら描かれている。

③ 大人のやり方をまねてクラス内での地位向上をはかろうとする子供たちのずるさを敏感に見抜き、自分自身が成長していくことで、そのような嘘の世界に見切りをつけてやろうと考えている主人公の姿が描かれている。

④ 教師の権威に屈服しつつ集団の連帯意識を強めようとする子供たちの世界を、未来のために越えなければならない堤防のようなものと考えていた主人公が、周囲の人々の愛情に支えられて成長へのきっかけをつかむ姿が描かれている。

⑤ 教師に貼(は)りつけるラベルの扱い方や、子供たちの連帯意識からはじき出される孤独感には無頓着で、自分自身の信念にもとづいて独自の立場を堅持していこうとする主人公の意思が、具体的なエピソードを通して巧みに描かれている。

(note)

23 論理的文章　頻出テーマ〈自然観〉

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本の庭は時間とともに変化し、推移することが生命なのだ。ある形を凍結させ、永久に動かないようにとの(ア)キネンを籠めた、(イ)キネンヒ的な造型が、そこにあるわけではない。不変の形を作り出すことが芸術の本質なら、変化を生命とする日本の庭は、およそ芸術と言えるかどうか。これは少なくとも、ヨーロッパ式の芸術理念とは違った考えに基づいて、作り出され存在しているもののように思われる。

私たち日本人の多くは、少なくとも戦後の住宅難からアパート暮らし、団地暮らし、マンション暮らしが一般化するまでは、規模の大小にかかわらず、日本式の庭または庭らしい空間を伴った家に住んでいた。庭らしい空間というのは、庭を持たない家でも、物干し場や張り出しの手摺りや軒下などの僅かな空間を利用しては、鉢植や盆栽を並べたり、蜜柑箱や石油缶などに土を入れてフラワー・ボックスに仕立てたり、庭の代用物を作ることに執心するいじましい心根を持っているからである。

そういう心根の大本をたずねると、日本人が古来、人間の生活と自然とを連続したものと受け取り、自然を対象化して考える傾向のなかったことに気づく。それは(ウ)セイフクすべき対象ではなく、その中に在って親和関係を保つべきものであった。あるいは草木鳥獣虫魚から地水火風に到るあらゆるものと、深い「縁」を結ぶことによって生きるという考え方である。それらの生物も無機物も、あるいは自然界のあらゆるものを、魂と命とを持ったものとして心を通わせ、畏れ親しんだアニミズムの思想、あるいは心情があった。

ヨーロッパ式の庭園は、左右相称で、幾何学的図形をなしている花壇や、やはり幾何学的図形を石組で作り出し、中央に噴水を出した泉水や、丸く刈り込んだ樹木や大理石その他の彫刻を置いた、よく手入れされた芝生など、人間の造型意志をはっきり示しているところに特色がある。それは最初に設計した人の手を離れた時、一つの完成に達しているのであって、その後手入れさえ施していればそのまま最初の形を保持して行くことが出来ると考えた。

庭園において動かない造型を作り出すということは、彫刻や絵画や建築や、ヨーロッパ流の芸術理念を作り出しているそれらのジャンルに準じて、庭園も考えられているということである。

ところが、日本では作庭をも含めて、ことに中世期にその理念を確立したもろもろの芸術——たとえば茶や生花や連歌・俳諧など——においては、永遠不変の造型を願わないばかり

か、一瞬の生命の示現を果たしたあとは、むしろ消え去ることを志向している。不変とは、ピンで刺した揚羽蝶の標本のように、そのまま死を意味する。それに反して変化こそ、生なのである。西洋の多くの芸術が志向するものが永遠に変わることのない、美しい堅固な形であるなら、日本のある種の芸術が志向するものは移って止まぬ生命の輝きなのである。生命が日本の芸術、この場合は日本の庭の、根本に存在する標しなのだ。

私はそれら日本の芸術家たちに、自分の作品を永遠に残そうという願いが、本当にあったかどうかを疑う。ヨーロッパ流の芸術観では、芸術とは自然を素材にして、それに人工を加えることで完成に達せしめられた永遠的存在なのだから、A造型し構成し変容せしめようという意志がきわめて強い。それが芸術家の自負するに足る創造であって、それによって象徴的に、彼等自身が永生への望みを達するのである。

造型意志が極端に弱いのが、日本の芸術である。日本における美の使徒たちに、そのような意志が微弱にしか育たなかったのは、やはり日本人が堅固な石の家にでなく、壊れやすく(エ)クちやすく燃えやすい木の家に住んでいることに由来しているかも知れない。彼等は自分たちの生のあかしとしての造型物を、後世に残そうなどとは心がけなかった。

たとえば、生花とは造型なのか。たとえそこにいくらかの造型的要素があったとしても、それが生花の生命であり、目標であるのか。馬鹿らしい。彫刻や絵画が永遠の造型を目ざしているのに、花というはかない素材で何を造型しうるというのか。一ときの美しさを誇ってたちまち花は散るのである。散るからこそ花は美しく、そこに生きた花の短い命との一期の出会いを愛惜することが出来る。B造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である。

あるいはまた、主と客とが一室に対座して、一服の茶を喫することに、形を残そうとの願いがいささかでも認められようか。茶室や茶庭や茶碗や茶匙や(注1)茶掛などに、ある造型が認められるとしても、それが茶の湯の目的なのではない。一服の茶を(オ)バイカイとして、そこに美しく凝縮し純化した時間と空間とが作り出されたら、それは客に取っても主に取っても、何物にも替えがたい最高度の悦楽で、それこそ生涯の目標とするに足る、輝かしい生命の発露、一期一会の出会いであった。

造型意志を極小にまで持って行った文学は、十七字の発句であろう。だが、芭蕉は発句よりも(注2)連句に、自分の生きがいを覚えた。連句はそれこそ自分一個のはからいを極微に止めて、あとはなりゆく自然のままに自分を委ねてしまった文学なのだ。座の雰囲気の純一化が連句を付け合う者たちの楽しみであって、(注3)文台引き卸せば即ち反古とは、芭蕉の日ご

ろの覚悟であった。残された懐紙は、座の楽しみの粕に過ぎなかった。自己を没却し、自然のままに随順し、仲間と楽しみを一つにするところに、やはり茶会と同じ、一期一会の歓びがあった。

では庭は、どのような意味で、日本の芸術であったのか。

日本の代表的な庭園とされている一つに、(注4)龍安寺方丈の石庭がある。一樹一草も使わず、大小十五の石が五十余(注5)坪の地に置かれ、一面に白砂を敷きつめただけの庭で、庭全体が海面の体相をなし、巌が島嶼に準えられ、一見する者は誰しも精神の緊張を覚える。この庭は外国人にもひどく感動を与えるらしく、ことにアメリカにはこの形を模した石庭がいくつも作られているという。だが、それが龍安寺の石庭と似ても似つかぬものであったとしても、致し方もない。

石庭といえば、日本の庭の代表のように言われているのは、どういう理由によるのだろう。Cこの庭の絶賛者の一人に志賀直哉氏がある。氏は言う。「これ程に張り切った感じの強い、広々した庭を自分は知らない。然しこれは日常見て楽しむ底の庭ではない。楽しむにしては余りに厳格すぎる。しかも吾々の精神はそれを眺める事によって不思議な歓喜踊躍を感ずる」(『龍安寺の庭』)。

大正十三年に書かれたこの文章が、この庭を一躍有名にし、その後賛美者の列がつづき、中には石の配置にことさらな意味づけを見出そうとする哲学好きも多かった。私もまた、志賀氏の文章によって、龍安寺の庭の美を知った一人だが、論者のその意味づけのうるささに何時か嫌悪を覚えるようになり、これが果たして日本の庭を代表する傑作なのかと、いくばくの疑いを抱くようになった。

志賀氏はまた次のように言っている。「(注6)相阿弥が石だけの庭を残して置いて呉れた事は後世の者には幸いだった。木の多い庭ではそれがどれだけ元の儘であるか後世では分からない。例えば(注7)本法寺の(注8)光悦の庭でも中の『(注9)八ッ橋』を信じられるだけで、他は信じられない。そういう意味で龍安寺の庭程原形を失わぬ庭は他にないだろう。此庭では吾々は当時のままでそれを感ずる事が出来る」(同)。

この一文は、石庭を相阿弥の作と想定して、ほぼその最初に作られたままの姿で今日といえども存在していることを、今日の鑑賞家である自分たちにとって幸いだとしているのである。変化してやまぬ草木が一本もないのだから、作者が最初に置いた石の配置さえ動かさなければ、それは原形を失っていないはずだし、それを相阿弥の庭としてまじり気なく受け取

60 65 70 75 80 85

ることが出来ることになる。

だが志賀氏はここで、作者(相阿弥と想定して)の意図が、そのままの形で今日のわれわれに伝わることを、どうして幸いとしたのであろう。ここにはやはり、永遠不変のキネンヒ的な造型物を志向するヨーロッパ流の芸術理念の上に、飽くまでも作者の個の表現としての作品を重んずる近代風の考えが重なっているのではなかろうか。そのような点から考えれば、龍安寺の石庭は、変化することのない堅固な素材だけで作られていて、それはヨーロッパ風の芸術理念から言っても、何等躓きとなる要素はない。だが、日本の庭の多くは、作られた瞬間に、歳月による自然の変化に委ねられ、その結果庭は日々に成熟を加えて行く。言わばそれは、芭蕉の言葉にあるように、「造化にしたがひ、造化にかへる」(『笈の小文』)ことを理想としている。芸術という熟語はアートの訳語として作られたものだが、術の字はやはり手わざであり、人工であって、造化(自然)に随うという東洋古来の理念を含んでいない。

この庭は一定の空間を切り取ってその中に石を配置し、それを方丈から見るものとして対象化したところに成立している。それは見るためだけの庭であって、その意味では額縁によって切り取られた絵と変わりはない。だが日本の多くの庭は、主の生活に融けこんで、その中に自由に出入りすることの出来る空間であって、見るものとして対象化された作品ではない。生命を持ち、変化する草木を一本も植えこんでいないこの庭は、思わくありげな、抽象的図形で、たまたま客人として鑑賞する立場に立てば、誰しも一種の緊迫した気分に誘いこまれるだろう。だが、この寺に住まい、朝夕この庭と対している住持の立場に立てばどうなのか。このような、つねに人に非常の時間を持することを強い、日常の時間に解放することのない緊張した空間に堪えるには、人は眼を眠らせるより仕方がない。それは毎日それと共にあるには、あまりに息づまるような、窮屈きわまる庭なのである。日本の多くの庭の、人の気持をくつろがせ、解き放ち、嬉戯の心を全身にみなぎらせてゆくような要素が、ここにはない。志賀氏が「これは日常見て楽しむ底の庭ではない。楽しむにしては余りに厳格すぎる」と言ったのは、この間の機微を言っているものだと思う。庭が人の住む建築物に付属するものであるかぎり、Dこの非日常性は例外と言うべきである。

(山本健吉「日本の庭について」による)

(注)

1　茶掛――茶席に掛ける掛軸など。

2　連句――五・七・五の長句と、七・七の短句を一定の法則の下に交互に付け連ねる俳諧の一形式。

3　文台引き卸せば即ち反古――文台は句会の中心となる台で、短冊や懐紙をのせる。反古は用済みの紙。
4　龍安寺方丈――龍安寺は京都市にある臨済宗の寺。方丈は、住持(住職)の居間。
5　坪――土地面積の単位。一坪は、約三・三平方メートル。
6　相阿弥――室町後期の画家で、造園にもすぐれていた。
7　本法寺――京都市にある日蓮宗の寺。
8　光悦――本阿弥光悦。江戸初期の美術家・工芸家。
9　八ッ橋――ここでは、本法寺にある、池に沿って八角形に敷石を並べたものを指す。

問1　傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　キネン
① 必勝をキガンする
② 投票をキケンする
③ 運動会のキバ戦
④ 開会式のキシュをつとめる
⑤ 仕事がキドウにのる

(イ)　キネンヒ
① ヒガイを食い止める
② ヒキンな例を取り上げる
③ 委員長をヒメンする
④ ヒブンを刻む
⑤ 国家がヒヘイする

(ウ)　セイフク
① 時間をギセイにする
② 日程をチョウセイする
③ 敵にセンセイ攻撃を加える
④ イッセイに開花する
⑤ 海外エンセイを取り止める

(エ)　クち
① 真相をキュウメイする
② 試験にキュウダイする
③ カイキュウ差別をなくす
④ 問題がフンキュウする
⑤ フキュウの名作

（オ）バイカイ

① 野菜をサイバイする
② バイショウ責任を求める
③ 実験にショクバイを用いる
④ バイシン員に選ばれる
⑤ 興味がバイカする

問2 傍線部A「造型し構成し変容せしめよう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 変化し続ける自然を作品として凍結することにより、一瞬の生命の示現を可能にさせようとすること。
② 時間とともに変化する自然に手を加え、永遠不変の完結した形をそなえた作品を作り出そうとすること。
③ 常に変化する自然と人間の生活との親和性に注目し、両者を深い「縁」で結んだ形の作品を創造しようとすること。
④ 変化こそ自然の本質だとする考えを積極的に受け入れ、消え去った後も記憶に残る作品を作り上げようとすること。
⑤ 芸術家たちの造型意志によって、自然の素材の変化を生かしつつ、堅固な様式の作品に再構成しようとすること。

問3 傍線部B「造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である」とあるが、筆者は、この生花に続けて、茶の湯、連句の例を挙げている。それは「一期の出会い」を踏まえた上で、日本の芸術のどのような点を強調するためか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 花の命の短さ、茶の湯の主客の対座、連句の中の発句のもつ十七字という極小の単位などにしぼって、芸術における簡素さを強調するため。
② 生花をともに愛（め）でる場、茶の湯の主客の対座、連句の座のうちの楽しい雰囲気を取り上げて、芸術における人間関係の豊かさを強調するため。
③ 花の短い命、茶の湯の対座、連句を楽しむ時間の短さに注目して、表現された形よりも芸術における刹那（せつな）性を強調するため。
④ 花の短い命と向き合うことと、茶の湯の対座、仲間で作り合う連句の座とを重ねて、芸術における個の表現意識の弱さを強調するため。
⑤ 生花、茶の湯、連句を、人と物、人と人とが出会う場の価値にかかわらせて、芸術における空間性そのものを強調するため。

問4 傍線部C「この庭の絶賛者の一人に志賀直哉氏がある」とあるが、志賀が絶賛したのはなぜだと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 石と白砂だけが配置された庭の幾何学的な構図に、日本の庭には珍しいヨーロッパ的芸術理念の精巧な模倣を見出したからだと、筆者は考えている。

② 石と白砂だけに素材を限った簡潔で緊張した造型に、日本の芸術理念とヨーロッパの芸術理念との幸福な出会いを確認したからだと、筆者は考えている。

③ 石と白砂だけの一見無造作に見える景物の配置に、かえって切り取られた空間としての庭本来の魅力を強く感じたからだと、筆者は考えている。

④ 石と白砂だけで作り出された庭の純粋な空間の潔さに、一期一会の歓びにすべてをかける作者の覚悟を直感したからだと、筆者は考えている。

⑤ 石と白砂だけで実現された空間の造型性に、それを創造した作者の強固な意図がそのまま息づいていることを発見したからだと、筆者は考えている。

問5 傍線部D「この非日常性は例外と言うべきである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 日本の庭が、本来、変化を生命とし、そこに一期一会の歓びをもたらすものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、不変の様式美という芸術理念を追い求めるがゆえに、例外と位置づけられるということ。

② 日本の庭が、本来、歳月による自然の変化に委ねられるものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、相阿弥の庭として揺るぎない個の表現であるがゆえに、例外的に芸術の本道と位置づけられるということ。

③ 日本の庭が、本来、自然のたたずまいと一体化し、人をくつろがせるものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、緊張感をもって見ることを強いるがゆえに、例外と位置づけられるということ。

④ 日本の庭が、本来、人工でありながら自然に従うものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、ヨーロッパ風の芸術理念に即応した造型美のゆえに、例外的に芸術の本道と位置づけられるということ。

⑤ 日本の庭が、本来、四季の変化に人の生命のはかなさを感じさせるものであるなら、龍安寺方丈の石庭は、草木主体ではなく、生命なき石や砂からなる様式美のゆえに、例外と位置づけられるということ。

問6　本文は、空白行によって前後に分けられているが、本文の内容や展開の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 前半では日本の庭とヨーロッパの庭との差異を芸術理念の面から説明し、後半では一転して、感性の面から龍安寺の石庭を代表とする日本の庭とヨーロッパの庭との共通性に光を当てている。

② 前半ではヨーロッパの芸術理念と日本の芸術理念とを比較対照し、それを踏まえて後半では日本の芸術理念から見れば、龍安寺の石庭は日本の庭の例外として位置づけられると論じている。

③ 前半ではヨーロッパとは異なる日本の芸術の一般的な特徴について紹介し、その上で後半では両者の芸術理念の共通点に普遍性を認めつつ、龍安寺の石庭が日本の代表的な庭園たり得る理由を説明している。

④ 前半では庭以外の生花・茶道・連句などの芸術分野に広く触れているが、後半では日本の庭のみを取り上げ、特に龍安寺の石庭が日本の芸術理念を集約したものだとする論理展開になっている。

⑤ 前半ではヨーロッパと日本の芸術理念を比較して抽象的に論じているが、それに対して後半では日本の庭を例に挙げ、龍安寺の石庭が例外的に永遠不変性を得たことを具体的に論じている。

24 論理的文章　頻出テーマ〈歴史論〉

＊教材は当日配布です。

（note）

25 秋期講習　文学的文章・ポイント再確認

＊教材は当日配布です。

（note）

26 論理的文章　頻出テーマ〈近代論のまとめ〉

＊教材は当日配布です。

（note）

27 論理的文章　頻出テーマ〈科学論のまとめ〉

＊教材は当日配布です。

（note）

解答

春期

1　評論　論理読解〈構造〉把握

問1　ア＝⑤　イ＝④　問2　⑤　問3　①

2　評論　論理読解〈構文〉把握

【1】問1　ア＝②　イ＝⑤　問2　⑤　問3　③

【2】問　⑤　〈補問〉②

3　文学的文章　〈小説読解〉の基礎❶

【1】問1　ア＝④　イ＝⑤　ウ＝⑤　問2　④　問3　③

【2】問1　ア＝④　イ＝②　問2　④　問3　⑤

3　文学的文章　〈小説読解〉の基礎❷

問1　ア＝②　イ＝⑤　ウ＝④　問2　②　問3　⑤

1学期

5　論理的文章　〈展開を予想しつつ読む〉

問一　ア＝野蛮　イ＝規定　ウ＝萌芽　問二　ウ　問三　イ

6　評論　長文読解の思考回路

問1　ア＝③　イ＝①　ウ＝①　エ＝②　オ＝②　問2　③　問3　⑤

問4　⑤　問5　③　問6　i＝④　ii＝③

7　論理的文章　〈出題意図を意識する〉

【1】問1　ア＝①　問2　①

【2】問1　イ＝①　ウ＝④　問3　⑤　問4　③

【3】問1　エ＝⑤　オ＝③　問5　②　問6　④・⑤

8　文学的文章　〈設問への意識〉❶

問1　ア＝③　イ＝⑤　ウ＝⑤　問2　①　問3　④

問4　②　問5　②　問6　②・⑤

9　文学的文章　〈部分と全体〉❶

問1　④　問2　②　問3　③　問4　④

10　論理的文章　〈論理を捉える〉❶

問1　ア＝①　イ＝③　ウ＝⑤　エ＝④　オ＝③　問2　③　問3　④

問4　①　問5　⑤　問6　①・⑥

11　論理的文章　〈論理を捉える〉❷

問一　ア＝還元　イ＝光沢　ウ＝素朴　問二　③　(1)＝力学の対象　(2)＝経済学の対

問三　具体的対象の一回限りの経験を扱う文学は、対象を抽象化しその普遍的法則を扱う科学とは異なるということ。

問四　⑤

12　文学的文章　〈設問への意識〉❷

問1　ア＝④　イ＝⑤　ウ＝②　問2　④　問3　①

問4　④　問5　③

13　文学的文章　〈部分と全体〉❷

問1　⑤　問2　ア＝③　イ＝⑤　ウ＝①　問3　⑤

問4　④　問5　②　問6　③

夏期

14　評論　求められる思考回路❶

問1　ア＝変遷　イ＝叙事　ウ＝拡張

問2　③　問3　①

15　評論　求められる思考回路❷

問1　④　問2　②

16　文学的文章・小説　求められる思考回路❶

問1　②・⑥　問2　①　問3　③

問4　i＝②　ii＝①　問5　i＝①　ii＝⑤

17　文学的文章・小説　求められる思考回路❷

問1　ア＝②　イ＝②　問2　③

18　文学的文章・随筆　随筆読解のポイント

テストゼミのため非公表

2学期

19　論理的文章　頻出テーマ〈言語・認識〉❶

【1】問一　④　問二　⑤　問三　②

【2】②

20　論理的文章　頻出テーマ〈言語・認識〉❷

問一　イ＝B　ロ＝A　ハ＝B　ニ＝A　ホ＝B　問二　ハ

21　文学的文章　〈苦手な人が多い設問・表現叙述〉

問1　ア＝①　イ＝①　ウ＝④　問2　④　問3　②

問4　⑤　問5　②　問6　③・⑥

22　文学的文章　〈中心心理〉

問1　ア＝③　イ＝④　ウ＝②　問2　⑤　問3　②

問4　①　問5　⑤　問6　②

23　論理的文章　頻出テーマ〈自然観〉

問1　ア＝①　イ＝④　ウ＝⑤　エ＝⑤　オ＝③　問2　②　問3　④

問4　⑤　問5　③　問6　②

24〜27

テストゼミのため非公表